



ココに



あるもの

じゅしん

プロローグ～ココロにないもの～

名前に魔力を奪われる。魔力の研究をしていたお祖父ちゃん、間藤進一郎の発見だ。お祖父ちゃんは自分の子供だけでなく分家の子供にまで自ら名前を付け、実験をした。

魔力の底上げを図るには、魔力の代わりに差し出す何かの名前を借りればいい。それが名前に奪われるから。分家の恋さんは恋が理解できなくて恋を得られない。叔母の明おばさんは目が見えない。それは魔力を得た代償。ただ、恋さんは愛があるから家族はいて、明おばさんは魔法を使うから生活に支障はない。

私は間藤心。魔力の代わりに、心がない。

私のことを、従兄の喜お兄ちゃんは可哀想だと言うし両親は嬉しく誇りだと言う。でも私は、物事を全て事実として受け入れることしかできないから悲しいとは思わないし怒りもない。もちろん楽しくも嬉しくもない。

ただ、日本の魔法使いの貴族である間藤一族の中で魔力が一番多い。それが事実。そしてその事実ゆえに魔法学校の最高峰、エヴァンジェリン魔法学校に入学することになったのもまた、ただの事実なのだ。

1 話

初めての外国というのは、言葉の壁というものが立ち塞がってしまうようだ。しかし私にはその心配はない。不安や心配する心は元々ないが、そういう意味じゃなくしてお祖父ちゃんが言語を統一して聞こえるようになる魔法をかけてくれたので言葉の壁というものはない。

初めて外国に降り立った時、耳慣れない言葉が雑然としたノイズのようで耳が痛かった。お祖父ちゃんの魔法は効いていないのかと思っていたが、人々の意味不明な言葉が徐々に理解できるようになっていった。それがとても気持ち悪くて、頭の中がぐわんぐわんとシャッフルされているようだった。

大きな荷物を持ったまま空港でベンチに座り込んでいると、つばが広い深いグリーンの帽子をかぶった女の人が声をかけてきた。

「大丈夫？」

「……あ、はい」

「小さいのに一人で飛行機に？」

「ええ、まあ……進学した学校がこの辺で……」

きちんと喋れる。きっと、お祖父ちゃんの魔法が効いているんだ。そうとわかれば、さっさと学校へ行って手続きを済ませなければ。その人は少し首を傾げて微笑んだ。

「でもあなた、黄色人種でしょ。悪いことは言わないわ。田舎へ帰りなさいな」

「助言をありがとう。でも私、急いでのので」

「はぁ？」

今度は私が首を傾げた。と、後ろからクスリと笑う声が聞こえた。

振り返ると、線の細い男性がきっちりスーツを着こなして立っていた。髪もきれいに整えている。隙がない印象だ。

「嫌味にありがとうだなんて、キョウの娘らしい」

キョウ。恐。父の名前だ。

なぜ父を知っているのか。なぜ私が娘だと思ったのか。私が言葉を見つけあぐねていると、その人はスタスタと早足のようなスピードで私の前に歩いてきた。

その人が私の前に立った後ろで、最初に話しかけてきた女性はコソコソと歩き去った。最初に親切にしてくれた人にお礼も言えなかったなあ。

「僕はクライヴ。クライヴ・ブレナンだ。君のお父さんに頼まれて学校までエスコートすることになったんだ。よろしくね、ココロ」

「よろしく……父の知り合いですか。どういう……？」

「悪友ってヤツさ」

クライヴはウインクをすると、私の荷物を軽々と持ち上げた。またすたすと歩きだすので、弾かれたようについていく。

悪友。友達ということは、父と同じくらいの年齢なのだろうか。やけに若く見えるけど。

「父は何か言っていましたか」

「娘を無事に卒業させたら何してもいいってさ。君をお嫁にもらってもいいし、殺してもいいんだって」

「殺すんですか？」

「まさか。マドウの名付けってさ、恐を見てると恐ろしくてたまらないよ。娘を失うのが恐ろしくないなんて考えられない。それで、ココロってどういう意味なんだい？」

「えっと、ハート。心です」

クライヴはぴたりと足を止めて奇妙な笑顔で私に向き直った。笑うタイミングじゃなかったはず。

「えーっと、つまり……？」

「父は恐れる感情が欠落していますが、私は感情そのものが欠落しています」

「マイゴッデス……そんな馬鹿げた話があるか」

「？ ……事実です」

クライヴは微笑んで首をふった。これは落胆・呆れ・憐れみの行動。感情のコミュニケーションできない分、言動を分類分けして覚えた。だからわかる。私には感情の区別がつかないと思っている人は多いけど。

「私を憐れんでいるのね」

「へえ、解るの？」

「わかるわ……」

クライヴは私に向き直って、私の手を握った。クライヴの緑色の瞳が私を映す。

「ココ。僕は君のことをそう呼ぶよ」

「え……うん」

そのままクライヴに手を引かれてまた歩き出す。クライヴは何も言わないけれど、私のことを可哀想な子供だと思っているに違いない。温かい手に引かれて町の隅に辿り着いた。が、そこには何も無い。町を囲むように広がる絶壁がそびえ立つばかりだ。

「ねえ、クライヴ。学校はどこにあるの？」

「目の前さ」

「ないわ」

クライヴは隠してるんだよ、と笑った。

「手を2回叩いてごらん」

言われるまま手を叩くと、べちべちと情けない音がした。

すると、地響きのような音と共に絶壁が動きだし、大きな校門といくつもそびえたつ塔、それに広いグラウンドと町を囲む本物の絶壁が現れた。

「魔力を持った者がここで手を鳴らすと見えるようになるんだ」

「ここが——……」

「ようこそ、エヴァンジェリン魔法学校へ」

ただただ大きな建物を見上げる私にクライヴがささやく。振り返ると、クライヴがにこりと笑った。

「ここに一步入れば、僕は魔法史の先生だよ。クライヴって呼んだら生活指導の先生に怒られるから気をつけて」

「わかったわ。ブレナン先生」

私の言葉にクライヴが頷く。そして頭を撫でてくれた。

「でも、学校の外でブレナン先生って呼ばれたら他人行儀すぎて嫌だなあ」

「えーっと、わかったわ。この壁の中ではブレナン先生で、外ではクライヴね」

「そう。それで君は卒業までココ・ブレナン」

「え……？」

「僕は君を煮ても焼いてもいいって言われてる。本当は卒業させただけ……楽しい学校生活のために、君から名前を奪うよ、ココ。君を卒業まで僕の養子にする」

「よ、養子……？」

あるはずのない私の心の中に、初めて覚える感情——驚き——が、広がっていった。

「僕はたった今から、君の養父」

名前を奪うなんてできるの？

だって、私……私は、ココ・ブレナン。本当の名前が言えない。それはまるで呪いのような。……呪い？

「……名前を奪う呪い、聞いたことあるわ」

「さすがだね」

「お父さんの友達っていうのが理解できた。自分勝手すぎるわ」

嫌味を言うのは、感情のせいだろうか。すたすた歩くクライヴに必死についていく。

「ちょっと待ってよ！」

「いいかい、ココ。名前を奪う代わりに心と僕の魔力をあげる。だから、楽しい学校生活を送るんだ」

「12年間この生活を送ってきたのよ。今更……」

「楽しむために今更も何もない」

きっぱりと言い切られて、何も言えなかった。だって、私のためだと知っているから。

「寮に案内するよ。といっても、僕は寮監督に君を引き渡すだけだけど」

「それにしても広い学校」

近付くと、入口付近に1年生寮と書いてあった。教室があるのは、きっと真ん中にある、下が繋がっていて4本の塔が伸びているように見える一番大きな塔に違いない。

「ココは方向音痴かい？ 迷わないようにね」

「方向音痴ではないと思うけれど……広すぎて不安だわ」

「僕がいつでも駆け付けるからね」

うん、と頷くとふいにクライヴが立ち止まった。いつの間に現れたのか、アジア系のスレンダーな女性が寮の入口に立っていた。

「ブレナン先生、こんにちは」

「こんにちは。1年生を連れてきました。彼女、ココ・ブレナンです」

「あら、ありがとうございます。待ってたわ、ココ・ブレナン」

さっき名前を付けられたばかりだというのに、もう知っている。クライヴが何かしたのだろうか。

クライヴに背中を押され、寮監督であろう女の人のもとへ向かう。ぺこりと頭を下げると、彼女は小さく笑った。

「ワン・ユーインよ。あなたの部屋へ案内するわ」

「あっ、よろしくお願いします」

クライヴに小さく手を振ってワンさんを追いかけて歩き出す。

「入って右が女子寮よ。あなたと相部屋の学生は一昨日から寮にいるからいろいろ聞いてみるといいわ」

「はい」

「学生間の問題が起きて私を巻き込まないでね」

「えーっと、……はい」

「寮に関する問題とあなた達の健康問題は私の仕事。あと生活態度もね」

「はい、ワンさん」

「ユーインって呼んで。7年間一緒だからうまくやってね。部屋はここ」

階段をどれくらいのぼったかわからない。螺旋階段沿いにはたくさんのドアが並んでいたが、ワンさんがようやく立ち止まったのは、ココ&エマと書かれた突き当たりの部屋。屋根裏部屋っぽい。部屋からは濃厚な魔力が溢れ出ている。魔力を感じるなんて、相当だ。

「それじゃ」

ユーインさんが立ち去って改めてドアを見上げる。7年間一緒ってことは相手も1年生だよね。父より……お祖父ちゃんより、魔力が強大かもしれない。

ノックをするとはぁーいと鼻にかかった甘い声が聞こえてきた。間もなくドアが開くと、黒髪のショートカットが似合う美人が現れた。ど

2話

エミィに食堂やシャワールームの場所を教えてもらって、周りの視線から逃げるように部屋に戻った。

「怖い……」

「ココ、顔が真っ青よ。どうしたの？」

「ねえ、今度は私の話すね」

ラグに座って、間藤一族と名前、魔力の話をした。エミィは相槌を打ちながら真剣に聞いてくれた。

「前は……どう思われているかなんて、不安に思わなかった」

「感情のせいってわけね。でもアタシ、その養父さんは正しいと思うわ。だって感情がないなんて何のために生きてるのかわからないもの」

「でも、怖くて不安で……どう人と接したらいいのかわからない」

「アタシとこうして話してるじゃない」

「エミィは、えっと……先に腹を割って話してくれたわ」

ふーん、と呟いてエミィは首を傾げた。

「友達を作れるか不安ってわけね」

「友達……私、友達いたことない……。だから不安なんだわ。エミィともいつケンカしてしまうかわからない……」

「そんなの！ 仲直りしたらいいの!! 悩むのは後でいいの」

「そうかなあ……」

感情って、なんて難しい。怖くて怖くてたまらない。

「パパに名前を返してほしいなあ」

「パパって呼ぶことにしたのね。喜びや恋を知ったらそうも言ってもらえなくなるわ」

エミィはにっこり笑って私の頭を撫でた。

間藤恐はお父さん。クライヴはパパ。そう呼び分けることにした。

「あのさあ……。何で頭撫でるの？ パパも撫でたわ」

「は……？」

「どこかが痛い時に撫でるのはわかるけど……。怖いけれど、特に痛くは……」

エミィが首を傾げる。それだけでなまめかしい。どういう種類の鬼人種なのかはなんとなくわかった。調べておいた方がいいかもしれない。

「えっと……ヨーロッパだけの愛情表現なのかしら」

「愛情？」

「うーん……可愛いねって頭を撫でるのよ」

「そう」

「これからどんどんこういう疑問が増えそうね」

「うん」

ベッドに寝転んでみる。想像よりちょっとだけ硬い。畳に敷いたお布団みたいだ。

「エミィは何か魔法を使える？」

「うーん？ 人間の姿になることくらいかしら。もっとも、この魔法を解いたらきっと学校から弾きだされてしまうけど」

「なんで魔法学校に？」

「トモダチを探すためよ。魔力をたどるとか、そういう魔法があったら使いたいわ。悪魔の魔力はただの生命力でしかないから使い方もわからないし」

「ふーん」

鬼人種は、魔法を使えないのか。意外だなあ。

「友達、見つかるといいね……」
「そうね。寝ましょ。明日は入学式よ」
「うん」

電気を消して、ベッドにもぐりこむ。魔法が使えるようになったら、きっと電気を消すのだからベッドに入ったままできるわ。ぼんやり考えていたら、いつの間にか眠ってしまっていた。

「ココ、朝よ」
「っ、」

びっくりして起き上がる。そうだ、学校の寮だった。考えてみれば、今まで自分のプライベートな空間に他人がいたことってない。

「び、びっくりするのって、胸が痛くなるのね。ドキドキしてるわ」

私が言うと、エミイはくすくす笑った。早く着替えなきゃ、と私を急かす。エミイは既に制服に着替えていた。制服は――たぶん男女関係なく――8分丈のパンツで、同じ淡いグリーン色のチェック柄のネクタイをつける。ブレザーは灰色。どこか暗い印象だ。けれど、エミイが着るとそれすらも華やかだった。

「ネクタイ、曲がってる」
「あ……」
「ふふ、ココったら」
「ありがとう……」

エミイは、優しい。
朝食を食べると、寮の前に1年生が集められた。大半が私と同年ぐらいだけど、うんと小さい子や、エミイみたいな大人っぽい人もいた。
名簿順に名前を呼ばれて、あらかじめ振り分けられていたクラスに分けられていく。あまり深く考えなかったけれど、ココの綴りはKではなくCだったように思っていたより随分早く名前を呼ばれた。

「ココ・ブレナン！」
「あ、はい！」
「あなたは……ベータクラス……」

先生らしい人は、私の顔をまじまじと眺めながら言った。

「……あなた、ちょっと保留よ。ベータクラスの魔力じゃないわ」

クラスが振り分けられた後にクライヴに取られた名前分の魔力が増えたんじゃないかって、こっそりエミイが教えてくれた。エミイはかつて、名前を奪われた人を見たことがあるらしい。

「ココ・ブレナン。ちょっと、あなたには校則について歩きながら話すわ。ついて来て」
「はい」

先生に名指しされて、変に注目が集まる。顔から火が出そうだった。少し神経質そうな先生は、歩くのもせかせかしていた。追いつくのがやっとで、話の内容はあまり入ってこなかった。「人を傷付けるような魔法を使ったら、退学」「悪魔を差別しないこと」……。聞き取れたのは、それくらい。

「あの、同じ部屋のエミイ……、エマは、悪魔なんですよ？」
「ああ、《魅惑》ね。有名な悪魔ですよ。夢を食べるだけの獺です」

「夢を食べる悪魔……」

「悪魔が怖いですか？」

「いいえ、エミィは、全然……。大好きです」

「よろしい。あなた、日本人だったわね。だから相部屋にしたんでしょうけど」

先生がふと立ち止まって、大きなドアをロックする。エミィに会う前と一緒だ。ドアから濃密な魔力があふれ出てくる。

「校長先生、少しお話が！」

「……何でしょう？」

「入ってもいいですか！」

「……入らなきゃ、だめですか？」

校長先生の声は、か細くて心細そうな声だった。

「先生、生徒がいるんです。しっかりしてください」

「……どうぞ」

ドアが急に開いた。

中には、若く見える女の人が佇んでいた。少なくとも隣に立っている先生よりは若く見える。校長先生は、おどおどしていた。少しやぼったい感じもする。何歳なんだろう、校長先生になるくらいなのだから、すごい魔女なのだろうか。

「な、何でしょう？」

「彼女はココ・ブレナンといいます」

「ああ、ブレナン先生の娘さん」

「……ベータクラスに振り分けられていましたが、魔力が桁違いです。かなり上位の魔力です」

「それは不思議ですね」

校長先生が大きな水晶玉をせわしく布で拭いている。まるで上の空のような返事に、先生は少し苛立っているようだった。

「アルファクラスに移すべきです」

「ココさん、あなたはどちらがいいですか？」

「……私……エミィと一緒に……」

「では、《魅惑》とは離すべきです」

「！」

意地悪にしか聞こえなかった。びっくりして校長先生を見ていると、彼女はくすりと笑った。

「私が意地悪を言ったように聞こえましたか？ この先あなたは、《魅惑》をずっと頼りにするわけにはいきません。喜びも悲しみも、《魅惑》に教えてもらうものではないからです。あなたが《魅惑》の陰に隠れるつもりならば、こちらとしては引き離して成長を望むしかありません。わかりましたか？」

まるで、校長先生は私が最近感情を手に入れたことを知ってるみたいだ。校長先生は水晶玉を覗き込んだままこちらを見向きもしない。

でもそれよりも、なんでエミィの名前を呼ばないのか。そっちの方が気になって仕方なかった。《魅惑》というのはエミィの通り名なのだろうか。

「ウォーリック先生、彼女はベータクラスです」

「……はい」

「入学式に、向かいましょう」

ウォーリック先生の魔法で、私は瞬間移動していた。これから式が始まるという時だった。

「ココ、何があったの？」

「魔力の量ではアルファクラスの在籍資格があるんだけど、エミィにばかり頼っちゃだめってことでベータクラスになった」

「アタシのせい？」

「違うわ。何でもエミィに頼ればいいと思った私がいけないのよ」

首を振って正面を向きなおす。後から来た私は列の後ろに並んだので、クラスメイトを眺める事ができた。

隣の列……つまり、アルファクラスの面々はどことなく華やかで、晴れやか……ベータクラスは対照的に感じた。それはそうか。アルファとベータじゃ、レベルが変わってくる。努力次第という話だけど、魔力の量でクラスが決まっているのだから、努力ではどうしようもない。成長すると魔力の増減があるみたいだけど、私みたいに呪われたりしない限り魔力が急激に増幅するという事は滅多にないはずだ。魔力が少ないということは、大きな……歴史に残るような魔法は使えないということ。このベータクラスは、入学の時点で本に載るような魔女や魔法使いではないと宣告されたようなものなのだ。それでも、エヴァンジェリン魔法学校に入学できる魔法使いはほんの一握り。ここにいるみんなだって、エリートではある。ただ、無理のない範囲で魔法を教えるためには、こういう否応なしの事実を突き付けてクラスを分けるしかないのだ。

『みなさん、入学おめでとう』

校長先生が壇上に立つと、なんだか和やかな雰囲気になった。

『私は、エヴァンジェリン・ワーズワース。エヴァと気軽に呼んでくださいね』

エヴァンジェリン……？

学校の、創立者の？

だって、エヴァンジェリン魔法学校は、創立130年以上のはず……。確かに魔力があると成人してからは老けるのが極端に遅くなるけど、130年以上も成人したてみたいな見た目なのは、おかしい。

誰も驚いてない。みんな、知っていたのだろうか。

『今年も素敵なメンバーが、学校に入学してくれました。楽しい学校生活を送ってくださいね』

校長先生の話はかなり手短かだった。落ち着いて話しているようだったけれど、少し挙動不審だった。きっと、あの大きな水晶玉のことを考えているんじゃないかな。

『あぁ、アルファクラスの担任はウォーリック先生、ベータクラスの担任はブレナン先生です。それではさっそくオリエンテーションを始めてください』

かなり適当に言って、校長先生はスタスタ歩いて行ってしまった。がやがやと適当な感じで入学式が終わっていく。海外ってこんなものなのだろうか。

エミィが小さく手を振って、ウォーリック先生についていく。ベータクラスも、クライヴが声をかけて歩き出した。

「悪魔と仲良いの？」

不意に声をかけられて声のした方を見ると、オレンジ色に近い茶髪の女の子が目を輝かせていた。興味津々、の顔だ。

「私、マーリー・ロングフェロー。式の前にも話してたでしょ？ あの悪魔と」

「……ココ・ブレナンよ。彼女は悪魔じゃなくてエミィって名前があるの。私のルームメイトよ。先生は無害な獺だって言ってた。とてもいい人だよ」

「ふーん。そうなの？ 思ってたより、全然怖くなさそうね」

彼女はちょっとだけつまらなそうな顔をした。そしてまた、目を輝かせる。

「ココは東洋系の顔立ちなのに名前はアメリカっぽいわね？ 二世か三世なの？」

「純粋な日本人よ。でも今は、養子なの。マーリーは？ 地元……じゃないんでしょ？」

「私はイギリスから来たの。魔女や魔法使いなんだから、世界中から集められてるんじゃないの？」

「僕は地元だよ。チェルソ・ヴィダーリ。よろしく」

「……よ、よろしく……」

突然話しかけられて、言葉が詰まる。

今まで人と関わろうとしなかったツケが回ってきたんだ、と思った。今、このタイミングが友達を作るチャンスだってわかってる。でもどうしたらいいのかわからない。

「マーリー・ロングフェローよ」

「あ……私、ココ・ブレナン」

「ココは養子なんだって？ もしかして、ブレナン先生の？」

「……」

ちらっと見ると、クライヴが肩を竦めた。別に隠す事じゃないよ……という意味で、いいだろうか。

「……そうよ。先生はお父さんの友達で、お父さんはなかなかこっちに来れないから保護者になってもらってるの」

自分でもびっくりするほどすらすらと嘘が出てきた。でもこれでいいのよ。名前を取るために養子にされたなんて、言えないもの。

マーリーもチェルソも、あっさり信じたと感じた。

「日本は陸続きじゃないものね」

「うん」

韓国や中国から来るときだって陸続きとはいえ飛行機を使うであろうことは、黙っておくことにした。

「みんな、ここが僕らの教室だ。好きな席に座って」

人数分の机といすが所狭しと並んでいる。

窓側の席が人気だった。私は、マーリーの隣に座った。後ろに、チェルソが。

「この机やいすは寮と一緒に。自分好みにカスタマイズできる。高学年の子はうたた寝しても先生に怒られないようにシールドを張ったり、イスをふわふわにしたり」

クライヴの言葉に、笑いや歓声が起こる。みんなわくわくしている。

「今日は年間スケジュールの紹介と学校の中を案内して、ご飯を食べて解散」

日本の学校だったら、最初に自己紹介タイムがある。でもきっと、自分からアクションを起こさなきゃいけないんだ。

「さて、年間スケジュールと時間割を配るよ。みんな、行きわたった？」

年間スケジュール表には、キャンプやスポーツ大会など、普通の学校のような行事が並んでいた。冬休みを挟んだ2学期制で、学期ごとにテスト期間が設けられている。

時間割はよくわからないけど1週間ごとに魔法で変わる仕組みらしい。毎日3、4コマしか授業がない。3年生からはいろいろな授業を選べるみたい。

「さて、じゃあ……学校を案内するよ。この教室を使う授業はほとんどないけど、学校の中には決められた居場所があった方が安心するからね。休憩時間や放課後に自習室として使うっていうのもいい」

「先生」

「はい、ベルタ・インドウライン」

「さっき、机やいすをカスタマイズできるって、言いましたよね。ほとんどが移動教室なら、このカスタマイズは意味がないのでは？」

「ああ、それは別の教室に移動してから説明するよ。とりあえず、君の机をカスタマイズして説明に使わせてもらうね」

クライヴがパチンと指を鳴らすと、ベルタ・インドウラインの机が石の机になった。

みんなはガタガタの石の机になったことを笑っていたけれど、私は指を鳴らすだけで魔法が使えることにびっくりしていた。

「廊下に並んで……いいね。迅速だ」

「お父さん、お母さん、お兄さん」

「ねえ、ココ」

「なあに？」

「ブレナン先生って、父親には若すぎない？」

「うーん？ お父さんの友達って言ってたし、そんなに若くないんじゃないかな。私も、こっちにきて初めて会ったのよ。詳しくは知らないの」

「私語は慎むように」

他にも話している子はいたし、私達に言ったんじゃないと思うけど、なんだか悪口を聞かれたみたいないな気分まで口を噤んだ。

「ここが、魔法理論実践研究室。担当はウォーリック先生だ。……誰もいないみたいだから、入ってみようか」

全員が教室に入るのを確認すると、後ろの生徒にも見えるようにクライヴが机を持ちあげた。

「右奥に名前を書くスペースがあるんだ」

確かに、木の机に一部白い部分がある。

「ベルタ、ここに名前を書いて」

「はい」

クライヴが置いた机にベルタ・インドゥラインが名前を書くと、入れ替わったように机が石になった。

「これで、他の教室でも自分のカスタマイズした机になる。引き出しにテキストを入れておけば、手ぶらで教室を移動できるってわけさ」

「これは魔法なの？」

「そう。だけど校長先生の魔力を使ってる。移動教室の度にこんな魔法使ったら、魔力が少ない子は授業に支障が出るからね」

今、クライヴはあっさり言ったけど、魔力を使うとかなりの疲労感があるはず。校長先生の魔力はそれほど桁外れなのだろうか。

「机を戻す時は名前を消して。オーケー、案内を再開するよ」

校舎の塔は1階が入学式で使ったホールになっていて、2階以上は東西南北の4つに分かれている。1、2年生までは南の塔しか使わないらしい。クライヴについて行っただけだったけど、自習室も南塔にあるようだ。3、4年生は自習室が東になって、選択内容によっては南と東の塔を使う。5、6、7年生になるとほとんどの西塔しか使わない。北は、部室ばかりの塔になっているらしい。

1年生の授業で使う教室を見て回ったけど、どうも覚えられる気がしなかった。

「今日はこれで終わり」

クライヴが言うと、何人かが立ち上がった。

アルファクラスは終わったかな。エミィと一緒に部屋に戻ろう。

「ココ、あんた部屋どこ？」

「てっぺんよ。マーリーは？」

「なんか中途半端なとこ」

「一緒に帰る？ あ、エミィのクラス終わったかなー？」

「……うーん、あんた、悪魔怖くないの？」

「悪魔じゃないわ、エミィよ」

「そうね。悪魔は怖いけど、エミィは怖くないかも……」

マーリーがぐずぐず言っているけど、アルファクラスに向かう。エミィは教室の隅の席に座っていた。

「エミィ、終わった？ 帰ろう」

「……ココ……。ええ、帰りましょ」

「エミィ、彼女はマーリーよ。マーリー、彼女がエミィ」

「……初めましてマーリー。ココと仲良くしてあげてね」
「よろしく、エミィ」

エミィは目を細めて笑顔を作った。マーリーもぎこちないけど、全然怖がっている感じはしない。そうよね。鬼人種イコール怖いなんてナンセンスだ。エミィはエミィなのだから。

並んで寮の入口をくぐると、右の螺旋階段をぐるぐるとのぼっていく。マーリーの部屋は本当に中途半端な位置にあって、どれくらいの高さなのかもわからないくらいだった。ずっと螺旋階段脇にドアが並んでから目印もなくて、ドアについている名前でもようやくわかるくらいだ。

「それじゃ……、あ、どうせ暇だし、着替えたら部屋に行くね。てっぺんでしょ」
「うん」

マーリーに手を振って、更に階段をのぼっていく。

「マーリーが話しかけてくれなきゃ、私一人だった」
「……そう」
「でも、マーリーは私がエミィと話してたから話しかけてきたのよ」
「なんで悪魔と話してるのかって？」
「うーん……悪魔と仲良いの？ って言ってた気がする。それで、私言ったのよ。悪魔じゃないわ、エミィっていう名前があるのよって。そしたら、……えーっと……放課後、エミィと一緒に帰って言ったら、悪魔は怖いけどエミィは怖くないかもって、それで一緒にエミィの教室に来たのよ」
「……そう……」
「どうしたの？ エミィ」
「ありがとう、ココ」

エミィは泣きそうな顔で言った。潤んだ目で無理矢理笑顔を作ってる。

「……どうしたの……？」
「あんた達、歩くの遅いわねー。追いついちゃった」

走ってきたのか、マーリーが息を切らしていた。

何故疲れるのにわざわざ走ってきたのか。それは、悪いことではない……とは、思う。でも、ちょっとだけわからない。後でエミィに聞こう。

「ね、寮のドアって鍵がないよね」
「あんた、説明聞いてないの？」
「住人の魔力じゃなきゃ開かないようになってるのよ。移動教室の机もそう」
「へえ……。二人とも、物知りね」

部屋に入ると、マーリーはうわ……と声を漏らした。

「二人とも物置かないんだ？ ベッドとデスクくらいしかないじゃない」
「タンスもあるわ」
「そういう意味じゃないっつの」

エミィがおいしそうな飲み物をテーブルに置いた。

「何これ、おいしそう」
「ハーブティーよ」
「ふーん、ほんと、エミィのこと誤解してたよ。ありがと」
「よかった！ エミィ、よかったね！」
「ええ……」
「ねえ、なんでマーリーはエミィが鬼人種だって知ってたの？ 私、エミィに教えてもらったから知ってるけど」

「はあ？ ……ああ、うちは一応、魔法使いの家系だから……知らないのはあんたと魔法使いの家系じゃない子くらいじゃないの」
「エミィ、有名なの？ あ……そういえば、ウォーリック先生が言ってた。有名な猫ですよって。通り名まであるんでしょ？」

校長先生も、通り名で呼んでた。エミィはとても悲しそうに眉根を寄せた。

「……そうね。人型の猫なんて、珍しい……っていうか、アタシくらいのもものだから。珍しいだけで、何も有名になるような大それたことはしてないの……」

こっちまで泣きそうになる声で、エミィは言った。

「……ねえ、ココ……。アタシとは、学校では仲良くしない方がいいわ」
「なんで！ マーリーは、わかってくれたじゃない」
「そ、そうよエミィ。……私、最初は確かに誤解してたけど……！」
「……ありがとう。でも、あなた達まで変な人ってレッテル貼られる必要なんてないわ」

ハーブティーは、確かに悲しいのにほっとする味だった。

3話

教室に入ると、マーリーが寄ってきた。

「おはよう、マーリー」

「おはよ。なんでエミィがあんなこと言ったか、わかったよ」

マーリーによると、昨日アルファクラスで、魔法使いの家系じゃない子達はエミィに普通に話しかけていたらしい。でも、エミィを鬼人種だと知ってる子が、通り名通りのエミィの魅惑に当てられたせいだ、エミィはおぞましい悪魔なんだとエミィにも聞こえるように言っただけらしい。

「……つーか、それって小学校一緒だった奴なんだけどさ」

「ひどい……」

「私もエミィはいい奴だって言ったんだけど、魅惑に当てられたせいだの一点張りでさ」

「……ねえ、どうしたらいい？」

マーリーは肩を竦めた。

「エミィがそっとしておいてほしいって言うんだから、そっとしていいんじゃない？ 寮や学校の外で仲良くすればいいじゃない……。どうせクラスが違って、学校じゃそんなに一緒に居られないし」

「うーん……そういうものなの……？」

「そうなの。つーか、あんたは大丈夫なの？ 私としか話してないでしょ。ほら、クラスメイトの名前知ってる!？」

あたりを見渡す。……知らない……。

「あ、えっと、チェルソは……わかるわ」

「……よかったよ」

「チェルソ、他にも地元出身の子っているの？」

「えーっと、アンブラ」

チェルソが名前を呼ぶと、きれいなブロンドの子が寄ってきた。

「アンブラ・タッシナーリ。僕と同じ小学校だったよ」

「そうなの。今度、案内してね。私、ココ・ブレナンよ」

アンブラはにっこり笑って手を振った。

「アンブラは声が出ない呪いをかけられてるんだ。それで、普通の家庭の子だったけど魔法学校に入学したんだよ」

「……そうなの」

声が出ない呪いというよりは、きっと声を奪われる呪いだったのだろう。私が名前を奪われたように。きっとそれで、魔力が増幅したのだ。

アンブラが、私の肩を叩いて私とアンブラの間にある空間を指差す。

『そうなの。でも私うるさいから、よろしくね!』

「文字が浮いてる……。魔法……よね？」

『そうよ。これだけは必要だから、チェルソのママに教えてもらったの』

「ふーん、面白いねー。あ、私マーリー・ロングフェロー」

『よろしく!』

また友達が増えた。

すごいことだと思う。だって、1日に何人ものクラスメイトと話すなんてこと、今までなかったもの。

「呪いをかけられるのって、大変ね」

『まあね。何が起こったのかわからなかったわ』

「そういえば、日本にもいるでしょ？ 自分の一族に呪いかけてる変な魔法使い」

「うーん？ 私、自分の家族しか日本の魔法使い知らない……」

「そんなものなの？ イギリスじゃ、魔法使い同士でお祭りとかあるけど」

「あー、わかったよ。間藤一族じゃない？ 僕のお父さんが何か言ってた気がする」

「……………」

もしかしなくても、変な魔法使いってお祖父ちゃんのことだ……。一族に呪いなんか……。そうか、命名の実験のことだわ。

「どうしたの、ココ」

「ん？」

『顔色が悪いわ』

「あ……ごめん、ちょっと……」

教室を出て、魔法史研究室……クライヴの研究室に向かう。

「あの、先生……」

「どうしたんだい？ 今日はココのクラスに魔法史の授業はないよ」

「今日は、パパに会いにきたの……。あのね、私の家……実家の方よ。ヘンなの？ 自分の一族に呪いをかけてる変な魔法使いだって。でもあれは実験で……呪いなんかじゃ……」

「ああ……間藤の名付けは僕が君にかけた呪いと似たようなものだよ。一生……君みたいないことがない限り、一生続く呪いさ」

「……………」

そうよね、名前って、一生モノなもの。

そっか、あれは呪いなものね。

「まあ、お爺さんの場合、魔力が増えるから良かれと思ってのことなんだろうけど、その代償は大きすぎるだろう？」

「そ、そうね……代償は大きいけど良かれと思って……。あの名付けがなきゃきっと私はここにはいないもの」

“あの”と言っても、自分の本当の名前はどうしても思い出せないんだけど。

「そうだよ。全ては女神の導きさ。それに君は今、ココ・ブレナンだ。間藤の評価なんて気にしないでいいよ」

「あ、そういえば、私にパパの魔力が混ざってるんでしょ？ エミイが言ってたわ。名前をとられたからだって。私、クラス分けの時に大変だったんだから」

「ん？ 《魅惑》が何故それを？ 彼女、魔法の知識なんてないはずだ」

「他にも名前をとられた人を見たことあるんだって」

「……………もしかして……」

クライヴがデスクに寄りかかったまま、考え込んでしまった。私の声なんか聞こえてないみたいだ。

「もう、聞いているの？ 大体、みんな悪魔とか《魅惑》とか……。エミイにはエミイって名前があるのよ」

「後々授業でやるけど、通り名の方が敬称なんだよ」

「そんな屁理屈を聞きたいんじゃないわ。エミイはエミイなの」

クライヴは肩を竦めた。

「もうすぐ授業が始まるよ。またおいで。そこのドア、魔法理論の教室に繋げてるから」

「うん」

夢にまで見たどこでもドアだわ！ 信じられない。学校を卒業する頃には、もしかしたら私にもどこでもドアが作れるのかしら！

クライヴが指差したドアを抜けると、マーリーがちょうどやってきた。

「ココ、大丈夫？」

「うん」

机の右隅に名前を書く。ぱっと机が変わった。

ちょうどその時、先生が奥の部屋から出てきた。小太りの、人がよさそうな男の人だ。

「みなさん、初めまして。初めての授業かな？ 私は魔法理論を教えていますジークムント・シュテッパンです。私はみなさんの先輩でね、校長先生に魔法理論を習ったんですよ」

シュテッパン先生は朗らかに笑って、黒板の前に立った。

「それじゃ、早速授業を始めます。魔法理論というのは、効率よく魔法を使うための授業です。それじゃあ、教科書の最初のページから」

教科書を机から出して広げると、魔力の説明があった。

「魔力というのは、生命力でもあります。魔力を持っている生物は、人間と悪魔や吸血鬼です。悪魔や吸血鬼は強大な魔力を持っていてほぼ不老不死ですが、魔力を魔法に変換することは得意としていません。ですから、強大な魔力を持っていても勉強熱心な人が入学しています」

確かに、エミィは使い方がわからないと言っていた。

「一方、人間の魔力はごくわずかです。その中でたまたま魔力が多い人が魔法使いや魔女と言われます。しかし人間の魔力というものは不安定で、成人すると魔力が減少していく人や増えていく人もいます」

とてもいい人そうな先生だけど、教科書を読んでいくばかりでとても……とても、眠くなるわ。ううん、でも初日から寝ちゃうなんてダメだ。

一生懸命目を開けていると、先生と目が合った。

「……所有物によって、魔力を左右することもあります。つまり、色、感覚……名前などです。……これは、私の研究ですが、魔法使いには色素欠乏症患者やなんらかの障がい者が多いことがわかっています。また、通り名を与えられた魔法使いは総じて魔力が増えています」

……眠い……。

なんとか1時間耐えて、休憩時間にはひどい疲労感でぐったりしていた。

「あー、よく寝た！」

「マーリー、けっこう揺れてたよ」

「次の授業ってなんだっけ」

『スポーツよ』

「えー!？」

体育の授業なんて、魔法に関係ないからないと思ってたのに！

スポーツの授業は、アルファクラスと合同だった。本当はエミィに話しかけたかったけど、エミィはいなかった。先生によると、スポーツ免除の生徒は何人かいて、エミィもその一人だという。

体力測定をして、それから筋トレみたいなことをした。

「魔法ってのは体力勝負だ！」

先生は、ガハハッと豪快に笑っていた……。もぞもぞと着替えてぞろぞろと移動する。こうしていると普通の学校と変わらない気がする。

3時間目は、世界史。エルネスティヌ・ロダグと名乗る若い先生は、サラサラのボブがよく似合う美人だった。

思っていたよりも、魔法と関係のない席に座って授業を聞くだけのものが多いらしい。この世界史は、魔法史と同じペースで進めていくという話だった。

「ブレナン先生と仲良いのかな」

「え？」

……」

「他の授業の先生よりは、確実によく会うはず。ロダン先生がココの養母になる可能性もあるんじゃないかってことよ」

「養母……？」

考えたこともなかった。

そもそも、クライヴは独身なのかな。

「さて、まずは神話からよ。魔法使いの家系じゃない子は、こっちの神話に馴染みがあると思うわ。実は、魔法のことを知らない人間って、魔力を与えてくれた女神のことも知らないの。だから、魔法使いの神話は一つだけど、世界にはたくさんの神話があるのよ。適当にいくつか紹介するわ」

全知全能の神の神話、唯一神の神話、たくさんの神がそれぞれの役割を果たしている神話。

本当にいろいろな種類の神話があった。

「……最後に、ユーロ創国伝説ね。ヨーロッパを統一した王様を巡る伝説で、これは有名よね。世界史は、このユーロ王がヨーロッパを統一してからようやく始まるの。しばらくはこのユーロ王に関することを進めていくわ」

ユーロ王。その名前にヨーロッパ周辺の出身の子はうんうんと頷いていたけれど、私にはよくわからなかった。日本のことはあんまりやらないんだろうな……。

授業中は、ほとんど先生の話をもメモしていた。私は他の子よりも知らない分、真面目に聞かなきゃ。

「うー……！」

授業が終わると、マーリーがぐーっと背筋を伸ばした。彼女は世界史の授業でも船をこいでいた。魔法理論ほど眠くなかったけどなあ。

「ココ、帰ろう」

「あ……ごめん、パパのとこに行くから、先に帰ってて」

「そう？ それじゃ、アンブラー一緒に帰ろう」

『ココ、また明日』

「うん、またね」

二人やチェルソを見送ってクライヴの研究室へ向かう。

「先生……」

「やあ、ココ。今ちょうど君のクラスの打合せしてたよ」

クライヴの向かいに座っているのは、ロダン先生だった。

マーリーの言葉がよみがえってくる。ロダン先生が養母になる可能性も……。

「あら、噂の娘さんですね。さっきの授業、とても真面目に聞いてくれて嬉しかったわ」

「自慢の娘です」

「や、やめてよパパ……。自慢することじゃないわ。お邪魔してごめんなさい、帰るわ」

「ふふふ、ブレナン先生がパパなんて本当に似合わない。いいのよ、私がお暇するわ。コーヒーごちそうさまです、ブレナン先生」

ロダン先生が手を叩くと、マグカップがきれいになった。

「おや、いいのに」

「ふふふ、それじゃ」

「……ロダン先生と仲良いの？」

「まあ、彼も同じ歴史専門だし、良い方だと思うけど。どうしたんだい？」

「あ……」

今、彼って言った。

「……あの、一つ確認よ。ロダン先生って、女性よね？」
「名前も喋り方も女性っぽいけど、れっきとした男だよ。結婚もしてるし」
「……そ、そんなの……。あのね、クライヴは結婚しているの？」
「独身だよ」
「継母は、いない？」
「なんだ、そんなこと心配してたのかい？ 意地悪な継母がいないかどうか？」
「うーん、違うけど、そうね。子どもにとっては重大な問題なのよ」
「そうだね」

クライヴは大真面目な顔で頷いた。

「……あのね、友達、できたのよ」
「良かった。恐も喜ぶんじゃないかな」
「……」

本当の両親のことを、一瞬忘れていた。クライヴの方が何倍も親みたいなんだから。

「……ねえ、でも、私が今一番大切な友達はエミィなの。エミィには、名前の秘密を教えるわ」
「ああ、だからクラスを離れたと校長先生に聞いたよ」
「そうなの。でも、エミィは悪魔だからってクラスで孤立してるの。私も、学校では話しかけない方がいいってエミィに言われちゃった」
「彼女は気高い悪魔だ。《魅惑》なんて通り名まで与えられて、夢魔からも猥からも孤立してる。7年間なんてほんの瞬き程度の時間でしかない。どういう気まぐれで入学したのかは知らないけど、すぐに寿命を迎えるクラスメイトとの馴れ合いなんかどうだっていいはずさ」
「……でも、エミィは確かに傷付いてたの」

クライヴは肩を竦めた。指を鳴らして、コーヒーをすする。私の前にもコーヒーが現れたけど、コーヒーなんて苦くて飲めないわ。

「誤解されるのは有名人の宿命だよ。名前が大きすぎるんだ。加えてあの美貌だし」
「私、何もできないの？」
「何をしたいんだい？ 逆に考えてみなさい。エマはココを守ろうとして学校で話しかけないでほしいと言ったんだ。素直に守られて、寮で支えてやればいい」
「素直に……。素直ね……。クライヴ、私コーヒー飲めないわ」

クライヴは呆れた顔をした。私の前にミルクを出して、既に冷めたコーヒーを飲んで首を振った。

「冷める前に言ってくれ」
「でもわかった。私は無視なんかするつもりはないけど、学校ではあまりエミィに話しかけなければいいのね」
「……そうだね」
「そういえば、エミィは友達を探すのに魔法を使おうと思って入学したんだって。知ってる？」
「彼女の交友関係なんか知らないよ」
「そうよね」

ミルクを飲んで、クライヴを見る。

「パパ」
「何だい？ 今日は甘えんぼだな」
「パパが本当のパパだったら良かったのに。最初から感情があれば……。良かったのに……」
「言ったじゃないか。全ては女神のおぼしめし」
「そうね」

女神に聞いてみたい。なんで、名前の法則を作ったのか。なんで、魔法なんてものがあるのか。

「もうエマのところに戻りなさい」
「うん」

クライヴが私を引き寄せて、頭を撫でた。軽くハグをして研究室を出ると、急いで寮に戻った。
部屋にはエミィの他にマーリーとアンブラがいた。いつの間にか、アンブラもエミィと打ち解けたらしい。嬉しいことだ。

「おかえり、ココ。二人ともココを待ってたのよ」
「ただいま……。あ、あのね、ロダン先生、男なんだって」
「え!?!」

マーリーがとても大きな声を出した。アンブラも声はないけど驚いた顔をしている。

「ロダン先生って、誰？」
「世界史の先生よ」
「あ、ココは私がロダン先生とブレナン先生の仲が怪しいんじゃないかって言って不安になったのよ。ブレナン先生の彼女だったら、継母になる可能性があるもの」
『でも、本当に男だったの？ 騙されてるんじゃない？ 確かに中性的な感じだったけど』
「パパは嘘なんか言わないよ」

エミィがハーブティーをくれた。おいしい。

「エミィ、そっちは宿題出す先生いた？」
「いないわ」
「ねえ、スポーツの時間いなかったよね？」

マーリーがお菓子を食べながらエミィに尋ねる。それは私も聞きたかった。免除とは聞いたけど、なぜなのだろう。

「ああ……悪魔って、吸血鬼ほどじゃないけど日光に弱いよ。体力は魔力で補えるし、免除されてるわ」
「免除されてる人って、他にいた？」
「うちのクラスとベータクラスの吸血鬼が1人ずついたわよ」
「え？ うちのクラス、吸血鬼がいるの？」
「知らないの？ ヴォルター・リンハルトよ」

ヴォルター・リンハルト……。
名前を聞いても思い当たらない。

「うちのクラスはマティアス・レオンハルト。吸血鬼の貴族よ」
『なんか、名字が似てるのね。同じ吸血鬼だからなの？』
「レオンハルトが本家で、リンハルトが分家よ。ヴォルターがいれば吸血鬼同士で寮の部屋を組めるから連れてきたんじゃない？」

本家と分家。私も、実家では本家の子だった。私も誰か、分家の子に付き合ってもらったら名前を取られることもなかったのかな。ああ、ダメだわ。そもそも私しか入学資格がないもの。吸血鬼の本家と分家だからできたことなのね。

「吸血鬼かぁ……。やっぱり、血を飲むのかなぁ」
「それは魔法で抑えてるらしいわ」
『じゃあ、日光に弱いだけの人間ってこと？』
「そうよ」

それでも、彼らも疎まれ、遠巻きにされるのだろうか。エミィみたいに。
よし、明日、ヴォルター・リンハルトに話しかけてみよう。

エミィと……悪魔と仲良くできて吸血鬼と仲良くできないなんて、説得力に欠けるわ。ヴォルターが嫌な奴だったら、それはそれで、エミィの人望だって言えるし。

4 話

ヴォルター・リンハルトが一体誰なのかという疑問はすぐに解決した。

孤立していたからだ。それは、見た目が成人男性のようだったこともあるかもしれないし、やっぱり吸血鬼だからかもしれない。

「おはよう」

「……おはよう、何か用？」

「あなた、ヴォルター・リンハルトでしょ？ 私はココ・ブレナン。よろしく」

「……よろしく」

ヴォルターは、日光に当たらない種族らしく不健康な肌の白さだった。切れ長の目は、今にも閉じそうに細い。

「眠いの？」

「元々、昼夜逆転の生活だからね。長い間そうだったから、1週間やそこらでそうそう慣れるものじゃなくて」

「ココ！」

ヴォルターと話していると、マーリーがとても大きな声で私を呼んだ。チラリとヴォルターを見ると、どうぞとばかりに肩を竦める。

「おはよう、マーリー。なあに？」

「何じゃないっつの」

マーリーは教室の隅にぐいぐい私を引っ張っていった。そして、小声だけど鋭い声で私を非難した。

アンブラとチェルソが2、3歩離れたところから不安そうに見ている。

「昨日の話聞いてなかったの？」

「昨日の話って？」

「ヴォルターは純血種の吸血鬼っていう話に決まってるでしょ！」

「聞いたから話しかけたんじゃない」

「だから、何で」

「吸血鬼を差別したら、やっぱりエミィの魅惑に当てられただけなんだって言われちゃうわ」

「ちょっと待って。なんでそうなるの？」

マーリーは意味がわからないという風に首を振った。

「彼らだって、今は人間と同じよ。差別したらいけないわ」

「違うわ。順番が違う。だって、私はあんたがエミィはいい人って言うから友達になったの。悪魔を差別しないためじゃない」

「ヴォルターだってきつといい人よ。それは、話しかけてみなきゃわからないじゃない。私達にヴォルターがいい人って言ってくれる人は一体誰？」

「それは……」

「そうでしょ？ ねえ、ヴォルター、ランチは一緒に食べましょ？ 友達を紹介するわ」

「……彼らに迷惑だよ」

マーリー達の気まずそうな顔を見ると、そんなことない、とはとても言えなかった。

ヴォルターは何とも思っていない風で、肩を竦めた。

「ねえ、私の家にも本家と分家ってあるわ。でも、本来本家と分家って兄弟なんだから、命令聞く必要ないわ。そうでしょ？」

「まあ、そうだね」

「あなたはマティアスが一人ぼっちにならないように一緒に入学した優しい人。そうでしょ？」

「それはどうかな」

「ほら、優しい人は自分は優しいなんて言わないものよ。絶対、仲良くした方がいいのに」

「ありがとう、ココ。でもオレは大丈夫だよ。彼らの元に戻りなよ」

ヴォルターは、私を無視して読書を始めた。私はというと、いつもの席に戻った。他に名案なんて浮かばなかったから。

「あんたって、信じられないお人よしだね」

「そんなに怒らないでよ」

『エミィだってきっと怒るわ』

「そうかしら」

「ハイ、君達。いつの間に《魅惑》と仲良くなってんだい？ もしかして、アンブラも？」

『もちろん』

「私のルームメイトなの。エミィのハーブティー、とってもおいしいのよ」

でも、女子寮にチェルソを招くわけにもいかない。

「怖くないの？」

「ねえ、いつも思うんだけど、何が怖いの？」

「何って、夢魔に生気を奪われたら死んじゃうんだよ」

チェルソはなぜそんな当然のことを聞くのかわからないという顔をした。

「ああ、みんなはそこを勘違いしてるわけね。エミィは夢魔じゃないわ。獺よ」

『正確には夢魔と獺のハーフで、獺の生活を選んでるんだって。セクシーなのはきつと夢魔の血のせいね』

「ふーん。そこまでは聞いてなかった」

「昨日、ココがいない間に教えてくれたのよ。私がかうまく説明できなかったから」

「エミィね、友達が増えて嬉しそうだったよ」

「おいおい、君達。論点はそこじゃないんじゃない？」

私もマーリーもアンブラも、チェルソを見て、顔を見合わせた。

「会わせろってこと？」

「口説くつもり？ これだからイタリア男は」

「違うよ。《魅惑》は誤解されてるんだよ」

「わかってるわ」

「そんなに簡単じゃないんだよ」

マーリーが口を尖らせる。先生や校長先生なんかをもっとちゃんと説明してくれればいいのにね、とか、エミィもちょっと諦め気味だから、とかそれぞれ適当なことを言って授業のために教室を移動する。

1時間目は、魔法史だ。

「やあ、ベータクラスみんな。さっそく授業が始まってるけど調子はどうだい？」

クラスメイト達はまばらに返事した。クライヴは自分から聞いたくせに適当に聞き流して教科書を開いた。

「ロダン先生から聞いてると思うけど、魔法史は世界史と同じペースで進めるよ。まずは創世の神話から」

ロダン先生も似たようなことを言っていたが、魔力のあるものの神話は一つだ。たぶん、吸血鬼も似たような神話を知っているはずだ。“女神に捨てられた種族”である悪魔族が女神を信仰しているかは定かではないが、やはり創世については同じ見解をするだろう。

長く生きて伝言リレーが少ない分、吸血鬼や悪魔の方が詳しいのではないかとさえ思う。

×××

孤独な女神は動物を作った。

動物は喋らないので父親と母親を連れてきた。これが人間の始まり、青と赤の人間。そして、地球を動かすために他にも人間を増やした。

青と赤の人間は、女神を大切に扱ったが、その他は女神をぞんざいに扱った。

女神は人間が嫌いになった。ウサギをトラが食うように、人間を食うものを作ると言った。人間は反対したが、青と赤の人間だけは了承

その神は人間を造った。そして、その神は人間を、人間に食わせることには成功した。人間は食料を必要とした。食料は人間に必要だった。食料は人間に必要だった。

女神は魔力を持った人間を作ろうとしたが、彼らは実体を持たなかったので、人間を食べることができなかった。女神は悪魔と呼んで、それを捨てた。

次に女神は、魔力を持った人間ではなく吸血鬼を作った。

そして女神は、青と赤の人間に魔力を与えて眠ってしまった。

吸血鬼は女神を中心に国を作り、人間たちに縋られた青と赤の人間は人間の国を作った。

×××

全然詳しくないし、これで歴史がわかるのかは疑問だ。

ただ、いくつか断定されているのは、何故だろう。そりゃ、推定文ばかりでも胡散臭さが3割増しかもしれないけど。

「この、青と赤の人間っていうのが後の王族、そして魔法使いの祖だと言われてる」

ふーん。としか思えない。

身近な話題にしてみれば、どうやって日本に魔法が入ってきたのだろうか。

「そして、かの有名なユーロ王は、この子孫」

「……」

有名かどうかは、知らないけど。

つまり、世界史と魔法史が繋がっている理由は、ここにあるらしい。

中東系の顔立ちの男子生徒が手を挙げた。

「はい、メフメト・シケル」

「女神が本当にいるのなら、起きたという史実があるか吸血鬼の国の中心に寝ているはずでは」

「それは魔法史界でも頭を悩ませている問題でね。女神なんて本当にいたのかと疑問視する声もあれば、ユーロ王を支えた者こそ女神だと言う声もある。ま、所詮、神話は神話。歴史的資料がきちんと残っているユーロ王から魔法史も進めていくよ」

じゃあなんで神話を紹介したんだろう。“青と赤の人間”が昔の人間の王族の先祖だと言うだけのため？ 史実も何も無いのに。

ユーロ王という人がキーワードになるのは、ただ単に伝説的な偉業を行った王というだけでなく、書物に記録を残すということを行ったからだよ。それにしても、覚えてる範囲で父親の活躍とかも書けばよかったのに、とは思った。

授業が終わって教室を移動しようとするとき、クライヴに呼び止められた。マリー達に先に行ってもらうことにして、なあに？ と尋ねた。

「ヴォルター・リンハルトと仲良くしようとしてるんだって？」

「ええ。まさか、教師が差別を推奨しないわよね」

「まさか。意外と度胸あるなあとは思ったけど、褒めこそすれ、反対なんかしないよ。でもさ、血を吸われるかも……とか思わないのかい？」

「その時はその時よ」

「ワーオ」

クライヴはすごくガッカリした感じで溜め息をついた。

「そういう考え方、良くないな。君が怪我をただけで悲しむ家族も友人もいるんだ」

「……そうね」

友人は、悲しんでくれるだろうか。

少なくとも実家の方は悲しむ人はいないけど、養父である以上クライヴは何か感じてくれるかもしれない。

「何かリスクを承知で行動することはいいことだ。君が成長する手助けになるだろう。でも何も考えずに行動するのは違うんだよ」

「……うーん、結局、ヴォルターと仲良くするのはいいことなの？ 悪いことなの？」

「それは君が決めることさ。きちんと、ヴォルターを見極めて。ヴォルターだけじゃない、他の友達もね」

よくわかったような、わからないような。

「ココ、学校は楽しいかい？」

「そうね。少なくとも友達ができてとても嬉しいわ」

「それを聞いて安心したよ」

クライヴに手を振って、急いで教室を出ると、ヴォルターがポツンと立っていた。

「……あ……えっと」

「待っててくれたの？」

「うん」

ヴォルターは並んでみると背が高く、見上げていると首が痛くなりそうなほどだった。

「ブレナン先生は親戚なのかい？」

「私の養父よ。先生が父の友人で、保護者をお願いしたの」

「……ココ、保護者になるだけなら養子になる必要なんてないよ」

「あら、そうなの？」

「どういう理由か知らないけど、今後は養子であることだけを言った方がいい」

「そうするわ」

肩を竦めると、ヴォルターはくくっと笑った。

「ココって、素直なんだね。とてもいい子だ」

「ありがとう」

「でも、オレとみんなを仲良くさせようなんて思わなくていい。オレは、君の数倍長く生きてるからそういうことくらいちゃんと対処できる。君が気にかけている《魅惑》も一緒さ。あっちはオレなんかよりもっと長生きしてる」

「パパも同じようなこと言ってたわ。でも、1日……1分1秒はみんな同じ長さのはずよ。それなのに、長生きだから一人ぼっちでいいなんて理由にはならないと思うの」

「一人ぼっちでいいわけじゃないよ。ただ、うまく対処できるのさ。だから、君がオレ達を気にかけて友達の気分を害する必要なんて、全くないんだよ」

私の何倍も生きて、経験がある。それはわかる。

「……でも……。あなたの言うことはわかったわよ。でも、どうしてみんな仲良くできないのかしら」

「怖いからだよ。未知のものは、誰だって怖い」

「……………ふーん……。恐怖ね……」

それはまだ、鈍い感情だ。お父さんにその感情がない分、見て覚える機会も少なかった。

「私、余計なことはしないわ。でも時々話しかけるのはいいでしょ？」

「もちろん。君は大事な友人だよ」

次の授業は呪い学。

教室に入ると、すぐに奥の部屋から先生がやってきた。

「……この時間は1年生ベータクラスの呪い学です。間違えた方はいませんね？」

神経質そうな先生は、細い眼鏡を押し上げてクラスを見渡した。

「よろしい。それでは教科書の1ページ目から」

先生は名乗ることもせず、ただ当たり前のように授業を始めた。

「呪いには様々な種類があります。……ああ、このクラスにも奪われる呪いがかけられている人がいますね」

アンブラが恥ずかしそうに俯く。全然不自由しないから忘れがちだけど、私もだ。

「呪いは、リスクが大きいものばかりです。この授業では呪いの種類や呪いをかけられた時の対処法を勉強していきます」

先生は神経質そうに、舟をこぎ始めたマーリーを睨んだ。
私やアンブラがハラハラして見守っている中、授業は終わった。

「マーリー・ロングフェロー。ちょっと残りなさい」

「えっ、私ですか」

マーリーは意外そうな顔で（私はちっとも意外だとは思わなかったけど）、先生の元へ引き返していった。
私とアンブラは、マーリーを置いて次の魔法理論実践研究室へ向かうことにした。

『ココはブレナン先生になんで呼ばれたの？』

「あー……過保護なだけよ。学校は楽しいかとか、友達はできたかとか、そういうこと」

『ヴォルター・リンハルトと一緒に来たよね。彼も呼ばれてたの？』

「待っててくれたみたい」

『ねえ、私は魔法使いの家系じゃないけど、吸血鬼の恐ろしさは知ってるわ。どうしてココは怖くないの？』

「どうしてかな。ヴォルターって、そんなに悪い人には見えないし……」

まさか、恐怖がわからないというわけにもいかない。

でも、本当に、ヴォルターって悪い人には見えないわ。さっきだって、つまりは私がヴォルターと仲良くしてマーリー達と疎遠にならないように心配してくれたってことだし。

「みんなで仲良くって、難しいことなのかしら」

『私にはそれがわからないわ。なんで“みんな”で仲良くする必要があるの？ 気が合わない人って、必ずいるわ』

「一人の人はどうするの？」

『一人でいるのが好きな人だっているもの。私、別に“みんな”って大事じゃないと思う。そりゃ、仲がいい人が多いのはいいことだけど』

あー、って声が漏れた。“みんな”って、きっと日本の考え方なんだわ。ヨーロッパは個々を大事にするって明おばさんが言ってたもの。

「二人とも、まだ着いてなかったの？」

「マーリーこそ、なんでもう教室に着いてるの？」

『魔法？』

「うん、先生が次の授業に遅れるといけないからって。遅刻しそうなときは寮のドアと教室のドアをつなげばいいんだね。ためになった」

あれ？

「マーリーって、居眠りしてたことを怒られてたのよね？」

『反省の色ナシって感じ』

「私はちゃんと起きてたじゃない。先生と話したのは、部活のことよ。チェス部。私、チェスが得意でその道では有名なのよ」

「ふーん……。私にはわかんない世界だ」

それにしても、居眠りには寛容なのかな。先生、マーリーのこと睨んでたと思うんだけど。

5話

夜中、寮にはすすり泣きの声が響く。ホームシックの子達の泣き声だ。

「……はあ……」

あの泣き声を聞いているととっても気が重くなる。実家を思い出して恋しいと泣けない私は、まだ感情がないままなのかと責められている気がするのだ。

「ココ、寝れないの？」

「……エミィ、起こしちゃった？」

「ううん。アタシ、元々寝ないから不眠気味なのよ。人間の体って、不便だわぁ……」

エミィは大きな欠伸をして、二段ベッドから降りてきた。ベッドのふちに肘をついて、寝転んだままの私の顔を覗き込む。

「どうしたの？ ココもホームシックかしら」

「ううん。逆よ……。何にも感じない。感情、あるはずなのに」

「気にすることないわ」

エミィの声は、肩にホコリがついてるよ、と言うような軽い声だった。ほんとに気にすることじゃないんだって思える声だった。そうね。実家を恋しく思う要素なんて、全然ないもの。

「……ねえ、エミィは私と逆の立場だったらどうする？ もし私が悪魔の学校に行って、人間だから孤立してたら」

「そりゃ、こんなにいい子だもの。他の悪魔から守るわ」

「私もそうしたいだけなの。でも、うまくいかないわ」

「最初から何もかもうまくいくわけないわ。アタシのことは気にしないでいいの。ココはまず、初めての感情をうまくコントロールすることから始めなきゃ」

「……そうね」

そうか。自分のこともうまくいかないのに、人のことなんて無理ね。

「エミィと話すと、なんでも悩みが解決する気がする」

「ふふ、すごいわね」

「うん。本当にすごいわ。私、エミィ大好きよ」

「ありがとう、ココ。おやすみなさい」

「おやすみなさい、エミィ」

エミィがおでこを撫でてくれると、不思議とずっと眠れた。

夢を見た。とても悲しい夢だった気がするのに、起きると何も覚えていなかった。

「おはよう、ココ。よく眠れたかしら？」

「うん。おはよう、エミィ」

「朝ご飯、食べてらっしゃいよ」

「エミィは？」

「もう食べたわ」

もしかして、エミィが悪い夢を食べてくれたのかな。でも学校の敷地内では人間の体だし……。単に私が忘れただけかな。

食堂からそのまま教室に向かおうと、荷物を持って階段を下りていく。エミィはもちろん、マーリーやアンブラともいつもご飯の約束はしていない。食堂で会ったら一緒に食べる、というくらいの暗黙の了解はある。エミィが部屋の外で一緒にいることを拒否する以上、3人だけで食べるというのは嫌だった。それはマーリーもアンブラも同じ気持ちだった。

「今年の1年生は呪い持ちが多いんですって。呪い学の先生が言ってたわ」

「アンブラ以外に呪い持ち知ってる？」

「知らない」

一人でのんびり朝ご飯を食べていると、近くを通り過ぎる集団の話している声が聞こえた。

アルファクラスの子で、名前は知らない子達だ。

アンブラの名前を知ってるってことは、誰かがアンブラのルームメイトかな。地元出身の子かな？ ……それなら、あんな冷たい言い方しないか。

「呪い持ちもさ、悪魔や吸血鬼ほどじゃないけど嫌だよなー」

「うんうん、ていうか、何したら呪われるんだろうね」

「だよ。アンブラも結局、被害者面してるけど呪われるようなことしたんでしょ」

言葉を失って、彼女達を見た。思わず、箸が折れそうなほど拳を握りしめていた。抗議するために立ち上がろうとすると、先に集団に近づく影があった。

「品が下がるようなことを言わないことだ」

「な、何よ……！」

「君達の汚い言葉は、彼女を好きな人から呪われるには十分だよ」

「!!」

彼女たちは何も言い返せずに走って食堂を出て行った。

「それに、被害者に非があるのは2割程度だ。無知を晒すのはよくないぞ」

ヴォルターの声が追いかける。彼女たちに聞こえていたかはわからないけど。

「なんだ、ヴォルター。優しいね」

「……別に」

「ヴォルター！ ありがとう！」

荷物を持って、ヴォルターの横に移動した。

向かいにはブロンドの髪と緑の瞳が印象的な、ヴォルターより少し幼い、高校生くらいに見える男の子がいた。彼がきっとマティアス・レオンハルトに違いない。

「ココ、だめだよ。君の友達はおレのことが嫌いだろ？」

「いいのよ。ヴォルターがアンブラをかばってくれたことを知ったら、みんな喜ぶわ。本当にありがとう。あなたが黙ってたら、私が彼女達を殴り飛ばしてたわ！」

「ヴォルター、この小さくて可愛い、暴力的なおトモダチは誰だい？」

「同じクラスの」

「ココ・ブレナンよ。よろしくね、マティアス。あなたのクラスのエミィとはルームメイトなの」

「なるほど、吸血鬼を怖がらないわけだ」

「怖くないわよ。少なくとも学校内ではね。だって、吸血衝動は魔法で抑えられているんでしょう？」

「まあね。でも長い牙は変わらないよ」

「チャームポイントだわ」

私が言うと、マティアスは肩を竦めた。

「彼女、柔軟性に富んでる。危機感が足りないともいう」

「優しいだろ。おレの友達になってくれるくらいだ」

二人は、普通の人間と何も変わらない。吸血鬼の牙だって、ちょっと長い八重歯だと思えば、どうってことない。16、7歳の男の子のように見える。

「ねえ、二人は何歳くらいなの？」

「200歳とちょっとかな」

「なんで200歳になって魔法学校へ？」

「気まぐれさ。ヴォルターは僕に付き合ってくれてるだけ」

やっぱり、命令とかじゃないんだ。私が頷いて見せると、マティアスはふっと笑った。

「でも、《魅惑》が同級生で入学してるところを見ると校長が何かしたのかもね」

「なんで校長先生が？」

「《魅惑》が人を探してるって話、聞いてないかい？」

「ああ、お友達を探してるって聞いたわ」

「探し人は二人。僕と同じ吸血鬼の公爵サクラティ・サヴァレーゼと校長に魔法を教えた史上最強の魔女ドロテア・チェスティってわけ。サクラティはともかく、校長もドロテアを探したいはずさ」

吸血鬼の方は知らないけど、魔女ドロテアの名前は聞いたことがある。突然姿を消した、とてつもない魔力を持った魔女。校長先生に魔法を教えたとは知らなかった。

「……魔女と悪魔と吸血鬼で、仲良しなのね」

「異端同士はつるむものさ。とにかく、僕も《魅惑》と同じ理由で魔法学校に入ったんだ。サクラティを探す手がかりを掴めないかってね」

「ふーん……」

世界中が探している人。有名な魔女だ。魔法史にも載ってるはず……パパが何か知ってるかもしれない。

「ココ、もうそろそろ朝ごはんを切り上げないと遅刻するよ」

「そうね。そういえば、二人は寮から校舎まで、どうやって行ってるの？ 日光が当たるでしょ？」

「寮の部屋から職員室に繋ぐドアがあるんだよ」

「へえ……。すごいよね」

「建前はそれだけど、監視にはもってこいじゃないか」

マティアスが肩を竦めた。そうか、それもあるかもしれない。

ヴォルター達と別れて寮を出ようとすると、チェルソが走ってきて横に並んだ。

「ヴォルターって、いい奴だね」

「見てたの？」

「もちろん、見てただけじゃないけど……ヴォルターに先を越されたんだよ」

そっか。チェルソはアンブラのことを昔から知ってるわけだし、私よりも怒っていたのかもしれない。

「アンブラの呪いは、無差別テロみたいなものだったんだよ。今もアンブラの声を奪ったやつが、アンブラの声を詐欺に利用してるはずだ」

「その呪いって、解けないのかしら」

「難しいだろうね。相手が自分で解くか、死んだときにしか解けないはずだ」

チェルソの声は沈んでいた。

「でも呪いが解けたら、アンブラの魔力は元の……ただの人間レベルに戻ってしまうんだよ。成人したら魔力が消える人とかもいるけど、魔法を突然使えなくなるのは……」

便利なことを知ってしまったら、戻るのは難しい。チェルソの言いたい事は、なんとなくわかった。

「なんで、アンブラを入学させたんだろう。彼女の魔力は、確実に期限付きなんだよ」

それなら、私も同じようなものだよ。

「……あ、あのね、私も呪い持ちなの」

お祖父ちゃんの呪いと、パパの呪い。二重にかかって、アルファクラスに入れる魔力がある。私の実際の魔力はどの程度なのだろう。教室に着くと、アンブラが飛んできた。

『なんか、ココが殴り合いのケンカしたって噂があるんだけど!』

「ココは殴り飛ばしたいって言っただけだよ」

『何があったらそんなこと言うの!?!』

「あ……」

『言いづらい事?』

「……アンブラの悪口言ってたから、殴り飛ばしてやろうと思ったの。でもその前に、ヴォルターが言い負かしちゃった」

どう言っているのかわからなくて、事実をありのままに言った。チェルソが小さく肩を竦めるのが視界の端で見えた。

『つまり?』

「ヴォルターが君をかばってくれたってこと」

「チェルソは何も言わなかったわ」

「君もじゃないか」

「ヴォルターの方が早かったんだもの」

「僕だってそうだよ」

私とチェルソがギャーギャー言っている間に、アンブラはそっとヴォルターの席に近寄って行った。

「ワーオ、アンブラまでヴォルターと話してる」

「マーリー、おはよう」

「何があったの?」

食堂での出来事をマーリーに話すと、マーリーも少しはヴォルターを見直したみたいだった。いい奴だから即友達とは限らないけどね、とはマーリーの弁。

でも今日は、私がヴォルターに話しかけてもランチの時にヴォルターを引っ張ってきても、誰も嫌な顔をしなかった。

「……迷惑だよ」

「そんなことないわ。ねえ、みんな」

「ご飯くらい、みんなで食べなきゃおいしくないわよ」

マーリーが素っ気なく言うので、ヴォルターも観念したように席についた。

「彼はチェルソ、彼女はマーリー。それに、アンブラとココ。みんな、彼はヴォルター」

「……よ、よろしく」

「ココってほんと、頑固ね」

「面白いメンバーね」

「《魅惑》も連れて来れば完璧だよ」

「《魅惑》じゃなくてエミィよ!」

「ご、ごめん」

「仕方ないわ。一度はココにそうやって怒られるのよ」

マーリーがくすつと笑った。

「エミィも一緒に食べればいいのよ。こっちにはもう呪い持ちと吸血鬼がいるんだから」

『呪い持ちなんて呼び方、嫌よ』

アンブラがマーリーに抗議する。

「……あ、あのね、私も呪い持ちなの」

みんなが驚いて私を見た。言っいいのかな。ちょっと、ドキドキしている。

「……私、パパに名前を奪われているの」

「だから養子ってことに？」

「説明は面倒なんだけど……元の名前も呪われてて……その呪いだと、学校生活に支障が出るから……えっと、パパが悪い名前を奪ってくれたの」

悪い名前。はっきり言葉にするのは、なんだか居心地が悪かった。

「先生とお父さんが友達っていうのは嘘？」

「本当よ。お父さんが保護者を頼んだのも本当。パパは先生の立場だし、呪いをかけたなんて印象が悪くなるかもしれないから、呪いのことだけは言えなかったの……」

「ま、そりゃそうよね。本当の名前は？」

「奪われてから思い出せないわ」

『よかった、呪い持ちなんて私だけかと』

「でも、二人だけじゃ呪い持ちが多いとは言わないんじゃないか。毎年一人二人いるものじゃないのか？」

ヴォルターが助言を求めるようにマーリーをちらっと見た。マーリーは頷いて答えた。

「そうね。実際、呪いってほんとはよくある話なのよ。明日からエミィもランチに誘いましょ」

「マティアスも誘う？」

「いや、彼はいいよ。元ター人が好きな性格だから」

「そう」

みんな、私の呪いの話についてはあっさりしたものだった。隠してたことについても何も言わなかった。だからこそ、隠してしまったことを後悔した。

察にかえて、エミィにランチの話をする、少し複雑そうな顔だった。

「どうしたの？」

「ココ、あのね。悪口を言っていたなんて本人に言わない方がいいのよ」

「え？ そうなの？」

「確かにヴォルターがかばってくれたことはいいことだし、言いたいことだと思うわ。でもね、アンブラはルームメイトに悪口を言われていたかもしれないし、言われてないかもしれない。本人はどっちにしろ否定するから、確認しようがないのよ」

「えーっと、嘘を言うということ？」

「自分を守るためにね。人は嘘をつくわ。すると、どう？ アンブラはルームメイトにこれまでと同じように接することができるかしら」

「……どうしよう、私、なんてことを」

初めて、自分のしたことがわかった。

それだけじゃない。私、エミィにいろんな人との会話をそのまま、悪意のある言葉もそのまま言って聞かせてた。

「……私、アンブラを傷付けちゃったの？」

「さあ、どうかしら。でも、今後は気を付けた方がいいわ」

「それにエミィも傷付けてたのね」

「アタシはいいのよ。ココがいつつも言い返してくれてるじゃない。今までのココは悪意のある言葉にも何も感じなかったのね。だから素直すぎたのよ。今後は気を付けるの。いい？」

「うん。教えてくれてありがとう」

エミィが出してくれたハーブティーを飲んだ。少しだけ、落ち着いた。

「そういえば、マティアスとも話したの」

「あら、そうなの？ 教室じゃ、一言もしゃべらないわよ」

「けっこう普通だったよ。彼が言った。エミィが探してるのはドロテアとサクラティだって」

「ココには言ってなかったかしら。そうよ」

「……は、ロクサーミアの……」

「彼もサクラティを探してるんですって」

「マティアスが？ でも彼、生まれたのはサクラの失踪後よ」

会ったこともない人をどうやって探すのだろうか。首を傾げると、エミイも同じく首を傾げた。

同じ吸血鬼の公爵同士、探した方がいいという使命感だけで探しているのだろうか。

「あ、そうだ。パパは、何か知らないかな？」

「ブレナン先生が？」

「だってパパは魔法史の専門よ。サクラティはわからないけど、ドロテアって有名な魔女だもの。何か、知らないかしら」

「そうねえ……」

エミイは頬杖について考え込んだ。その姿すらセクシーだ。

「……そうね、彼、名前を奪う呪いをドロテアに習ったのかも。昔、名前を奪われた子に会ったことがあるって言ったでしょ？」

「うん」

「その名前を奪ったのが、ドロテアだったのよ。あの子の場合、ひどく恨まれていたけど」

あの子、元気かしらねー。エミイがひとり言のように言った。

あの子というのがドロテアのことなのか名前を奪われていた子なのかは、よくわからなかった。

「じゃあ、決まり。パパと……あと、校長先生もドロテアを探してるみたいって言ってたわ」

「ああ、エヴァンジェリンはだめよ。話すどころか部屋にも入れてくれないわ」

「そうなの？ じゃあ、パパのところに行こう」

「そうね。今行く？」

「うん。善は急げよ」

エミイを引っ張るように、クライヴの研究室に向かう。

「やあ、ココ。……と、エミイ」

「パパ、ドロテア・チェスティっていう魔女について教えてほしいの」

「ドロテアなら4年生の魔法史でやるよ」

「エミイが探してるのは彼女なのよ」

クライヴが首を傾げる。

「探してる友達が、ドロテアだって？ 彼女は孤高の魔女だ。友達なんて……校長先生は何も……」

「そうよ。孤高の魔女よ。悪魔と吸血鬼しか友達がいないんだから」

「それなら、僕よりも君の方が詳しいんじゃないか？ 僕はただ、資料と校長先生の話をもとめるくらいしかしてない」

なーんだ。思わず、いつの間にか出されていたミルクを一気に飲み干した。

「先生、そんなことないわ。久しぶりにあの子の家に来てみたらこんな学校になってるから探してるんじゃないの」

「え!? ここって魔女ドロテアの家だったの!？」

「久しぶりって……魔女ドロテア失踪からもう140年も経ってるのに」

私とクライヴは、それぞれ驚いていた。

「……………ん？ 140年？ アタシ、120年ほど前に会ったわよ。本人じゃなくて夢を食べただけだけど。その時、ドロテアに名前を奪われた子にも会ったし」

「ちょっと待って。そうだ、その……名前を奪う呪いのことも聞きたかったんだ」

エミイの話とクライヴの話をもとめると、校長先生によるとドロテアは140年前にサーカスを見に行くと言って出掛けたっきり、失踪してしまったそう。ついでに、サーカスのテントがあった場所は何故か壊滅状態だったそうで、ドロテアが何かに巻き込まれたことは間違い

しなかった。……また、その魔法の力が弱くなったのは、魔法の力が低下してしまっただけで、魔法の力がなくなったわけではない。また、120年前にエミイがあったドロテアは、夢の中にエミイが入り込めるほど魔力が低下していたらしい。その際、ドロテアに名前を奪われているサーカス団員の青年にあったという。しかし二人の姿を見つけることはできなかったそうだ。そして、取り残された校長先生はドロテアの家跡地に魔法学校を建てた。

「……ふーむ……。何らかの形で、生きてはいるんだろうね」

結局、その結論しか出なかった。

「まあ、120年前の目撃情報はこちらにとっては大きな収穫だ」

「はあ……エヴァンジェリンに魔法が使えればきっと一発で見つけられるのにねえ……」

「校長先生とも知り合いなのかい？」

「ええ。桜が行方不明になった方が先で、桜を日本で見つけた後にドロテアに教えにいったの。そこで弟子になったエヴァンジェリンに会ったわ。今と変わらない見た目だね」

「吸血鬼の公爵が、日本にいたの？」

「なんか、ショーグンサマに飼われてたみたいよ。プリンセスみたいな待遇でお気に入りって暢気に言ってたわ。とにかく、エヴァンジェリンって魔力はばかみたくあるのに魔法は全く使えないの。だからドロテアの魔法を見ながら魔法理論の研究をしたのよ」

エミイにとっては、私はもちろん、クライヴも校長先生も子どもみたいなものなんだろう。

「まったく、ワーズワースといえば“青と赤の人間”の直系なんだから魔法が使えないなんておかしな話よね」

エミイが冗談みたいに言ったその瞬間、クライヴがマグカップを取り落した。破片が散らばり、コーヒーがこぼれたのを気にもせずにエミイに詰め寄る。

「校長先生が“青と赤の人間”の直系？ 今、そう言ったかい？」

「え、ええ……。今授業でやってるユーロ王だって、ユーロ・ワーズワース……ですよね？」

「さては君、知ってるからって授業聞いてないな？ ユーロ王の姓は不明だ。……しかし……そうか、それなら校長先生の魔力も説明がつく」

「ねえ、エミイは女神も知ってるの？」

「知らないわ。神話の通りなら桜達が女神を守ってるはずだけど、桜は女神なんていないって言ってたし。本当にいたなら、桜が生まれるよりも前に起きちゃったのかもね」

「いると思う？」

「いるんじゃない？ だって、確実に誰かをモデルにしたような女神像が町中にあるんだもの」

「そうだね。ああいう像って、誰にでも似るように特徴がないものが多いけど、女神像は誰かに似せようとしてる感じがするな」

クライヴが我に返ったように言って、パチンと指を鳴らして壊れたマグカップを片付けた。

「ユーロ王……いや、“青と赤の人間”の姓までわかるなんて有益な時間だった。資料さえあればいいんだけどな。……ああ、そうだ。ドロテアについては力になれなくて悪いね」

「いいえ、こちらこそお時間を作ってくださってありがとう」

エミイに促されて寮の部屋に戻った。

結局、ドロテアについて学校で知り得る情報はないのかもしれない。私がかっかりしていると、エミイは笑ってがっかりすることじゃないわ、と言った。

6話

授業を受けていると、私は魔力についてほとんど何も知らなかったんだと改めて思う。そして、海外の魔法使いの家系の子達が、いかに魔法に親しんで生活してきたか、よくわかった。私は何も知らない。ただ魔力だけがある。

魔力は、増減する。これは、呪いや魔法の使用などの影響と、体質の影響がある。魔力を使っても回復する人としらない人がいたり、魔力よりも体力の消耗が激しい人がいたりする。

自分できちんと体質を把握しておかないと大変なことになる可能性だってある。……とはいえ、回復しない人は入学できないみたいだからその点は大丈夫みたいけど。

「……ミニレポート、終わったあ？」

『終わってたらさっさと部屋で寝てるわ』

「アンブラって、レポート用紙に書くのも魔法で？」

『こっちの方が楽で……もう戻れそうにないわ』

少しだけ、ヴォルターと仲良くなった朝のチェルソとの会話を思い出した。アンブラの呪いが解けたら、アンブラの声を失った分の魔力は底をつき普通の人間レベルに戻ってしまう。

この便利な魔法の存在を知る前の生活には、戻れないだろう。

「ココ、考えごと？」

「……あ……、うん。レポート、難しくて。他の本借りてくるね」

席を立て、本棚の合間を縫っていく。

私達は今、魔法理論の宿題であるミニレポートを片付けに図書室に来ている。図書室、というには広すぎるけれど。

ミニレポートのテーマは、魔力について。日本の小学校ではレポートの宿題なんかなかったから、さらさらと書いていくマーリーやアンブラよりも、かなり遅れをとっていた。

窓際のデスクを並んで陣取っている二人の元に戻ると、一度部屋に帰っていたエミィが戻ってきていた。エミィはアルファクラスで授業が違うから、まだミニレポートの宿題は出されてない。

「ココ、進んだ？」

「いいえ。難しいわ」

「難しく考えないで自分の考えを書けばいいのよ」

席に座って、パラパラと本をめくっていく。ふと、気になる文を見つけて手がとまる。

「ねえ、エミィ。これ、どういうこと？自分に混ざっている誰かの魔力は感じない」

「ああ、これは……自分の祖先の魔力は感じないってこと。ココの両親とかお祖父ちゃんとか、……ブレンン先生のも。でも、ココのイトコとかはココの魔力に混ざってない、他人の魔力が混ざってるから魔力を感じるわ」

『私に呪いをかけた人の魔力を感じ取って探すことは、私にはできないのね』

「そういうこと」

エミィの説明ってわかりやすいわ。

それから1時間ほど本を読み漁って、なんとか魔力の要点をまとめて自分の考えを書いた。

「はあ……魔法学校って、魔法理論実践みたいな授業ばかりだと思ってたのに」

『その魔法理論実践も全然魔法って感じしないしね』

アンブラが苦笑する。

授業が始まってから2週間、まだ魔法理論実践は魔力の体質の見極めをしていて魔法の実践は全くしていない。というのも、最初の授業が魔力ほぼゼロの状態から何日で魔力が全回復するかはかるというもので、まだ回復しきっていないクラスメイトがいるからだ。

私は、一晩寝れば完全に回復した。大半はこの一晩寝れば回復するパターンだった。アンブラは2日かかったけど、マーリーは10分ほどで回復していた。

それよりも驚いたのはエミィで、マーリーのルームメイトがマーリーに語った話によると、エミィとマティアス、それに飛び級入学の男の

「……」とつぶやいたのは、その瞬間に話した話について、一瞬、その瞬間、その瞬間に……
子の3人は魔力が多すぎて授業中に魔力をゼロにできなかったそうだ。ヴォルターはマーリーと同じように数十分で回復していたから、マテ
ィアスなんかは使ったそばから回復していたのかもしれないなって話題になっている。

「ねえ、レポート終わったし学校の外に遊びに行こうよ」
「そうね。お姉さんが3人にお疲れ様のケーキを奢ってあげるわ」
「わー！ほんと!? 街に出たこと、まだないのよ!」
『エミィ、大好きよ!!』

きゃあきゃあ盛り上がったまま、服を着替えるために寮の部屋に戻るようになったが、初の観光はお預けになってしまった。
血相を変えたクライヴと鉢合わせたかと思うと、彼が寮の1階にいた生徒達に自分の部屋に戻るように言ったからだ。
あまりの気迫に、私達は誰もクライヴに質問することもできずにバラバラに部屋に戻った。

「何があったのかしら……」
「何だろうね。パパの様子を見る限り、きっと重大なことが起こったのね」

それも、あまり良くないことが。
ようやくレポートが終わったところだったので勉強をする気にはとてもなれず……とはいえ、部屋は以前マーリーが殺風景と評したままだ。
部屋の真ん中にあるラグの上で、クッションを抱きしめながらエミィに話しかけることくらいしかすることがなかった。たぶん、エミィも
同じだと思う。

「《魅惑》、いますか？」

少しだけ低い声だった。誰だろう。エミィを見ると、彼女も私を見て大きく瞬きした。心当たりがないらしい。エミィは少し首を傾げてド
アを開けた。

廊下には何度かすれ違ったことのある先生がいた。確か、3、4年生の選択の授業で、南塔に研究室がある先生だ。

「少し確認することがあります。来てもらえますか？」
「……はい」

エミィが伏し目がちに返事をすると、先生の目が光ったように見えた。あれは、何かを確信した顔だ。

「ちょっと待ってください！ 何の用かはっきりすべきです！」
「君には関係ない」
「私、先生が何を考えているかわかる。エミィを疑ってる……ううん、はっきり言って罪をかぶせようとしてる」

エミィの腕を引っ張ると、先生はイライラした顔で無理に猫なで声を作ったような声を出した。

「大丈夫だよ。ちょっと確認することがあるだけで……」
「じゃあ、なぜ私の前ではダメなの？」
「プライバシーに関する質問だから」
「ココ、いいのよ。疑われるようなことは何もしてないわ」
「ダメよ、エミィ。私、わかるの。先生は今、何かを決め付けたわ。それじゃなくても何かが起こってエミィが連れていかれたら誤解され
るわ。先生、みんなの前で誤解のないように質問すべきです」

私がエミィの手を離さないの、先生は完全にイライラを隠さなくなっていた。

「よろしい、君も一緒にきなさい」
「嫌！ 離してください！」

力で大人に敵うはずもなく、ずるずると引きずられるように階段をおりていく。
先生に連れられて現れた私達をみて、クライヴが目丸くして駆け寄ってきた。

「ココ、部屋にいなさいって言ったじゃないか」

「……、部屋は……、あつて……、あつて……」

「先生のクラスの子ですか？　自分が《魅惑》を連れてきたら、くっついてきたんです」

「なぜ彼女を？」

「こいつが犯人に決まってるじゃないか」

先生があごでエミィを示すと、クライヴが私と同じくらい顔をしかめた。

「理由は？」

「悪魔じゃないか。こいつが彼の精気を吸ったんだろう」

「エマ、どうだい？」

「馬鹿げてるわ」

エミィがとても冷たい声で言った。クライヴがそうだね、といわんばかりに肩を竦める。

「女子は男子寮には入れませんよ。あなたが女子寮に入れたのは教師だからで……」

「悪魔は実体がないから通り抜けられる」

「……ああ、先生は今年から就任したから知らないんですね。学校の敷地には悪魔除けの呪いがかかっているの、彼女が実体化を解いて学校の敷地内に存在することはできないんですよ。それで……、彼女が犯人だという根拠はなんでしょうか？」

「何でだよ。わかるだろ！　悪魔じゃないか！」

「大体、何か勘違いしているようですが、《魅惑》は獺であって夢魔ではありません。実体化を解いてもできることといったら夢を食べることぐらいですよ」

ウォーリック先生も冷めた声で言う。それから、優しい顔でエミィに向き直った。

「教師の立場にありながらあなたを不愉快にしてごめんなさいね、エマ。もう部屋に戻りなさい。そこの、盗み聞きしている生徒もみんなです」

いつの間に集まっていたのか、生徒達はみんな改めて解散することとなった。

私が階段をのぼりながらも怒っていたらエミィはくすくす笑った。

「だから大丈夫だって言ったじゃない」

「いいえ、とっても失礼だったわ。謝罪したのだから全然悪くないウォーリック先生よ！」

「そういうこともあるわ」

エミィがあまりに怒っていないので、なんだか馬鹿馬鹿しくなって話題を変えることにした。さっき、気になったけど聞けなかったこと。悪魔除けの呪いというものについて。

「それにしても、悪魔除けの呪いなんてものがあるのね」

「まあ、珍しいわね。ほら、エヴァ……校長先生って、悪魔に弱い。ウォーリック先生はああ言ったけど、獺って夢を食べるだけじゃなくて睡眠も操れるの。それでね、若い頃の校長先生ったら、アタシが操ろうとしなくても近寄ったら寝ちゃうくらいだったのよ。だからきっと、呪い学の先生に悪魔除けの呪いをかけてもらったのね」

クライヴと3人で話したときは堂々と校長先生を呼び捨てにしていたから、これはきっとまだ聞き耳を立てている生徒向けの言葉でもある。

そうだが、さっきの先生たちが言った言葉は、きっとエミィを誤解したままの生徒達も聞いていたはず。嫌な出来事だったけど、エミィに対する誤解が一気に解けるきっかけになったかもしれない。

てっぺんの自分の部屋に戻ると、急いで往復したから足がパンパンになっていた。ストレッチをしながら考える。

「精気を吸われたような状態の子が発見されたってことよね」

「そうなるわね。精気って、魔力のことよ。悪魔用語。つまり、魔力が尽きた状態の子がいたのよ。エドワールがウォーリック先生の奥に立ってたところを見ると、たぶんエドワールのルームメイトなのね」

「エドワールって誰？」

「飛び級の……ほら、学年で最年少の子よ。けっこう魔力も多くて」

「あー、顔わかんないや。でも、最年少の子のルームメイトって言ったら……うちのクラスのセフェリノ・ベルスだわ」

セフェリノ・ベルスかぁ。セフェリノ・ベルスといえば……。

「魔法理論実践の授業で魔力が回復するのに何日かかるかっていうの、まだ回復してなかったのがセフェリノ・ベルスなのよ。きっと、回復しなくて倒れたのね。魔力って生命力でもあるんでしょ？」

「そうね。回復しないタイプの子だったのかしら」

「でも、入学の資格はちゃんと回復するタイプであることでしょ。それに、魔法理論実践の授業では一般の人間程度には魔力を残してたはずよ」

「そうよねえ……。倒れるほど魔力が減るなんて、魔法を使ったのかしら？ 可哀想だわ、エドワール。小さいのにルームメイトが倒れちゃうなんて、きっと心細いはず」

それから、1時間もしないうちに寮内放送があった。もう部屋から出ていらしい。何の連絡もなかったけど、マーリーとアンブラが部屋に遊びに来た。

「これから街に出てもすぐに帰ってこなきゃいけないから、外に行くのは明日がいいんじゃないかと思うんだけど、どう？」

「いいと思うわ」

「ねえ、外に出たらエミィは実体化を解くの？」

「人間の体って、とても肩が凝るのよ。できれば実体化を解いて飛び回りたいわ。夢も食べたいし」

『夢って、どんな味がするの？』

「おいしいの？」

アンブラとマーリーの矢継ぎ早の質問に、エミィはそうねえと言いながら新しいレポート用紙を取り出して風船みたいな絵を描いた。

「大体、こんな見た目」

『風船ね』

「そうね。この風船に、色がついてるの。色が夢の感情を表してるのよ。明るい色のは、大体美味しいわ」

「食感とかは？」

「噛むものじゃないから食感はないの。とにかく、体に取り入れるっていうか……」

その後も、わいわいと夢の話をした。今まで見た中で面白かった夢の話や、エミィが会った夢の話など。

その日に見た夢の中では、エミィがみんなと随分仲良くなっていた。とても嬉しく思う夢だった。

7話

月曜日、教室に入るとセフェリノ・ベルスは普通に座っていた。

「おはよう、セフェリノ」

「おはよう、えーっと、ココ……だっけ」

「そうよ。あの……」

あれは、セフェリノではなかったのだろうか。最年少の男の子と同じ部屋と言っていた気がするけど……。それとも、そもそもエドワールのルームメイトが倒れたという予想が間違っているのだろうか。

「……ああ、心配してくれてるんだね。ありがとう。もう大丈夫だよ」

私が言い淀んでいると、彼の方が勝手に判断して返事をくれた。

やっぱり、彼だったのね。

「魔力も戻ったみたいね」

「ああ。ここ数日体調が悪かったし、戻らなかったけど……。僕の体質って、かなり体調に関わるみたいだね」

「そうなの。気を付けなきゃね」

「そうだね。おかげでせっかくの週末が保健室で潰れちゃったよ」

「ほんと、よかったわ。元気そうで」

チェルソによると、セフェリノのルームメイトであるエドワールは大層彼を心配して、ずっとお見舞いに行っていたらしい。確かに、エミィの言うとおりに心細かったのだろう。

「魔力もケタ違いだし、まだ6、7歳だからエドワールってどうしても孤立しちゃうんだよ。何考えてるのかわからないところもあるしね。でも今回の件でかなり見直した。いい子だよ」

人間だと、誤解はこんなにも簡単に解けるんだ。対するエミィに同情しつつも、仕方のないことなのかと呆れてしまう。

「そういえば、昨日……エミィが飛んでるのを見たよ。実体化を解いてたんだろうけど」

「そうね。実体化って、窮屈で肩が凝るんだって」

「……僕は君達に散々エミィの話聞かされてるけどさ、やっぱり、偏見ってあるんじゃないかと思うんだ。つまり、実体化を解いた姿で誤解を招くというか……」

『なぜそうなるの』

アンブラが怒ったような顔になると、チェルソは慌てて言い訳めいたことを言った。すると、黙って聞いていたヴォルターが小さな声で「彼の言い分はもっともだよ」と言った。

「犬が怖い人間にどれほど優しい犬を見せても、きっと怖く感じる。それと一緒に。悪魔は悪魔、吸血鬼は吸血鬼。君たちみたいにエマ、ヴォルターだと考えてはくれない。でも彼女に実体化を解くことを制限する必要はない。放っておくのが一番だ」

「ヴォルターは、やっぱり諦めてるの？」

「君たちがよくしてくれるだけで、十分に充実した学校生活になっているさ。エマもね」

それで本当にいいのかしら。

「みんなが友達っていうのは、あんたがドロテアみたいな魔女だとしても無理ってこと」

「マーリーってクールよね……。あ、ドロテアってよく聞くけど有名なの？ 私、突然消えたことくらいしか知らなくて」

「本当に魔法使いの常識知らないのね。ドロテアにできないことはないって言われるくらい偉大な魔女なのよ」

「でも、ちょっと変な人だよ。創世の女神は魔女だって言ったり、いつもロココ調のドレスを着てたり」

変な人、か。

変な人って、チェルソは言い切ったけど、実際に会った事あるわけじゃないわよね？

一般的に変な人ってことかしら。どういう基準で変なのかしら。

『……どうしたの、ココ』

「あ、ううん。何でもない」

私が今まで学んでこなかったこと。言葉の裏の、感情。こういうふとした瞬間に躓いてしまう。
感情を手に入れる前の方が、まだスムーズに受け答えできていたかもしれない。

「そういえば、セフェリノの魔力が回復したなら魔法理論実践の魔法が本格的に始まるわね」

「そうだね。ところで、いつ移動するんだい？ もうそろそろ授業が始まるよ」

「えっ!？」

『早く言ってよねー!』

みんなでバタバタと走って教室を移動する。なんだか楽しかった。

魔法理論実践の教室は他の教室よりは近いので十分間に合ったけれど、授業が始まってもしばらくは息が整わなかった。

「いよいよ魔法理論で習ったことを実践していきます」

ウォーリック先生がかすかに笑った。

「初めは、まず、物を動かすことから。動かすための体力を魔力で補う必要があります。呪文は“ムバニア”」

動かすための体力が必要ってことは、重いものになったり動かす距離が増えたりすると魔力を多く消費するということね。

「ペンを10センチ動かしてみましよう。集中して、ペンが動くことを想像してください。それから、呪文を唱えます」

「……ムバニア」

ペンがぴくっと動いた。けれど、動いたのは2、3ミリといったところだ。

隣を見ると、ヴォルターはペンがすーっと動いている。

「みなさん、ヴォルター・リンハルトがとても上手でしたよ」

「先生……ペンの中身だけ動いちゃったわ」

あら、と言って先生が指を鳴らすと、マーリーのペンが元に戻った。先生、呪文言ってない。呪文を言わなくても魔法が使えるようにできるのだろうか。

もう一度、と集中してペンが動くところを想像する。

「ムバニア！」

ペンがぱっと消えて、ぱっと現れた。

「できたぁ」

「すごいな、ココ」

「ふふ、ありがとう」

次々とできるなか、アンブラだけはうまくできなかった。

『全然ダメ』

「アンブラ・タッシナーリ、息を吐きながらやってみなさい。あなたは声が出ないから、息を止める癖があるようですね」

「先生、息も魔法に必要ということですか？」

「そうですね。……マーリー・ロングフェロー！ 起きなさい！」

マーリーったら、また寝てたのね。眠そうな目をごしごしこすってる。

「息が魔法に必要というわけではありません。必要な魔力を使うのに、息に混ぜて吐き出す人が多いのです。慣れれば息を止めていても魔法をうまく使えるようになります。さあ、もう一度試してごらん下さい」

みんなが見ている中、アンブラのペンがずっと移動した。

『できた……』

「全員よくできました」

「先生、一つ質問が」

手を挙げたのは、アデル・アビントンだった。

「なんですか？」

「アンブラは声が出ないから呪文を唱えてませんよね？ 呪文は、必要ないということでしょうか」

「……まあ、結論を言うと必要ありません。魔法に必要なのは魔力。時には魔力で補えない時間や体力、血液など。人智の及ぶものではありません。なので、特定の言語の呪文などあるわけがないのです」

「それでは、なぜですか？」

「呪文に意味はありません。ですが、適度な量の魔力になる単語で調節しているのです。魔力の調節がうまくできない間は、呪文に乗せて魔力を吐き出す方が効率的です。呪文を言わなくても魔力の調節がうまくできるようになったら別の方法を教えることになります」

あの、クライヴやウォーリック先生が指を鳴らすだけで魔法を使えるのは、そういうことなのだろうか。

何度かペンの瞬間移動を練習して授業は終わった。

初めて魔法らしい魔法を使った。しばらくこればかり使ってみようとするかも。

次の授業は魔法史だ。廊下を歩いていると、マーリーがうーん……と小さく声を漏らした。

「……ちょっと、体調悪い」

「え？ 大丈夫？」

「眠くて、仕方がないの……」

顔色が悪いわ、と一歩近寄ると、突然マーリーが後ろに倒れた。

「わっ!?!」

ヴォルターが受け止めてくれなかったら、マーリーは頭を打っていたかもしれない。

「大変。保健室に連れていかなきゃ！」

「……寝てる」

私とヴォルターで保健室に連れて行って、アンブラとチェルソは先に教室に行ってクライヴにわけを説明することになった。

遅れて教室に行くと、クライヴは笑顔で迎えてくれた。

「マーリーの様子は？」

「しばらく休めば治るだろうと言っていました」

「そうかい。よかった。二人とも座って」

クライヴはそのまま授業を始めた。

ユーロ王。世界史の重要人物で、魔法史では歴史上初の魔法使い。

魔女や魔法使いはみんな、このユーロ王の子孫なのかな。

「ココ」

「なあに？」

「呼ばれてる」

チェルソにつつかれて顔をあげると、クライヴがじっとこっちを見ていた。

「日本の魔法使いの祖先と言えば、誰？」

「え……？」

「……魔法で国を統一した女性」

「あ……卑弥呼のこと……ですか？」

「そう。ホンファ、中国はどうか？」

「武帝、昭烈帝、武烈帝です」

リュウ・ホンファは自信たっぷりに答えた。私とは大違いだ。

「そう。卑弥呼も三国の王も大体200年頃に現れてる。このクラスにアフリカ大陸出身の子はいないけど、エジプトの魔法の先祖・クレオパトラも、この少し前だ。魔法使いや魔法は、この頃から各地に点在している」

魔法理論で、魔力は受け継ぐものって習ったわ。神話でも、“青と赤の人間”や吸血鬼達も女神から魔力をもらってる。

各地の魔法使いの祖先だけ同じタイミングで突然変異ってことあるのかしら。ユーロ王がいくら勢力を広げようと、日本まで来てないはずだもの。

みんな、不思議に思わないのかしら。魔法史の授業は、再びヨーロッパのユーロ王の話に戻ってしまった。

「あー……よく寝た」

ランチタイムの時、マーリーが戻ってきた。かなりさっぱりした顔をしている。

「聞いたわマーリー、倒れたんですって？ もう大丈夫なの？」

「うん。寝てただけ」

『いつも授業中寝てるのに、珍しく先生に起こされたのよ』

「えー、私、そんなに寝てる？」

「……寝てないつもりなら、逆に危ないと思うよ」

「……………マジ？」

チェルソが言うと、マーリーが目をキョロキョロさせた。

え？マーリー、ほんとに自覚ないってこと？

「どうしよ、私、ビョーキってこと？」

「みんな、そんなに脅かさないの。魔力の回復のために寝ちゃうだけよ」

エミイが言うと、ヴォルターがちらっとエミイを見て、頷いた。

「最初の授業でも爆睡して10分で回復していたから、きっとそうだろう」

「あ、なんだ」

マーリーがほっとした様子でランチのサンドウィッチをかじり始める。なんだか妙な違和感を覚えたけれど、話しているうちに忘れてしまった。

この違和感ってのを思い出したのは2年生も終わる頃。

「……ばあちゃんが死んだから、帰るわ」

マーリーは唐突に言って、クライヴに連れられてイギリスに一時帰宅した。クライヴが教室に呼びに来る直前、いつもみたいに爆睡していたのにぱちっと起きたのが、とても印象的だった。

ランチタイム、私達はマーリーのお婆ちゃんのために祈った。

『マーリーのおばあちゃまって、魔法よね？ それにしては短命じゃない？』

「確かに」

「……お婆さまだったのね」

エミィが静かに口を開いた。

何か、知ってるみたい。そういえば、前もあった。妙にエミィが断定して話をはぐらかしたこと。

「何か知ってるの？」

「マーリーって、寝る度に少しずつ魔力が増えてたの。あれ……ちょっとでも疲れたら寝ちゃう呪いをお婆さまにかけられていたんだわ」

「……え？」

『マーリーが寝ておばあчыまに何の得があるの？』

「マーリーの魔力が増えるのよ。ただ、それだけ。魔力を少しずつあげるのに有効な方法が呪いで、一番害がなさそうな効果が睡眠ってだけよ」

「……マーリーには黙ってた方がいい。本人も、気付いてるかもしれないけど」

ヴォルターが静かに言った。チェルソも暗い顔で頷いた。

「マーリーの家って、古い魔法家系だろ。けっこうマーリーの魔力が少ないことで風当りキツイんだってさ」

世界で一番、愛のこもった呪い。

マーリーのお婆ちゃんは命をかけてマーリーを親戚の悪口から守ろうとしたんだわ。

「そんなのってないわ……」

ただただ悲しくて、涙が止まらなかった。

8話

マーリーのお婆ちゃんが亡くなって以来、マーリーが授業中に寝てしまうことはなくなった。

3年生になると、自習室の塔が変わった。担任はクライヴのままだ。チェルソの身長がひょろりと伸びて、声が低くなった。アンブラも細い体がなんだか女性らしくなった。

私は子どもっぽいままだ。でも悲しみや楽しさも、普通に違和感なく感じられるようになってきた。

それはいいんだけど、寂しさとか嫉妬とか、あんまり歓迎したくない感情も感じる。

「……また3人」

マーリーもアンブラもチェルソも、憧れの先輩とか恋人になりそうな人とか、そういう人とランチをとるようになっていった。毎日じゃないけど、ちょっとさびしい。

「ココはいないの？ 気になる人」

「いないよ……。まだその感情、わかんない」

「……感情って、随分事務的だな」

あ、しまった。ヴォルターもいたんだっつた。

そして私は、随分素直にしまったと顔に出してしまったらしい。ヴォルターはパスタを口に運びながら肩を竦めた。

「気にしないで。忘れるから」

「あ……。違うのよ……。元の悪い名前の話、したことあるでしょ？」

「悪い名前をプレナン先生が奪ってるっていうやつだけ」

「そう。その悪い名前がね、魔力の代わりに感情を奪うのよ。だから、パパに名前を奪われるまで感情がなかったの。だから……。あ、ほら、私日本人にしては空気読めないでしょ？」

「……ああ……。うん……」

やっぱりそう思われてたのね。

「怖いもの知らずなわけだ」

「そうなの。怖いって感情がなかったから」

お父さんにもなかったってことは言わなくてもいいかな。

お母さんはどうなんだろう？ いるのかいないのかもよくわからなかったから……。今思えば、避けられていたんだろう。そりゃあ、感情のない娘なんて気味が悪いかも。お母さんが魔法を使えるのかどうかさえ、私は知らない。

「ほんと、随分感情豊かになって嬉しいわ」

「でも、好きっていうのは……。ほら、私エミもヴォルターも大好きよ。恋愛とはどう違うのか、わかんないのよ。相手あつてのものだし」

「焦る必要はないんじゃないか？ オレも200年生きてるけど恋人とかいたことないし」

「アタシも400年生きてるけど、恋愛ってしたことないわ。いつもドロテアかサクラと遊んでたし」

「つまり、私達3人って恋愛下手が余っただけなのね……。あ、マティアスは？マティアス連れて来よう」

アルファクラスに遊びに行くと、マティアスは廊下側で本を読んでいた。窓側だと太陽光が当たるものね。

「マティアス、御機嫌よう」

「……こんにちは、ココ」

「あのね、ランチ、一緒にどうかしら」

「いいよ」

エミとヴォルターは、私がマティアスを連れてきたのを見てびっくりしていた。

「君が他人とつるむなんて」

「そうよ。アタシが話しかけても無視するのに」

「君達はいい歳だろ。彼女は小さな子供だ」

「……もう13歳よ……」

なんだかがつくりきた。

そりゃ、吸血鬼の13歳は小さな子供かもしれないけど……。

「これから一緒にどうかしら。3人にまで減ると、やっぱりさびしいものがあるわ」

「4人ならいいのか」

「過半数だもの」

「3人になった時は呼んでくれ。人間の子達と仲良くする気はあんまりない」

「私も人間よ」

「君は断っても納得しないだろう。……まったく……」

ヴォルターが苦笑する。

「マティアスがここまで追い詰められてると面白い」

「……あら？ マティアス、口の端に血がついてるわ」

「なんだって？ ……ああもう、今日はツイてない」

マティアスが口の端をゴシゴシ拭いながら口を尖らせる。

「どうしたの？」

「詠唱破棄登録の実践があったんだ。指を鳴らそうと思ったのに、ちょうど登録する時にぶつかってきた奴がいて舌を噛んじゃったんだ」

「えっ!? 大丈夫!?!」

「こんなのすぐ治るからいいんだけどさ、これから魔法使うたびに口の中が血まみれだよ」

「詠唱破棄登録って、変えるの難しいらしいからねえ」

「エミィは？ どんなのにしたの？」

「かかをと鳴らすの」

私は何にしようかなあ。

指を鳴らす人が一番多いけど、ちょっと違うのがいいなあ。

それから私は、丸2日悩んでいた。

「みなさん、詠唱破棄については前回までに勉強した通りです。うまく魔力をのせられるアクションを決めて、呪文の代わりにします。今日はいよいよアクションを登録します」

「昔登録の時におならしちゃった人がいるんだって」

「えー？ それって、どうするの？」

「おなら出す達人にならなきゃいけないんじゃない？ 他にはね……」

マーリーがこそこそ変な話をしてくるので笑うのを我慢するのに苦労した。

私は、もうどんなアクションにするか決めていた。元の名前、感情のハートマークを指でかく。

「それでは、準備ができた人から始めてください」

詠唱破棄登録は、呪文を唱えてそのアクションを行うだけ。ただ、何度も行うことはできない。

小さく呪文を唱えて、空中にハートマークを描く。

周りを見てみると、チェルソは無難に指を鳴らしていた。マーリーは手を叩いていた。アンブラは髪の毛をくるっと指で回していた。

けっこういろいろあるなああとヴォルターを見ると、彼は悩んでから舌を噛んだ。

「ちょっとヴォルター……痛そうね」

「いろいろあって」

マーリーが顔をしかめても、彼は笑ったままだ。

マティアスが、それだから？変に浮いてしまわないように……かな。マティアス、次の日も口を尖らせてたもの。やっぱり、ヴォルターって優しい人だなあ。

「何？ ココ、オレの顔に何かついてる？」

「ううん。登録できたか試してみないと」

空中にハートを描きながらペンよ動け、と念じると、ペンが瞬間移動した。

できた。初めて魔法が使えた時並みの感動だ。

ヴォルターもかりっと舌を噛むと、ペンがすーっと動いた。

「……けっこう痛いな……」

「優しすぎるわ」

口の端についた血を拭くと、ヴォルターは肩を竦めた。

「本家には逆らえないのさ」

「口ではそう言うけど、マティアスはあなたに命令なんかしないじゃない」

「そう。オレがそう言い訳してるだけで、マティアスが元気になれば何でもいいんだよ」

ランチタイムで、マティアスは思ったよりも喜ばなかった。

「痛いだけだ。バカじゃないのか」

それでも、ちょっとだけ笑ってて、嬉しそうだった。

エミィも素直じゃないわね、と肩を竦めた。

「ココ……！」

「あれ？ マーリー、今日はチェス部の先輩のところでしょ？」

「チェスで勝ったの。やっと。でも……先輩……怒っちゃって。もうゲンメツよ」

「男気がないやつだったんだな」

ヴォルターが言うと、マーリーはそう！と大きな声で同意した。相当ゲンメツしたらしい。

「……ところで、あなたマティアス・レオンハルト？ 私、マーリー・ロングフェローよ。よろしく」

「ご丁寧にも。それじゃ、僕は戻るよ」

「愛想が悪いやつで悪いな、マーリー」

「ほんとよ。ブラッドレー公爵はもっといい人だったわよ。ばあちゃんと知り合いだったみたいで、葬式に来たの。パウロ・ブラッドレー公爵。超シブいおっさんだった」

「オレ達の親世代だからなあ」

マティアスが座っていた席に座って、マーリーが机に突っ伏す。

「この数ヶ月、何だったのかな」

「男って精神的な成長が遅いって言うじゃない。いい男なんて他にいっぱいいるわ」

「エミィが言うと、なんかそんな気がする！ エミィって恋愛のスペシャリストっぽい！」

マーリーが目をキラキラさせている。

エミィは完全に困っていた。この前恋愛したことないって言ってたもんなあ。

「前は別の先輩の話してなかったか。マーリーは、年上好きなのか？」

「いやー？ 同級生はガキっぽいってだけで。あ、ヴォルターはちょっと上すぎるかな。ごめんね」

「心配しなくてもオレはロリコンじゃない」

「ココは？ 好きなタイプとかあんの？」

「優しいひとがいいなあ」

本当はよくわからない。けれど、優しい人って嫌いじゃないと思う。

「エミィは？」

「パパみたいな人よ。賢くて、かっこよくて……」

……ん？

ヴォルターも同じことを思ったようで、一瞬目を見開いた。

エミィのパパって獺だよ。獺って、人型じゃないよね。獺のかっこいいのってどんな感じなんだろう。

「ヴォルターは？」

「全員言わなきゃこの話題終わらないのか？」

「いいから、教えてよ」

「難しいなあ……。どんくさい子とか、好きかな。あと気が利く子」

「どんくさい子って……リアルね……」

「あれ？ そんな引く？」

なんだかんだで、こういう話ってどこでだって盛り上がるものなんだなあ。

日本の小学校でもこんな感じだったし。あのときは、遠くから見てただけだけど。

「やっぱり、吸血鬼がいいものなの？」

「オレはそういうのいないかな。でも、結婚ってなると幸せにはきっとできないだろうから、相手が吸血鬼の方が楽ではあると思う。エマはどうだ？ 相手は悪魔がいいのか？」

「悪魔は嫌だわ……。そうねえ、結婚なんて想像もつかないわ」

アンブラやチェルソが戻ってきて、話はなんとなく終わってしまった。

友達への好きと恋愛の好きがどう違うか、できれば教えてほしかったんだけどなあ。

9話

詠唱破棄を習ってからというもの、私とエミィは寮の部屋をカスタマイズしようと図書室で調べものをたくさんしていた。基本的に、カスタマイズは自分達で実験しなきゃいけない。自己責任ってやつだ。

今私が見える魔法といえば、寝転んだまま電気のスイッチを消すことと、遠くのものを取るくらいだ。

初めての魔法は下調べを入念にしないと大変なことになる。これは、昔調子に乗った生徒が自分を瞬間移動させる魔法を使おうとして内臓を置き忘れてしまって大事件になったという話を聞いたからだ。話を聞いただけなら先生たちの脅かしだと思ったかもしれない。実際、そう思ったアルファクラスの子がムバニアの魔法で魔力を使いすぎて、窓を突き破って大怪我をした。実験しなかったからだ。

「それにしても、詠唱破棄って魔法の世界が広がるわねえ」

「うん」

小学生の算数で、掛け算を覚えた時のような感じ。

呪文を考えた人は、きっとかなり偉大なのだと思う。魔力の調節も勝手にうまくいくし、ほとんどミスがない。ただ、全ての呪文を覚えるのはきっと別の言語を覚えるくらい大変だと思う。

そこで詠唱破棄。無駄に魔力を吐き出して思いもよらないタイミングで思いもよらない魔法を使うってことがないように、自分だけのアクションを決めて、結果を想像しながら魔法を使う。集中力がかなり必要になってくるし、魔力の調節は自分で考えなきゃいけない。

「一番やりたいことといえば、階段の上り下りで楽することよね」

「そうね……。ふくらはぎに無駄に筋肉ついちゃって……。嫌だわ」

メモを取ろうとムバニアの魔法を使うと、エミィはとても驚いた顔をした。

「ちょっと、すごいわココ。今のって瞬間移動よね!？」

「え？ ただのムバニアの……」

「違うわ。ムバニアだとすーっと動くもの。今、一瞬消えて現れたわ」

……そういわれてみれば、そうかも。

「それって、かなり難しいのよねー……」

エミィが座ったまま足を浮かせて、かかとを鳴らす。と、エミィのペンは分解されてしまった。中身が飛び出ただけだから直せるけど、人体でこれが起こったらと思うと、確かにゾットする。

「原理が違うのかしら」

エミィが、魔法で作っていたハーブティーをマグカップに注ぐ。

「……あ、ねえ。パパのところに行ったら、コーヒーをばっと出してくれるじゃない？」

「そういえばそうねえ……。魔法でハーブティーを作るのは、アタシが作るのと同じくらい時間がかかるわ。もしかしたら、時間を省略してるのかも」

時間の省略かぁ。

まだ時間があるので、もう一度図書室に行くことになった。基本的な魔法の分類の本を手取る。

物を移動させるだけでも、すーっと時間をかけて動くのは体力・労力を魔力で補った基本対価魔法という。瞬間移動は、次元変異魔法というらしい。

「基本対価魔法っていうのは、魔力が補うものが一つだけってことよね」

「確か、そうよね。応用対価魔法っていうのもあるはずだし」

「次元変異って、何かしら」

「何かの代わりに魔力を使うんじゃないって、魔力を使って何かを変えるってことよね」

「この場合の次元って、時間でいいのかしら……。難しい言葉になるとわからないわ……。次元って何なのかしら」

もしかしたら、次元変異魔法なんてまだ上級生になって習うのかも……。

「……今日は帰りましょうか」

「そうね。……あ、パパの研究室に寄ってもいいかしら」

「いいわよ」

冬休みの相談をしなくちゃ。実家のお祖父ちゃんから手紙がきていた。もう少しで陽が沈みそうだったけれど、エミィと二人でクライヴの研究室を訪問した。クライヴはいつも通り私達を迎えてくれた。

「やあ、二人とも。課題は順調かな？」

「……ええ、まあ」

本当は課題のことなんてすっかり忘れていたんだけど。

1年、2年ともにクライヴは実に立派にパパ役を果たしてくれていた。バケーションはとても楽しい。魔法史の遺跡めぐりばかりだけど。

「お祖父ちゃんからたまには帰ってきなさいって言われたの。そんなこと言われなかったから、一度も帰ってないわ」

「恐に迎えに来るように連絡しようか」

「……パパも一緒に連れてきてって言われたわ。良かったら、エミィも来てくれないかしら。私、あの家怖いよ」

無理もない。

だって私は、ココ・ブレナン。元の名前は思い出せないけど——たぶんお祖父ちゃん達も思い出せないだろうけど——私はお祖父ちゃんが付けた名前じゃない子だ。

どの面下げて帰れるだろうか。

「招待されてるなら、行かなきゃな」

「アタシも行っていいの？」

「うん」

冬休みの約束を取り付けて帰ろうとしたら、クライヴに呼び止められた。

「引き留めて悪かったね。もう遅いから、寮まで送るよ」

クライヴが指を鳴らすと、ドアがわずかに光った。

「……あ、これ。これ、やってみたいの。どこでもドア！」

「なんだい、それ？ これは3年生じゃ難しいと思うよ」

「次元変異魔法だから？」

「よくわかったね。変異というよりも、一時的に削除するんだ。次元……つまり、緯度・経度・地上からの高さを限定した二つの場所の距離をね」

「時間は？」

「時間も次元だね。このドアには使わないけど、瞬間移動の魔法なんかで削除するよ」

エミィは苦笑して肩を竦めた。私も同じような顔だと思う。

クライヴに促されて部屋に戻ると、エミィはベッドに倒れ込んだ。

「次元変異魔法を習うまでは、足だけムキムキで我慢しなきゃいけないわけね……」

「もうちょっと勉強したらわかるようになるかしら」

「段階があるんじゃない？ しばらくは無理そうね」

「うん……。疲れちゃった。おやすみ」

その日は無駄に多くの魔力を使ってしまったからか、ぐっすり眠れた。

「おはよう、ヴォルター、マティアス」

「おはよう、ココ」

「……おはよう」

「隈がひどいな。きちんと寝てるのかい？」

「えっ、ひどい？　ぐっすり寝たわ」

「そんなにひどくないよ。よく見れば、もしかしたらいつもと違うかもっていうくらいさ」

「そう……」

一度、鏡を見てみた方がいいかもしれない。あんまり気にしなさそうなヴォルターが言うんだもの。マティアスが言うほどいい状態ではないのかもしれない。

「そういえば、二人の部屋から学校につながるドアがあるのよね？」

「あるよ」

「それって、常につながってるの？」

「いや、そういうわけじゃない。普段は廊下に出るドアだよ。ドアにどこに繋ぐか決めるスイッチがあるんだ」

「それで切り替えてるのね」

「カスタマイズの実験してるんだな」

「そうよ。私達の部屋ってってっぺんだもの。いい運動というにはあまりにハードで」

ご飯をちょっとヴォルターのお皿に分けると、マティアスは目ざとく見とがめた。

「ひよろひよろなのにこれくらいも食べないなんて、どうかしてる」

「残すのは失礼なんだもの……」

「大体、僕たちはこんなご飯なんてあまり食べないんだよ」

「マティアス、人には適量ってものがあるだろ？　オレはちょっと足りないからちょうどいいんだ」

「まったく……」

マティアスもヴォルターも、色白ではあるけど筋肉はムキムキだ。

太るのが嫌……という理由ではないと思うんだけど。

「マティアスって、私のことキライなの？」

「き……嫌いだよ」

マティアスの顔が引きつった。

……がっくりと肩を落とすと、ヴォルターがくすくす笑った。

「嫌いなら一緒にご飯なんて食べないさ」

「そう？」

「そうだよ。君があまりに細くて小さいから、君を小さい子どもだと思ってる彼は心配してるんだよ」

「小さい子どもじゃないわ」

「そうだね」

ヴォルターがおかしそうにまた笑う。

「二人は、カスタマイズしないの？」

「マティアスはしてるよ。元々研究者気質だからね」

「あら、意外」

「意外かな」

「面倒なことは嫌いなのかと思ってたわ」

「嫌いだよ。実験とか研究は面倒じゃないものに分類されるってだけ」

「ふーん。ごちそうさまでした。それじゃ、またランチタイムに！」

食堂を出て教室に入ると、何人かがぐったりと机に突っ伏していた。みんな、カスタマイズにはまっているのね。

手鏡で顔を見てみると、なるほど、確かにうっすらと隈ができていた。

「あら。……まあ、昨日はいつもより遅かったものね」

放課後、エミィに隈のことを話すと彼女は少し肩を竦めた。

「ヴォルターって、ココのことよく見てるのね」

「マティアスも目ざといのよ」

「……ココに関わるとみんな面白くなっていくわ」

エミィがくすっと笑った。

図書室では静かにしなければならぬので、ひそひそと話しているけれど、どうも少しずつ声が大きくなっていってしまう。

ゴホン、と大きな咳払いが聞こえて、またひそひそと声を潜める。

「次元って、いろんな定義があるのね」

「パパは昨日、緯度・経度・地上からの高さと言ったわ」

「緯度、経度っていうのは縦と横。二次元よね。それに高さが加わることで、三次元になる」

よくわからないけど、映画は平面で3D映画は立体みたいなものよね。

「四次元目のものが何なのか、限定はされてないわ。時間だったり、質量だったり……、重力とかもあるみたい」

「時間を変異させたら、過去を変えられるのかしら」

「どうかしら。瞬間移動なんかは、未来までの時間を一時的に削除するんでしょ？ 過去への時間を削除したとして、その過去は今なのよ」

「？」

「ああ、わけわかんなくなってきた……」

二人で頭を抱えていると、人の気配がした。

「……ココ……？」

「あら、セフェリノ。どうしたの？ 顔色が悪いわ」

「ここ最近、体調悪くて。部屋で寝たらエドワールの気が散るかと思って、図書室で……」

「保健室に行ったら？ 顔色も悪いし、行っても何も言われないうわ」

「そうしようかな……」

セフェリノは、エミィにも軽く微笑んでフラフラと歩き出した。考えてみれば、セフェリノってエミィに普通に接する数少ない一人だわ。

「大丈夫かしら」

「心配ね。一人だし」

「彼は一人が好きなのよ。えーっと、ストレスを感じない他人との距離が広いみたい」

「パーソナルスペースのこと？」

「そうそう。それで誰に対しても中立だからセフェリノはベータクラスでもクラス長とかしてて……」

言葉を途中で切ってしまったのは、セフェリノという名前を聞いてこちらに足早に近付く足音がしたから。

「エミィ……」

「あら、エドワール。どうしたの？」

エミィの声が、いつもより少しだけ優しくなる。子供をあやすみたいな声だ。

エドワール・サジュマンは、綺麗な青い瞳を不安げに揺らして立ち尽くしていた。

「僕のルームメイトを見なかった？ 体調が悪そうなのに、どこかへ行っちゃって」

「大丈夫よ。保健室に行くって言ってたわ」

「……そう。彼、前も魔力が回復しなかったことがあるんだ」

「そうね。随分魔力が少ない子だったもの」

「え？」

セフェリノの魔力は、ベータクラスの中でも多い方だ。

もしかしたら、また体調が悪くて魔力が回復してないのかもしれないけど……。

10話

冬休みも終わる頃、予定より2日前倒して寮に戻るようになった。

日本での冬休みは思っていたよりも楽しかった。実家の方では私の名前のこと、何も違和感がないようにふるまっていた。クライヴ曰く、呪いというのは不自然さを感じないようにできているそうだ。

「せっかくのバケーションなのに悪いね、二人とも」
「何があったの？ クライヴ、大変そう」
「セフェリノ・ベルスの魔力が戻らないらしい」
「え？ また？」
「……もしかしたら……、もう魔法は使えないかもしれない」

言葉も出なかった。

「セフェリノって、この前の……エドワールのルームメイトの子よね？」
「うん……。彼、ずっと体調が悪そうだったわ」

クライヴはそっとしておいた方がいいと言ったけれど、わがままを言って保健室で寝ているというセフェリノをお見舞いについて行った。

「……先生」
「何か、大きな魔法を使ったのかい？」
「いいえ、先生。ただ単に、成長して魔力が減っていくんだと思います」

セフェリノは、まるで他人事のように自分にも距離を置いているような、そんな印象。

「ココ、お見舞いに来てくれてありがとう。エマも」
「ああ、セフェリノ……何て言ったらいいのか……」
「そういう体質だったんだよ。仕方ないさ。それより、エドワールが心配だな……。僕のことをかなり心配してたから……きっと寝てないし」
「それは心配ね。大丈夫よ、エドワールのことは心配しないで」
「ありがとう。君ともっとたくさん話したかったよ」

私もそう思う。
顔してみせると、彼は少しだけ笑った。

「スペインに来たら、案内するよ」
「ええ」

セフェリノに別れを告げて部屋に戻ると、保健室ではどうにか我慢していた涙が出てきた。

「もっとたくさん話せばよかった」
「そうね……」

エミィがぎゅっと抱きしめて慰めてくれた。ようやく泣き止んだとき、いつものハーブティーをくれた。

「それにしても、セフェリノも心配だけど、エドワールも心配よ。エドワールって、本当に魔力も多くて飛び級したんだけど、家族も次々に亡くなって半分捨てられるみたいにこの学校に入れられたんですって」
「何て言われてたのかは、想像つくわ……」

可哀想すぎる。

エドワールの境遇を思うと、せっかく引込んだ涙がまた出そうだった。誰も何も言わないかもしれないけど、きっと傷付いてしまうだろう。

ハーブティーを飲んで、今後のことを考える。後学期は、もっとたくさんの友達を作ろう。

「エミィ、いろいろ……ありがとう。今日はもう寝るわ……」

「ええ、そうした方がいいわ。そういえば明日は朝から出かける予定があるの」

「わかった」

泣き疲れたからか、随分ぐっすりと眠れた気がした。

起きると、エミィは言っていた通り朝から出かけているらしく、ベッドはもぬけの殻だった。

ちょっとだけ、試してみたいな。瞬間移動と違って、失敗しても体に害はないはず。

「よーし……」

宙にハートを描いて、ドアを開く。……あら、廊下だわ……。

「ココ!?!」

聞き慣れた声が聞こえたかと思うと、けたたましい警告音が響き渡った。

「や、やば……!」

ヴォルターが私の手を掴んで、速足で歩きだす。

「何で男子寮にいるんだ!!」

「魔法、失敗しちゃって……。ドアを繋げるやつ……。ちょっと距離感を間違えちゃったみたいで」

階段をおりきると、エントランス……ユーインさんが仁王立ちしている前に出た。

「ご、ごめんなさい！ 魔法の加減を失敗しちゃって」

「問答無用よ、ココ・ブレナン。反省文ね。ヴォルター・リンハルト、あなたも共犯かしら？」

「……はあ、まあ……」

「ち、違います！ 私が、たまたま……!」

「はいはい。純愛に免じて二人ともレポート用紙2枚でいいわよ。いい？私に見せてから生活指導教官のシェーパー先生に提出よ」

まだ抗議しようとする、ヴォルターがぎゅっと腕に力をこめた。ユーインさんが行ってしまおうと、ヴォルターが小さく溜め息をついて、食堂に歩いていく。

「ちゃんと誤解を解かなきゃ！ 私が勝手に魔法の失敗しただけなのに!!」

「オレが手を引いて出たら、誰だって関係ないとは思わないさ。まあ、男子寮への滞在時間が短くてよかったよ」

食堂はがらんとしていたけれどそれなりに人はいた。噂が広がるのはきっと時間の問題だ。

「それに……純愛とか言ってたし」

声を潜めると、ヴォルターは噴き出した。

「オレと君で？ どう見たってないだろ？」

「な、ないけど!」

はあ……。溜め息しか出ない。

「今日はエマは？」

「お出かけですって。いつも一緒なわけじゃないわ」

「そうなんだ。ははは」

「何で笑うの？」

「いや、てっきり君とエマって、エマが孤立するから君が傍にいるんだと思ってた。君が暴走しないようにエマが止めてるんだね」

そうかもしれない。いや、そうだ。いつもエミィが、焦る私を止めてくれていた。

「また心配かけちゃうわ」

「いいんじゃないか？」

「よくないわ」

肩を落とすと、ヴォルターはまたくすくす笑った。

「今日中に書いてしまおう。図書室に行こう」

「そうね……」

ヴォルターとは、図書室の自習コーナーで待ち合わせをした。

「ココ、聞いたよ。反省文だって？」

「あら、チェルソ……。おはよう。珍しいわね、図書室に来るなんて」

「ヴォルターに来てくれて頼まれたんだよ。チェルソは反省文慣れてるだろうって言うんだぜ」

「そんなに反省文書いてるの？」

「まっ……。夜抜け出そうとしたり、実験が過激だったり、いろいろね」

もしかして、しばらく見なかったのは反省文を書いていたからだろうか。

それにしても、やっぱり男の子同士の方が仲が良いのかな。チェルソがそんな状況だなんて全然知らなかった。

「ヴォルターね、全然悪くないのよ……。私が魔法で失敗して男子寮に出ちゃって、エントランスまで連れて行ってただけなの」

「ヴォルターが自分で関係あるって言ったんだったら、厚意に甘えればいいんじゃないかい？」

「そうかしら」

「そういうものだよ。彼を待たなくてもいいと思うよ。ささっと書きちゃわないと。こういうのはノリが大事なんだよ」

チェルソに見てもらいながら反省文を書き進めていく。

ヴォルターも途中でやってきて、3人でひそひそ話しながら書いていった。私は早く書き始めた分、ヴォルターよりちょっとだけ早く終わった。

チェルソと二人でヴォルターの背中を背もたれにしながら読書をする。私は魔力の増減について書かれたものを読んでいた。

セフェリノみたいに若い頃突然回復しなくなるこって、すごく珍しいけれどあることみたい。タイプは寝る、食べる、奪うとかいろいろある。

回復のタイプみたいに最大値の増減にも何パターンかあるらしい。大人になって、増減するもの。思春期に魔力の最大値に波があることもあるし。病気や怪我などをきっかけに増減するもの。など。人から奪った魔力は上乘せされて最大値が増える。これは、私が名前の代わりにクライヴから魔力を貰ってる分、と考えればいいわね。

「できた」

「ユーインさんに見せてからシェーバー先生に提出だったわね。行きましょ」

「あ、ダメ。ユーインはシエスタ邪魔すると怒るから、もうちょっとしてから行った方がいいよ」

「チェルソ、あなたって……。本当に何度も反省文を書いているのね……」

「そこは教えてくれてありがとうって褒めてくれよ」

時間を潰すために読書続けることにした。

図書室は、ひそやかに噂が流れていた。魔力が尽きた男の子がいるらしい、と。

「……誰なんだろう」

「ココ、顔色が悪いよ」

「……そんなことないわ」

ポツンと一人で座っている小さな男の子——……エドワール・サジュマンに気付いて彼に近寄る。彼は何かにおびえたように私を見上げた

。

「こんにちは」

「……やあ……」

「私、ココ・ブレナンよ」

「……エドワール……」

「大変だったわね。セフェリノから聞いたわよ。寝てないんじゃないかって心配してたわ」

「セフェリノと話したの？」

「ええ。あなたのこと、心配してた」

「……僕が……」

エドワールは泣きそうな顔でうつむいた。

「……疫病神だから」

「そんなひどいこと、誰が言うの？」

「みんな」

「みんなってだあれ？」

「……叔母さんとか……」

「ここにはいないわ」

「おばあちゃんも」

「ここには、いないわ。ここにはあなたを悪く言う人なんて、誰もいないわ」

仁王立ちして興奮していたからか、軽く眩暈がした。エドワールの向かいの席に座ると、エドワールは立ち上がった。

「僕は、もう誰とも関わらない。きっとそれが一番なんだ」

それだけ言って、図書室から出て行ってしまった。

「……ココ、さっきより顔色が悪いよ」

「もうそろそろユーインに持って行ってもいいと思う。さっさと提出して、部屋に戻った方がいいよ」

「……ええ」

ユーインさんに反省文を見せて、シェーバー先生に提出した。階段をてっぺんまで登るのは面倒だったけれど、もう実験しようという気力は残っていなかった。

エドワールと話してから、妙に体が重かった。

「ココ、ココ」

体をゆすられて目が覚めた。

「あ、エミィおかえり」

「床で寝ちゃだめよ。風邪をひいちゃうわ」

「あ……」

そうか、部屋に辿り着いたはいいけど眠くなってラグの上で寝ちゃったんだ。

「……エドワールと話したの。すごく気にしてたし、自分を責めてた」

「彼も心配だけど、ココ、あなた魔法の実験して反省文書いたそうじゃない！」

「あ……うん。距離削除のやつ、気になって……。ちょっと失敗して、男子寮の中に出ちゃったのよ」

「それだけ？ けがはないのね？」

「怪我なんてしてないわ」

「心配したのよ！ それに帰ってきたら床で倒れてるみたいに寝てるし！」

「その魔法で魔力を使いすぎちゃったみたいで……」

「そんな魔法、一人で……！」

うう……エミィがすごく怒ってるわ。目がつり上がってるもの。どうしたらいいのかしら。

「ご、ごめんなさい……。そんなに怒らないで……」

「何に謝ってるのかしら」

「……えっ、あの、私が、反省文……」

「違うわ！」

「う……うう……そ、そんなに、怒らないで……よ……私、悪くないわ……」

「わからないの？ ……もう知らない！」

知らないって、どういうことよ。ぼろぼろと涙が出てきた。

ぱっと立ち上がり、マーリーの部屋まで階段を駆け下りていく。マーリーの部屋、来るの初めてだ。マーリーのルームメイトがエミィを嫌がるから、マーリーが私達の部屋に来たことしかなくて。

「マーリー！ 開けて！」

「なーにー？ って、うわ、なんで泣いてんの」

「エミィが、ひどいのよ。怒るの……！」

「ケンカぁ？ ま、入って入って」

初めて他人の部屋に入った。整頓はされてるけど、女の子らしい物であふれていた。

「ちょっと、どうしたのよ。泣いてちゃわかんないでしょ」

「……今日、反省文書いたの」

「優等生のあんたが？」

「ドアとドアをつなげる魔法の実験してたら男子寮に出ちゃったのよ。それで。そしたら、エミィすごく怒って」

「ちょっと待って。反省文書いたから怒ったの？」

「心配したって言ってた。それに……あ、魔力使いすぎて、すごく疲れて床で寝ちゃってたの」

「……ははーん？」

マーリーがニヤリと笑った時、ドアが開いた。マーリーのルームメイトが帰ってきたらしい。灰色の目は鋭く、形のいい鼻の周りにはそばかすが散っていた。

「客？」

「うん、ココ・ブレナン。ココ、ルームメイトのレスリー・ラングレー」

「よろしく……」

「なんで彼女泣いてるの？」

「ルームメイトとケンカしたんだってさ」

マーリーがエミィの名前を伏せて状況を説明すると、レスリーは肩を竦めた。

「大怪我するかもしれない魔法を使ったんでしょ？ そりゃ、心配もするかもね」

「なのに本人がけろっとしてたら怒りにも変わるってもんよ」

「わ、私が怪我してたら良かったの!？」

「違うっつの」

マーリーが言うと、レスリーは鼻でふんと笑った。な、なんだか嫌な感じ……。

「勝手に一人で実験すんなってこと。難易度が高いものは特にね。何のためのルームメイトよ？」

「……うん。私が、危険なことしたから怒ってるのね……」

「いい奴じゃない、彼女のルームメイト。誰？」

「エミィよ」

「……悪魔？」

「エミィにはエミィって名前があるのよ」

「あはは、ココのそれ、久しぶりに聞いた。でも無理無理。レスリーは黒人も無理だもん」

「……素晴らしいルームメイトね、マーリー。お邪魔して悪かったわ」

肌の色の差別なんて、バカバカしいにもほどがあるわよ。でも、だから彼女、私には一切話しかけなかったんだわ。私は黄色人種だものね

。

大して肌がきれいなわけでもなくせに……なんて言ったら、またいろいろ問題になるわね……。我慢するに越したことないわ。

「……エミィ、起きてる……？」

部屋に入ると、エミィはドアに背を向けてぺたんとして座っていた。

「あの、ごめんね。……もう一人で危ない実験なんかしないわ」

「……」

「エミィ？」

私が近付くと、エミィは小さくしゃくりあげた。

「ほ、ほんとに心配したんだから……」

「うん、ごめんね」

ヴォルターが言ったことを思い出した。エミィが孤立するから私が傍にいるように見えるけれど、私の暴走をエミィが食い止めてくれる。でもそれって、正しいようでやっぱりちょっと違うわ。

私とエミィは、お互いに大切に思ってるかけがえのないルームメイトなの。

11話

4年生で一番の目玉は、なんといっても1年かけて勉強するドロテア・チェスティの半生。4年生の授業でドロテアの名前が出ないのはスポーツの授業くらいだ。

魔法史だけでなく魔法理論にも、魔女なのに世界史にまで名前が出てくる。

完全無欠の魔女。……ってというのは、なんだか主観が入りすぎてる気がするのだけれど。

そんなドロテアづくしの4年生が終わる頃、私は校長先生に呼びだされて入学式以来2度目の校長室を訪ねた。

「校長先生、ココ・ブレナンです」

「どうぞ」

相変わらず消えそうな声で、開いたドアの奥には水晶玉を拭き上げる校長先生がいた。前回見た時とほぼ同じ姿だ。魔女も年を取るのは遅いけれど、それでも少しずつ老けるものなのに。本当に、何百年も生きてる魔女なのだろうか。

「5年生からアルファクラスに行きませんか？」

「はい？」

「アクファクラスの子が、一人魔力が尽きてしまったのです」

「……エミィに聞きました」

セフェリノの顔がチラつく。校長先生は、はぁ……と小さくため息をついた。

「また、です。こんなこと滅多になかったのですが……。それに、たまに起こることとはいえアルファクラスの子は初めて……。すみません、生徒に聞かせる話ではありませんね」

エミィが言った。『また』、エドワールと仲の良かった子だったのだと。

「先生……私、エドワールは魔力の体質的に……周りから奪うんじゃないかと思うんです。昔、魔力の回復のタイプについて書いてある本を読んだことがあります。その中に、奪うっていうのがありました。私、呪いの代償のことかと思ったけど、そういうタイプがあるのかも……。それに、エドワールと話した後、ベッドに上がれないくらい魔力が減ってたことがあって」

「……そうですか……」

一気にまくし立てた後で言うてはいけないことを言ってしまったような気がして、気を紛らわせようと部屋を見渡す。大きな水晶玉には地球儀のような球体ぐるぐる回っていた。たまにそれがズームアップされると、見たこともない文字が書かれていた。

じーっと見ていると、校長先生が水晶玉を磨くのを再開した。

「それは、こちらでなんとかします。あなたは、クラスを移るかどうかを考えてください。まだ《魅惑》と同じクラスがいいですか？」

「どちらでもいいです」

「ではアルファクラスへ行きなさい。レベルが高い方に合わせたほうがあなたも勉強になるでしょう」

「はい」

「それと。……あなた、卒業後はどうするのですか？ 名前は返してもらうつもり？ 日本に帰るつもり？」

「えっと……特に、何も……」

「あつという間に卒業ですよ。きちんと考えておかないと。私は……あなたには研究職が向いていると思います。参考までにね」

今日の校長先生、よくしゃべるなあ。というか、やっぱり私の名前を奪われていること、知ってるのね。

「……その水晶は、先生の研究ですか？」

「いいえ、私の師匠のものですよ。さあ、どうぞ」

先生が手元のスイッチを押すと、ドアが開いた。校長先生が魔法を使えないっていうの、本当なんだ……。

「先生、私、一応……名前を返してほしいとは思ってません。感情がないのって凶たく生きるには楽だけど、全然楽しくない」

「そう」

先生はそっけなく言って手元の水晶玉を見ていたけれど、口元は笑っていたように思う。
教室に帰ると、アンブラ達が集まってきた。

『なんだったの?』

「……私、5年生からアルファクラスに行くことになったの」

「……………レスリーが抜けた穴を埋めるのね……」

そう、エドワールと仲良くして魔力がなくなった子というのは、マーリーのルームメイトのレスリーのことだった。レスリーが授業中に倒れたというニュースはすぐにエミィによってマーリーに伝えられ、私達に伝わることとなった。

『アルファクラスには魔法で人を傷付けて退学になった子が二人くらいいるわよね。他にも移動する子、いるのかしら』

「ココは元々アルファクラスでも上から数えた方が早いくらいの魔力だからレベルを合わせるためじゃないか?」

「えっ!? そうなの?」

「そうらしいわね。でも、パパが奪った名前の魔力のせいよ」

「部屋割りって、アルファクラスとベータクラスで構成されてるじゃない。エミィと違う部屋になっちゃうのかな」

「その時は私の部屋でいいじゃん」

「あ、それなら……いっか。マーリーならエミィと一緒にでも平気よね。私もできればマーリーかアンブラがいいけど……」

誰とでも話せるけれど、生活するのはちょっと抵抗があるもの。

私の心配は杞憂に終わった。ユーインさん曰く、面倒だから部屋の変更はしないらしい。

5年生のクラスでは、初めて体験する派閥というものがあった。アルファクラスの初日、ツンと澄ました女の子が後ろに何人かの女の子を引き連れて私の前に立ちふさがった。

「初めまして、ココ・ブレナン」

「こ、こんにちは」

なんだか怖くて、へらりと笑って教室を移動しようとする、ぐいっと手首を掴まれた。

「注意してあげる。このクラス、悪魔がいるの。ベータクラスにいたあなたは知らないかもしれないけど、キケンなやつなのよ」

「……」

ここで言い返したら、エミィの立場が悪くなるかしら。どうしよう、何が正解なのかしら。

エミィは何も聞こえませんが、というようにスタスタ歩いている。なんでそんなことできるのよ。私、耐えられないわ。

「でも、話してみなきゃ危険かどうかなんてわからないわ。それに、……注意してあげる。アルファクラスにいたあなた達は知らないかもしれないけど、私エミィのルームメイトなのよ。それ以上バカな事言ってみなさい。ただじゃおかないわよ」

「な……何よ! アジアンがエラそうに!」

「私達に勝てると思ってるの?」

「少なくとも、あなた達よりも魔力は多いもの。魔法だったら勝てるわ。ふふっ、力だったら勝てないわね。あなた達体重がちょっと重そうなもの」

その瞬間、エミィがぶーっと噴き出した。口元を抑えながら振り返る。

「ココ、やめてちょうだい」

「だって!」

「うるさいよ、君達」

マティアスが私の腕を掴んだ。

「これ以上僕の友達を侮辱したら噛みつくよ」

「あら、あなたが助けてくれるなんて」

「君は問題を起こさずにはられないのか」

マティアスが女の子達をチラッとみると、彼女達は青くなって散り散りに去って行った。

「ああもう、私のアルファクラスデビューって最悪よ」

ランチタイムにベータクラスへ行くと、マーリーは笑いながら聞いたと言った。ヴォルターとチェルソは苦笑している。

「さっそくケンカ吹っかけたんでしょ」

「あっちが悪いのよ」

「おかげで4年間透明人間のふりしてたアタシの努力がパァよ」

「僕だって」

「私も悪魔か吸血鬼だって噂が出ちゃってるわ……」

『気にしないでいいじゃない』

「うん、まあ。そうなんだけど」

「だけど、あんまりケンカしたらいけない。今後大げさになって、何かあるといけないよ」

「ヴォルターはココに対して過保護だわ」

「きっとブレナン先生よりよっぽど過保護だよ」

ランチはいつも、意味のない話ばかり。

でも今日は、なんだか引かかった。過保護なのは私に対してだけじゃないはずよ。

「もやもやするわ……」

「胃もたれ？」

「違うわ……」

「生理？」

「違う……。はぁ……。なんか、ヴォルターに会いたい」

「あ」

エミィが、ルームウェアに着替えつつニヤニヤ笑ってる。ハーブティーが目の前に現れて、座るように促された。それでもまだエミィは少し気持ち悪い笑みを浮かべている。

「な、何よ……」

「ヴォルターに会いたいの？ なんで？」

「なんでって、なんでだろう……。私、ヴォルターの背中を背もたれにして本を読むのがお気に入りなの。とっても落ち着くのよ」

「ふーん。ヴォルターって、ほんと基本的にはココに甘いよね」

「マティアス以外の最初の友達だもの。私だって、エミィが最初の友達だから友達の中でもトクベツよ」

「アタシも、ココのこと大好きよ」

「うん」

ハーブティーに口を付けて、心と気づく。さっき、クライヴがコーヒーを出すみたいにエミィはこれを出した……。

つい1週間前まで、注いで目の前に置いてくれてたのに。

「エミィ、……次元変異マスターしたのね」

「あら、気付いた？ ココみたいにうまくできなかったからちょっと練習したわ」

「すごいわ。作る時間の削除、それに、二つのものを距離削除で運ぶんだもの。私ができるのよりずっと難しいわ」

「そんなに褒めても何も出ないわよ」

エミィが、素直に嬉しそうな笑みを浮かべる。それにしてもさっきのニヤニヤ笑いは何だったのかしら。

大きなビーズクッションに体を預けて、そのままぐーっと背筋を伸ばすためののけ反る。

「……エミィって、卒業後は本格的にドロテア探しをするのよね」

「ええ。どうかしたの？」

「そういえば校長先生に進路のこと聞かれたときに何も答えられなかったなあって思ってる」

身長は伸びたし、ようやくエミィと目の高さが合うようになってきた。まだまだ、精神的には追いつけそうにないけれど、それでも私もちょっとは大人になってきてる。

卒業後のことも見据え始めなきゃいけないのだ。

「今のところ、名前を返してもらうつもりはないんだけどね。その他のことは、全然」

「アタシは目的があって入学したんだもの。他の子は大体入学が目的でしょ。そんなものじゃないかしらねえ……」

「そっかあ……」

気にしなくていいかなあ。

翌日、私はヴォルターと図書室に行くことにした。例の背もたれをしてもらおうと思って。

「私、ドロテアの創世論読むわ」

「そう。じゃあオレも」

背もたれのない大きなスツールに二人で背中合わせに座って、真っ直ぐ背筋を伸ばして座るヴォルターに寄りかかるという寸法だ。

でも今日は、ヴォルターも少しだけこちらに体重をかけてきた。同じ力で押し合って自立するという物理っぽい考え方を取り入れたようだった。

「ふふふ」

「何？」

なんだかヴォルターの声が近い。自分の心臓の音とヴォルターの心臓の音が混ざって聞こえるような気がした。

「落ち着くわ」

「そう」

「俺もまぜてー」

「いいわよ。ヴォルターの背中、半分貸してあげる」

チェルソが私のいたところに座って、私はヴォルターに袖を引かれて肩に寄りかかることにした。これはこれでいいかもしれない。と思っていると、ヴォルターが本をめくるために腕をあげて私の頭の上に腕を置いた。その腕はしばらくすると、ぐるっと首の前を通過していった。

無意識に効率的な体勢を模索して行って、どうせ制服はスカートじゃないしあぐらをかいていた。だから、怒った顔で近づいてきたクライヴを見た時、あぐらをかいて行儀が悪いから怒っているのだと思った。

「……パパ。どうしたの」

「おい！　うちの娘に何してるんだい!？」

「あ、すみません。首締まった？」

「いいえ、大丈夫よ」

「……そういう問題じゃないんだよ……」

クライヴが頭を抱える。

「今、抱き締めてただろ」

「バカなこと言わないで。ただ寄りかかってただけなのにそんな変な想像するなんて、パパ気持ち悪い……」

「気持ち悪い……!？」

「ココ、先生は君のことを心配してるんだよ。確かにオレがバタバタくつつきすぎだったのかも。ココってそういえば女の子だったね」

「ちょっと待って！　私はずっと女の子よ！」

「……チェルソ、ちょっと」

そこで、クライヴがなぜかチェルソを呼んだ。二人でひそひそ話して、私達は解放された。

「もういいよ」

「結局、パパは何しに来たのよ」

「あ、忘れてた。大変なんだ」

クライヴが思い出したように慌ててヴォルターに向き直った。

「純血種って、灰になっても生き返るんだよな!？」

「え？」

「生き返るの!？」

「血をかければ……。まさか」

「マティアス・レオンハルトが日光を浴びたんだ。君も来てくれ」

クライヴについていくと、寮のエントランスを数歩出たところで取り乱した様子のウォーリック先生が、灰をかき集めていた。ヴォルターも影からは出れないから、エントランスの出入り口で立ち止まる。

「これがマティアスってこと？」

「そう」

「何があったの？」

「わからない……」

「オレの血をかけよう。他の魔力をもった血が混ざるのって良くない……かも。ああ、ココ、ウォーリック先生を保健室に連れていってこないか？ 部屋は……ユーインの部屋を借りよう。チェルソ、オレあっちに行けないから灰を一掴み持って来てくれないか」

「先生、行きましょう？」

「そ、そうですね……」

ウォーリック先生の手を引いて保健室にいくと、先生はびっくりして出迎えてくれた。

「どうしたの、ミス・ウォーリック。ひどい顔色ね」

「ちょっと体調がよくないみたいで」

「ありがとう。あとは任せて。しっかりして、ミス・ウォーリック」

先生を任せて、ユーインさんが使っているエントランス横の部屋に行くと、既にマティアスは復活していて、制服のジャケットを着こんでいる途中だった。

「マティアス！」

「ココ……。心配かけたね」

「体調はどうなの？」

「頭が痛いよ」

「あなたも保健室に行った方がいいわ。ウォーリック先生もきっと心配してるし」

「何があったんだ？ マティアス」

「……何でもないさ」

何でもないわけ、ない。

「誰をかばってるの？」

「さあ。誰だろうね」

どうやら、教えるつもりはないらしい。

保健室にマティアスを押し込むと、ウォーリック先生はマティアスにハグしてわんわん泣いた。泣きながら言っていたことを総合するに、ウォーリック先生はマティアスが灰になって崩れ落ちるところを目撃してしまって大層なショックを受けたらしい。

「先生、もう大丈夫ですから……」

「ほんとに、本当に良かったあ……！」

「……参ったな……」

滅多に動じないマティアスが困りきった顔をしていたけれど、誰も先生を引きはがそうとはしなかった。ウォーリック先生が取り乱すことは、もっと滅多にないことだから。

「……もう行っていいですよ」

散々泣いたあとで鼻をかみながらウォリック先生があっさり言うと、マティアスは疲れた様子でさっさと戻っていった。

「あ、ココ」

「何です？」

「……どうせ知ることになることですから、言っておきます。マティアスを外に突き飛ばしたのは、あなたと言い合いをしていた女子です」

この前、私をかばったから？ だから、一度殺されたの？

じゃあマティアスがさっき庇ってたのは、私？

「彼女たちは復活するとはいえ相手の命を脅かすような危険なことをしたので、退学でしょうね」

「私のせいで……」

「違います。そういう誤解をしないために、今伝えたんですよ。悪いのは彼女です。ただ……誰にでも正論を振りかざして敵を作るのは得策ではありませんよ」

「はい……」

それならあの時、何て言えばよかったのかしら。

正論を言えばいいわけではない。それは、そうかもしれない。でも。

12話

魔法史の授業でお祖父ちゃんの名前が出た。5年生以上の魔法史担当のフェリクス・コルネホ先生はお祖父ちゃんの研究について言う時、あまりいい顔をしなかった。

「シンイチロウ・マドウは名前に魔力が宿ることを発見した。研究自体は面白いし貢献度もあるんだけどね……」

お祖父ちゃんが家族の名前を付けた魔力の弊害の話が出た時、大体のクラスメイトは顔をしかめた。やっぱり変人だと称されるのね。更に話は通り名について移り変わった。エミィの《魅惑》みたいな、有名人のニックネームみたいなもの。校長先生にも《校長》というのがあるらしいけど、そのまんますぎる。

「大体、言葉遊びですね」

お祖父ちゃんの魔法で日本語に訳されてるから全然わからなかったけど、言葉遊びがあるらしい。エミィの場合はEmmaとenchantを使った造語の《Emmachant》。校長先生は何か意味があるのか、通り名の校長はprincipalやpresidentではなく《Warden》だ。面白さがよくわからないけれど、とにかく面白いものらしい。コルネホ先生は通り名の話だけでデートできる、と言った。その例えもよくわからない。

「通り名が与えられた魔女には、この分の魔力が付与されます。また、通り名というのは敬称になります」

そういえば、そんなことを昔クライヴが言っていた気がする。冷たい感じもするけど、きちんとした場では通り名の方がいいのね。

「吸血鬼にも通り名ってあるの？」

「あるよ」

放課後の図書室で、エミィと二人でヴォルターの背中を背もたれにして尋ねてみる。マティアスとアンブラもそれぞれ横からヴォルターに凭れている。年長者の可哀想なところだ(最年長はエミィだけ)。隣のスツールではチェルソとマーリーがお互いの背中を背もたれにして何やら話し込んでいた。

「サクラは《深紅》よね。血の色そのものが通り名なの」

「サクラティは人間を次々襲ってたから、犯罪者として有名なんだ。一番気性が荒い吸血鬼だと思うよ」

「へえー」

『他にも面白い通り名とかあるの？』

「アタシ、《飛んだフレッド》には笑っちゃった。通り名つけてもらうために飛ぶ魔法作り出したとしか思えない」

「フレッド・フレッドって語呂いいわよね」

その後も他愛もない話を続けているとエミィがマーリーに呼ばれて隣のスツールにいつってしまった。エミィのいたところには、アンブラがきた。

『ココって、好きな人いないの？』

他の人に見えないように、小さな字で書かれている。首を振ると、アンブラは首を傾げた。可愛い。

『興味ないの？』

「あんまり。そっちこそ、最近よく私の相手してくれるけどどうなったの？」

『言っとくけど、別れてないわよ。今は冷却期間なの』

「……ムズカシいわね」

『そうね』

やがて、アンブラもマーリーに呼ばれて隣に行ってしまった。

冷却期間とやらのもっと教えてほしかったのに。

「減っていくわ……。はないちもんめみたいね……」

「障地が広くていいじゃないか」

「何の話してるのかしら」

「いつも通りロクでもない話だろ。……はぁ？ 僕？」

……結局、マティアスも呼ばれていった。ヴォルターに背中を預けるのは、やっぱり落ち着くわ。

「……二人っきりね」

「そうだね」

「何を読んでるの？」

「マーリーに読めって言われた少女マンガ」

「……そう。面白い？」

「面白いよ」

3年生のときだったか4年生のときだったかに言っていた、好みのタイプがどんくさい子というのに合わせて選び抜かれた漫画であるらしい。

それにしても、マーリーもなぜヴォルターに勧めるのかよくわからない。だって200歳以上の男性だもの。本当に面白いのかしら。

「最近、みんな遠くでヒソヒソ話してて、さみしいわ」

「オレがいるじゃないか」

「そうね。陣地も広いし」

そのうちわらわらと戻ってきて、男女に分かれてスツールに座ることになった。有無を言わず、だ。

「何話してたの？ 私は仲間外れの話？」

「ううん。ちょっとした恋愛相談よ」

「どうせ私は役立たずよ……」

スネて見せると、みんなくすっと笑った。

「エミィは誰か好きな人できたの？」

「いいえ。この学校の子達って、400歳は年下だもの。ちょっと年下すぎるわ」

「マティアスとかヴォルターは200歳くらいじゃない？」

「ゲルマン系よりラテン系じゃない？」

『わかるー！』

わかんない……。

思わずため息をつくとき、男性陣も何やら盛り上がっていた。

なんかみんなが遠いなあ。なんだろう、この疎外感。やだなあ。いじけていると、ヴォルターがやってきた。

「ココ」

「なあに？ ヴォルター」

「あー……週末、出かけない？」

「いいわよ。どこに行くの？」

「どこがいいかな……。夜になるんだけど……」

「どこがいいかなー。ねえ、マーリーどこがいい？」

「ちょ……何言ってんの。私は行かないよ」

「え？ エミィとアンブラは？」

「もちろん行かないわ」

『ヴォルターはあなたを誘ってるのよ、ココ』

ヴォルターを見上げると、彼は小さく肩を竦めた。

「二人なの……？」

「嫌かな」

「少人数で夜に出掛けたら、パパが怒るわ……」
「えっ、先生ってデートも許してくれないの!?!」
「デート……なの……?」
「……違うよ」
「そうよね」

私の後ろでアンブラが文字を出したらしい。ヴォルターが文字を読むように目を動かして、苦笑した。振り返った時にはもう文字は消えていた。

「ヴォルターとなら、危なくないから許してくれるかなー。パパに聞いてみる」
「あ、いや、いい。いいよ、そこまでなくて」
『ココ、もうすぐ私達16歳よ。いつまでパパのいう事きくの?』
「そうねー……」
「いいよ、ココ。今度……みんなで出かけよう」
「―――」

エミィの声が聞こえたんだけど、ピーっと音がして聴こえなかった。なんだろ。

「あ、いや……、ココ、二人で！ 話がしたいんだ！ だから！」
「わかった。どんな話なの？」
「えっと……好きな映画の話とか、好きな本の話とか……」
「じゃあ、今話せばいいじゃない」
「えっと……そうじゃなくて……」

ヴォルターの目が泳いだ。

「みんながそんなにじっと見るからよ」
「いや、あんたと話が噛みあわないからだと思うよ」
「……そうね……。二人で話したいって言ってるんだから、今聞くべきじゃなかったわ……。明日、太陽が沈んだら出かけましょうね」

ここでは言えない話、なのね。
疲れ果てた様子でマティアス達の元へヴォルターが戻っていく。

「……何だったのかしら」
「ココ、あんたにも少女マンガを貸してあげるわ」
「実家にいっぱいあるからいいわ」
「もしや応用が利かないタイプなの？」
「何の話？ 少女マンガ読むなら実家から送ってもらうけど」
『読みたい!』

そこからは、なぜか少女マンガの話で盛り上がった。
部屋に戻ると、エミィが言いにくそうに口を開いた。

「ココ、ヴォルターのことどう思ってる？」
「好きよ」
「マティアスとヴォルターだったら？」
「ヴォルターよ」
「ヴォルターとブレナン先生だったら？」
「好きの意味が違うわ。ヴォルターは友達で、クライヴは家族よ」
「恋愛感情は、まだわからないというの？」
「わからないわよ。なんでそういうこと言うの？」
「あなた、わからないんじゃないかって、面倒だからわかろうとしてないだけなんじゃないの？」
「えっ……そ、そうなの？」

冷静に考えてみると、そうかもしれない。マーリーとかアンブラが、はじめはキラキラして楽しそうでも、次第に疲れた感じで愚痴り始めるのを何度も見てきたし。傍から見てデメリットの方が多い気がして。

「そうね。……関係なさそうだから、理解するつもりもなかったのかも」

でも、なぜこのタイミングでそんなこと。学生で必要ある？ ……あるから、マーリー達は恋愛してるのかな。

「うーん。ちゃんと理解しなきゃね。で、それって少女マンガでいいの？」

「……アタシよりは参考になるかもね」

実家から送ってもらうと言ったけれど、実家の家族が学校に漫画なんでものを送ってくれるとは思えない。

魔法で取り寄せるか……。

集中して指でハートマークを描くと、本の山が現れた。本棚ごと移動させればよかったわ……。

「随分たくさんあるのねえ」

「感情の勉強に」

恋愛のごちゃごちゃした部分はほとんど読み飛ばしていた気もする。

「よーし、読むわよ……」

「アタシ、これ読んでみよー」

エミィと並んで漫画を読んでいく。

わー……、きゅんっと甘酸っぱい感じがする。

「ん……？」

なんだかデジャヴのようなセリフに、何度も手が止まった。元々私のものだから、読んだことはあったけど、そういうのとは違う……。

ふっと、ヴォルターの顔が浮かんだ。

ああ、そうね。そういうこと、なのね。私、とっくに恋愛感情を知ってたのね。

「う、うわー……！」

「どうしたの？」

「私、ヴォルターのこと好きみたい……！」

「ようやく気付いたのね……」

「ちょっと待って、エミィは知ってたの？」

「みーんな、気付いてたわ。知らないのは本人達だけよ。ココ、いつもヴォルターにくっついてるし、まずヴォルターに話しかけるし……、それに」

「も、もういい！言わないで!!恥ずかしい!!」

手に持っていた漫画を放り投げてクッションを抱きかかえる。

とんとエミィが床にかかとをぶつけた音がした。顔をあげると、いつものハーブティーとは違う、甘そうなココアだった。

「飲んで」

「ありがとう」

ココアはじんわり体にしみこんでいくようだった。温かいのが広がって、胸のあたりがぽっと温かくなる。

そうか、私、ヴォルターが好きなんだ……。

「私、いつから？」

「3年生の頃には、気になってたんじゃないかしら」

「そんなに前からなの……」

ずっと、関係ないって思い込んで知らんぷりしてたのね。

「ねえ、ヴォルターは好きな人いるのかしら」

「……本気で言ってる？」

「い、いいえ……冗談、冗談よ……あはは」

本気で呆れられていたようだったので、思わず首を振った。

明日は、ヴォルターと二人で出かけるのか。……友達以上に好きなんだって気付くと、妙に気恥ずかしい。話したいことがあるって言ってたわね……。

「……楽しみ……」

朝、クローゼットの中をひっくり返して服を引っ張り出しているとエミィが眠そうな目をこすりつつ起きてきた。

「何してるの？」

「服が決まらなくて」

「出かけるのは夕方でしょ？まだ朝じゃない……」

「それはそうなんだけど……」

「ご飯食べたの？」

「お腹すかないの」

「だめよ、食べなきゃ」

適当な服に着替えて、エミィと一緒に食堂におりる。ヴォルターに会ったらどんな顔をしたらいいのかわからなかったから、ヴォルターがいなくてほっとした。

「二人ともおはよう」

「おはよう」

マリーとアンブラが既にいたので、二人が座っているテーブルについた。

「二人とも、作戦成功よ」

「ほんと？」

『グッドタイミングじゃない』

「作戦って？」

「ココに恋心を自覚させようって話。昨日言ったでしょ？ ちょっとした恋愛相談してるって」

「あれ、私の話だったの？」

……本当にみんなは気付いてたのね……。昨日、仲間外れだったのは私とヴォルターだけなんだから、チェルソやマティアスもその作戦っていうのを知ってるってこと？

恥ずかしい。

なんで。

「なんで勝手にそんなことするの？」

思わず、口から零れ落ちていた。

3人の笑顔が固まった。違う、そんなつもりじゃない。でも。

『ココ、迷惑だったの？』

「……………ごめん」

席を立って、走って食堂の扉へ向かう。エミィが追いかけてきたけど、ドアをクライヴの部屋につなげてそのまま出てきた。

「おはよう、ココ。もうドアの魔法使いこなせてるんだね」

「……」

「何で泣いてるんだい？」

「わ、わかんない」

わからない感情。わかろうとしなかった感情。

笑われていたのか。

呆れられていたのか。

「……わかんないの……」

私は結局、ヴォルターとの待ち合わせ場所に行かなかった。

13話

初めて感情を手に入れた時のようだった。

怖い。

どう思われているんだろう。面倒だとか、付き合いきれないとか……。そうだ。きっと、そう思われてる。

「ココ、起きてる？」

「……………」

エミィは二段ベッドにつけているカーテンを無理矢理開けるようなことはしなかった。ただ優しく、無視している私に語りかけてきた。

「……ココ、ごめんなさいね。アタシ達、面白がってたわけじゃないのよ……」

「……」

「……マーリーとアンブラは、ココが恋愛感情を知らないなんて知らなかったの。アタシが悪いのよ。二人を許してね」

いつまで私はいじけているのだろう。

エミィはいつだって私のためを思って何かしてくれる。そんなことはわかっているのに。

マーリーとアンブラだって、私がただ鈍感だと思ってただけなのだろう。

ヴォルターとの約束、破ってしまった。嫌われちゃうかな。

「……先生には風邪って言ってるから……、気が向いたら、学校に来てね」

エミィの優しい言葉が静寂に飲まれていく。

ベッドの上で膝を抱いて、ただただ自己嫌悪にさいなまれている。

「……はぁ……」

出ていくタイミング、逃しちゃったなぁ……。

もぞもぞ起き出して食堂へ向かう。一応着替えたけれど、髪もボサボサのままだ。でも、もう授業も始まって誰もいないだろう。……と思っただのも束の間、ドアを開けるともっとも会いたくない人と鉢合わせた。

「……ココ……」

「……」

ヴォルター。会いたくなかった。どんな顔すればいいのかわからない。謝る？逃げる？どうしたらいいの……。

彼が手を振り上げた。叩かれる？

ぎゅっと目をつぶると、頭を優しく撫でられた。

「体調悪かったんだろ？ もう大丈夫なのか？」

「……あ……」

エミィ達、ごまかしてくれたんだわ……。

「う……」

「な、泣くのか!？」

「うう……っ」

おろおろするヴォルターをよそに、かなり長い間泣いていたように思う。

「……泣き止んだかい？」

「土曜日、お出かけできなくてごめんなさい」

「謝ることじゃないだろ」

「……ううん。私が……全部悪いのよ」

ヴォルターは感情が読み取れない表情で、私の髪を手でといた。あ、そうだ。ボサボサだったわ。

「……あなたに嫌われちゃったかしら」

「君はずるい」

「それは悪いこと？」

「いや、そんなことない」

ヴォルターが私の頬に手を添えて、親指の腹で腫れぼったい頬を撫でた。口許が少しだけ、笑ってる。

「……部屋に戻るわ……。また今度お出かけしましょうね」

「ああ」

部屋に戻って、膝から崩れ落ちていた。

ヴォルターの仕草こそ、いちいちずるいわ。

「……………。ご飯、食べるつもりだったのに……」

みんなに謝らなきゃ……。

お部屋に来てもらおう。メッセージカードを書いて、マーリーとアンブラの部屋に魔法で転送する。……うまくいったらいいんだけど……。

お菓子を作ったり、飲み物を作ったり……。そういう、休みの日にするはずだったことをのんびりと気持ちを落ち着けながらしていった。

「おかえりなさい！」

エミィが戻ってきたとき、抱きつきながら出迎えた。彼女は驚いたようすだったけど、すぐに微笑んだ。

「元気になったの？ 泣き虫さん」

「うん。ごめんね」

マーリーとアンブラも、すぐにやってきた。

「みんな、ごめんね。ありがとう。本当は、全然迷惑なんかじゃなかったの。ただ、私、急にいろんなことを知って……」

「あー、はいはい。もういいよ。大体、ごめんねって何よ？ 私達は怒ってないわよ。ココが一人で怒ってただけじゃない」

『そうよ。許してくれたなら、いいの』

「……うん、ありがとう。それに、来てくれてありがとう。クッキーを焼いたから食べて」

これで、仲直り、で、いいのかな。

「それで、ココはヴォルターが好きなのよね？」

「……うん。そうみたい」

『それじゃ、改めてデートに行かなきゃね』

そういえば、ヴォルターはデートじゃないって言ってたけど。

ヴォルターは好きな人とかいないのかしら。勘違いされたり……しないかしら。彼はそんなことないって思ってるのかも。昔、『オレと君なんてカップルに見えない』みたいなこと言ってたもの。

ああでも、みんなには相談できないわ。ヴォルターの好きな人も、きっと私くらいわかりやすいのね？ わからないって言ったら冗談でしょう？ って言われたし。

ということは。

「……そ、そうね」

へらっと笑って話を合わせておくしかないじゃない。

「おいしー！」

「よかった……」

その日は、丸一日喋っていなかった分を取り戻すように遅くまで他愛もない話ばかりしていた。

「エミィ、本当に迷惑かけてごめんなさい。エミィは同じ部屋だもの。気まずかったわよね」

「ううん。ココがまた笑ってくれてよかった」

「ヴォルターとは、また今度出かけましょうねって話をしたわ。朝、ご飯を食べに行こうとして会ったんだけど……あー！ エミィ、どうしよう……！」

「どうしたの？」

「ヴォルターに会ったとき、髪はボサボサで目は腫れてて……あぁ……最悪だわ……！」

「……大丈夫よ」

エミィはにっこり笑った。あれ、目が笑ってない気がする……。

「そ、そうね……。美容のためにも早く寝ようかしら」

「そうした方がいいわ」

ベッドにもぐりこんで、ヴォルターの顔が浮かんだ。

やっぱり、どうしても年の差は埋められないわよね。だって今日のお昼、完全に子ども扱いだったわ。

恋愛感情はわかったけど、そのあとどうしたらいいのかはよくわからない。関係が変わる必要はない気がする。今のままで十分楽しいもの

。

「……おやすみなさい、エミィ」

「おやすみ、ココ」

もうちょっと、少女マンガという恋愛のバイブルを読み込むしかないらしい。

「おはよう、ヴォルター。日程を決めましょ」

「……おはよう。日程って、何の？」

「お出かけの」

「あぁ、昨日は君も泣いてたし言い出せなかったんだけどさ、実は行きたかった美術展が日曜日までだったんだよ」

「え」

「だから……君が嫌なら、オレと出掛ける必要なんてないんだよ」

私が。

私が、約束をすっぱかしたりしたから。

「……………そ、そう……。美術展、残念だったわね……。そっか……私のせいで、行けなかったのね……」

悪いのは、全部私。

「やっぱり……私、あなたに嫌われちゃったわね。ごめんなさい」

私、ヴォルターに嫌われそうなことばかり。昨日だって、情けないところばかりだったし。

「……あら、マーリー。おはよう」

「おはよ。ヴォルターと話してたんじゃないの？」

「ううん……いいの……」

マーリーと同じテーブルについて朝食を食べることにしたけれど、どうも食欲がわかない。

じーっと見ていると、溜め息が出てきた。

「……どうしたの？」

「……………。何でもないわよ……。ちょっと食欲がないだけ」

「風邪？」

「そうかも……」

なんて自分勝手なのかしら。自分が嫌になるわ。

みんなの好意も踏みにじって。彼との約束も破って。……私なんて……ここにいる価値もない……。

何も考えたくない。

そうだ。何も考えなくていいじゃない。今までと同じで、何がいけないのよ。

「……さ、授業に行かなくちゃ」

上手に笑えた、と思う。

私は、ただ授業に集中することによって、私の気持ちと向き合うのをやめてしまった。何も考えないっていうのは、とても楽だった。けれど、苦痛だった。

「やあ、ココ」

「おはよう、ヴォルター。何か用かしら？」

「いや……特に用というわけでは……」

「それじゃあ、またね。私、課題がたくさんあるの。……また……なくしてしまっ」

「図書室に行くのか。じゃあ、オレも」

「そうね。みんなで行った方が集中できるわ」

上手に笑えた、と思った。

1週間過ぎたもの。何もなくてもへらへら笑ってれば“いつものココ”でいられた。なのに、ヴォルターは顔をしかめた。

「なんでそんなに無理して笑ってるんだ？」

「え？」

「オレと話すのも嫌なのか？」

「な、なんで……そんなこと、言うの……」

「ココ、オレは君がわからないよ……。オレが嫌いなら、そういつてくれ」

「……………私を嫌ってるのは、ヴォルターじゃないの……。あなたこそ、無理して付き合ってくれなくて結構よ」

踵を返すと、ぐいっと強い力で腕を掴まれた。掴まれているところが熱くて。ワンテンポ遅れて顔をあげると、ヴォルターは顔をしかめたまま、私を見下ろしていた。

「オレがココを嫌ってるって？ 何でそんなこと決めつけるんだ？」

「お出かけ、したくないって、言ったじゃない！」

「あれは、君が来なかったからだろ！ 嫌だったんだろ!？」

「嫌なんて、一言も言っていないじゃない!! 私、楽しみにしてたのに!!!!」

「え？」

「楽しみに、してたのに……。う……」

「あ、ちょっ、泣かないで」

「ヴォルターのばか……」

「……ごめん。改めて今度出掛けようか」

「うん」

最近私、泣いてばかりだわ。

廊下で怒鳴り合ってたものだから、野次馬が遠巻きにこちらを眺めていた。そして誰が呼んだのか、すぐにクライヴが飛んできた。

「またお前か……！ もうココに近付かないでくれないか」

「そ、そんな……私が悪いのよ。今度ね、お出掛けもするのよ。私達、仲良しだわ。日本ではケンカするほど仲が良いって言うのよ」

「あのな、ココ。そのお出掛けってのはデートのことだろ？ だめだよ。まだ君は15歳じゃないか」
「デートじゃないわ。ねえ、ヴォルター。この前、デートじゃないって言ってたわ。遊びに行くのよ」
「……君はうちの子で遊ぶつもりか」
「違います!! 遊びじゃないです!」
「え？ 遊びに行くんじゃないの……？」

なんだか混乱してきた。
デートじゃなくて、遊びじゃなくて……。散歩？ 散歩なのかしら。

「……僕はココの保護者だけど、……君にココを渡すつもりはないけど……君が時々可哀想になるよ……」
「仲直りしたのね!」
「……そうだね。でもそれとこれとは別だ。彼と二人でお出掛けは禁止だ」
「ヴォルターとはダメなの？ エミィやチェルソと二人だったら？」
「どうでもいい」
「不公平じゃないの……。パパはヴォルターが嫌いななの？ 吸血鬼だから？」
「吸血鬼だからじゃないよ。君をさらっていくからだ」
「ふふふっ、ヴォルターは誘拐なんてしないわ!」

胸を張ると、クライヴは小さく首を振った。かがんで、私の耳元でささやくように言った。

「君の――を、さらうんだよ」
「ん？ 今、なんて？」
「君の――を」
「ピーって雑音が入って、聞こえないわ。私の、何？」
「……………ああ、元の名前だから聞こえないのか……」

クライヴは、私にだけ聞こえるような小さな声で言った。呪いをかけた本人だから、私の名前を憶えているのね。

「この雑音は、私だけなのね。この前、エミィが何か言った時も聞こえなかったわ。ピーって音がしたの」
「……そういえば、エマが――って口走ったときに首を傾げてたな」
「あ、またピーって音がしたわ」
「汚い言葉だ。覚えなくていい。いいかい、とにかく、デートは卒業するまで禁止だ」
「えー！ デート禁止なの？ 私だって人並みにデートとかしてみたいわ!」
「よそはよそ、うちのうち!」
「そ、それよくおばさんが言うやつ……!!!!」

そもそも、なぜヴォルターとはダメなのよ。……私がヴォルターのことを好きって、クライヴにまでばれてるの？
恥ずかしいわ。

「……課題しなきゃ……。じゃあね、パパ」
「僕に口うるさく言われたくなければ、人前でわあわあ泣かないことだね」
「はい……」

歩き出してすぐ、思わずため息が漏れた。

「お出掛け、禁止されちゃったわ」
「まあ……仕方ないさ。君と話すことまでは禁止されてないし」
「そうねえ……」
「君と一緒にどこであろうが関係ないんだよ」
「それは嬉しいことだわ」

図書室では、廊下側のデスクで課題をすすめることにした。いつものスツールは先客がいたし、レポートでは机がいるから。
奥まった自習席はシーンと静かで、ひそひそ声で話すのも躊躇うくらいだった。でも、私は鼻歌でも歌いたい気分だったわ。だって、私、

ヴォルターに嫌われちゃったんだとばかり思ってたから。なんだかお互い、誤解してたのね。

「ココ、静かにしないと」

「ふふふ」

「さっきまで泣いてたくせに、ほんとけろっとしてるよな」

ヴォルターが私の髪をくしゃくしゃにして頭を撫でてくれた。それから、髪を手で梳いてくれる。

ヴォルターといると、ぼかぼかした気持ちになれる。

「好きだなあ……」

それは、ぼろっと、口をついて出てきた。

14話

「ちょっとアレ、どういうこと？」

マーリーがあからさまに嫌そうな顔をする。

視線の先には、リュウ・ホンファがヴォルターと腕を組んで歩いていた。ホンファは楽しそうにおしゃべりしてて、ヴォルターの表情からはなにも読み取れない。

「……ホンファは背も高いし……美人だし、お似合いだわ……」

先日、好きと言葉に出してしまった時。私はその言葉を自ら否定してしまった。頭を撫でてくれるのが、好きなのだ。つまり、今のところヴォルターにとって私は「頭を撫でてくれる」のが好きであって、それは誰でもいいということになってしまってる。

ホンファと付き合っていたとしても、私に入る隙間はないのだ。

ぼんやりとヴォルターとホンファの二人を見ていると、本当にお似合いに思えた。二人とも、モデルさんみたいで。

「……私、教室に戻ってレポートを提出しなきゃ」

あれ……？

何度探しても、レポートがない。

「……レポートがなくなっちゃったわ……」

もう何度目かもわからない。何度書いても、消えてしまう。先生にも説明したけれど、それはただの言い訳でしかない。きっと授業の評価は下がってしまう一方だ。

「私、おかしくなっちゃったのかしら」

確かにレポートを書いていたのに。

そんなことが何度も続いた……そんな時に、校長室に呼び出された。

「校長先生、ココ・ブレナンです」

「どうぞ」

ついに校長先生にまで怒られちゃうんだわ、と思っていた。でも、先生はいつも通りだった。おどおどしてるところや、水晶玉を磨いているところ……。とにかくいつも通りだった。

「少し前に話したことを覚えていますか？」

「えっと……？」

「エドワール・サジュマンの魔力回復タイプについて」

「あ、ああ……、はい、覚えています」

「結論だけ言いましょう。彼は……魔力を奪って回復するタイプです」

「……やっぱり」

「過去の二人は……彼と関わりあう中で魔力を少しずつ奪われていったのでしょうか」

校長先生は、静かに言った。いつもの水晶玉には、何やら羽のついた盾に剣が鎖で縛りつけられている柄の国旗がはためいていた。……あんなの、見たことないわ……。

「そういえば、進路は決めましたか？」

「いいえ……。でも、以前先生が言っていた研究の道に進むのも視野に入れてます」

「その時はこの学校の研究室を使うといいでしょう。歓迎します。いくつかレポートも読ませてもらいました。とても考察も鋭く面白いですよ。最近の、対価計算のレポートは特に」

「え……!？」

「どうかしましたか？」

……なくしたレポートだ。それとも、今日再提出した分をもう読んだということだろうか。

「……いいえ、何でも」

「何度も書いている方が、精度が増していいと思いますが……。そこまで躍起になって書き直す必要はありませんよ」

「何故ですか？」

そもそも何故、私が何度も書き直していることを知っているのだろう。

「在学している生徒はたくさんいますが、日本語で書かれたレポートはあなたのレポートです。レポート用紙には翻訳の魔法がかかっているので、あなたがイタリア語で書いていると思っている人もいるのでしょうね」

「えっと……どういことでしょうか……？」

「名前を書き換えたところで、あなたのレポートだとすぐにわかってしまうということですよ」

……もしかして、レポートは……盗まれてたの？

わけがわからなくて、頭がくらくらする。

「盗まれているとは……考えもしませんでした……」

「人を疑うことも、時には必要ですよ」

校長先生が、ハーブティーを淹れてくれた。カモミールティーだ。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

「……5年、経ちましたね。感情にはもう慣れましたか？」

「はい。……あの、校長先生は、なぜ私が……その、呪われていること……」

「あなたのお祖父さんには、一度教鞭を執ってもらったことがあります。研究の成果だとあなたを見せられた時にはゾツとしたものですよ」

そっか。お祖父ちゃんの研究内容も、“成果”も、知ってるから……。

「シンイチロウには悪いけれど、あなたが楽しそうでとても嬉しいですよ」

校長先生は、特に嬉しそうな顔はしていない。

「……感情は、解るようになりました。でも、人の……わからないんです。校長先生、本当に嬉しいと思ってるんですか？」

「あら……。マイノリティーな感情表現もあるのですよ。私は……そうですね、よく声の調子が変わると言われました」

「声……」

「あなたの担任のウォリック先生なんかは、クールを装っていますから……手が動きますよ」

「うーん……」

マティアスが一度死んだ時、号泣してたけど……。そっか、いつもはクールを装っているのか……。

「とにかく、よく見てみるといいでしょう。顔に感情が出ない人は、他のところに現れているものです」

「……はい……」

表情筋の動きは、大体わかるけど……。そっか、それ以外の部分も見なきゃね。

「他に、何かありますか？」

「……先生は恋をしたことはありますか？」

「ありますよ。物陰から見ていただけの、淡い恋でした。あなたは相手のことを、きちんと見えていますか？」

「……たぶん……」

そう言われると、自信がないわ……。

校長先生にお礼を言って、教室に戻った。

ホンファはランチのときもヴォルターにべったりで、大鞆蹠を買っているのにも気にしない堂々とした態度には感動すら覚えた。無表情のヴォルターの指が、リズムをとるように机を叩いている。

「ほんと……何アレ」

『デレデレしちゃって……。ココ、大丈夫？』

「……彼がデレデレしてるように見えるの？ 見て。机をトントンするの……イライラしてる時の癖よ」

「私達にはいつも通りにしか見えないけど……」

「ココの言うとおりにイライラしてるんだとしたら、なぜヴォルターは拒否しないのかしら？」

『何か理由があるのかな』

「自分と付き合わなかったらマティアスに何かするとか言ってるんじゃないの？」

「有り得るわ」

それって脅しよ。

ホンファはあれで楽しいのかしら？

「ねえ、ヴォルター。彼女と二人じゃなくてみんなで一緒に食べたらいいじゃない」

「……彼女じゃないんだけど……、君達に迷惑だろう？」

「報告もあるの。みんな、あのね、最近、私のレポートがよくなってたじゃない？ あれってね、先生達が見れば私のレポートってわかるのが違う名前前で提出されてるんですって。だから、先生達は私のレポートをきちんと評価してくれているわ」

『どうしてわかるの？』

「私、日本語で書いてるから。レポート用紙には翻訳の魔法がかかっているから日本語で書いても大丈夫なのよ」

「その泥棒は退学とかにならないのかしら」

『直接の危害はないし、留年じゃない？』

「留年だったら誰かわかるわね」

「どうしたの？ ホンファ。顔色が悪いわ」

「う、うるさい！」

ホンファがガタッと立ち上がって、どこかへ走って行ってしまった。

「なんだ……オレが証拠を掴んでやろうと思ってたのに」

「やっぱホンファが犯人なわけ？」

「名前書き換えてるとこ見たから間違いないだろうな」

ヴォルターがぐーっと伸びをすると、骨がばきばきと鳴る音が聞こえた。

「じゃあ、ヴォルターは証拠を見つけるために一緒にいただけなのね？」

「他に理由があると思うかい？ 疲れたよ。まさかあそこまでベタベタくっついてくるとはね」

「ヴォルター、すごい嫌そうな顔だったわ。そんなに嫌なら放っておいてよかったのよ」

「え、オレ、嫌そうにしてた？」

「ココから見れば、ね。ただの無表情にしか見えなかったけど」

「……怖い顔だったわ」

ヴォルターは私の頭をぼんぼん、と撫でた。もう怖くないよ、とでも言うように。

「私……ちょっとショックだったわ。あなたがいるのが当たり前だったから……」

「嬉しいよ」

ヴォルターの目が細くなる。ぐっと小さく拳を握ったのが視界の端で見えた。

「それから……さっき、校長先生に呼ばれて、卒業後の進路について聞かれたわ。私、学校に残って研究するかも」

「すごいじゃないか」

マティアスの反応が一番早かった。

私の両肩を掴んで、ぐらぐら揺らす。声が熱っぽい。……ああ、この人、研究者気質、だっけ。

「校長も元は研究者だ。その校長に認められるなんて、素晴らしいよ」

「卒業かぁ……、私はイギリスに戻るんだろうな。あとは……考えたこともないや」

「私の呪いはどうなるのかなぁ」

聞いたことのない、アルトの声が聞こえた。全員の視線が、宙を彷徨って一人に集中した。

「……今、の……。アンブラ？」

「あら？あー……。声、が」

「……呪いの術者が消えたのね」

アンブラの声は、とても耳に心地いいきれいな声だった。

「……大変。呪いの分の魔力が減ってるわ」

「うーん……自分ではわからないのだけど……」

「随分減ったな……」

「魔法、使える？」

アンブラが髪をくるっと指に巻きつけて回した。……が、何も起きない。

「……使えない……わ」

アンブラの肩越しにチェルソと目が合った。以前、彼が危惧していたことが、起こってしまったのだ。

魔力を増やすには、魔力を持つ何かを捨てる。それくらいしか、私に思いつくものはなかった。

「……アンブラ、1日、時間をちょうだい。エヴァンジェリンと交渉してくるわ」

「エミィ、私も行く」

エミィは、校長先生の部屋には入れてもらえない。

意図を理解してくれたのか、エミィは顔を立て上がった。エミィと一緒に校長室に向かう。

「校長先生と、どう交渉するの？」

「1日だけ、悪魔除けの呪いを解いてもらうわ」

「……え？ それで、どうするの？」

「魔力がこもった、宝石を探すの。魔石っていうんだけどね。アタシが知ってる魔石は夢の中にあるのよ」

魔力がこもった宝石……。そんなものがあるの？

「校長先生、ココ・ブレナンです。お話が」

「……どうぞ」

ドアが開く。校長先生は、エミィの姿を見てドアを閉めようとした。が、エミィが閉まっていくドアを掴んで無理矢理こじ開ける。

「……アタシは生徒よ？」

「わ、私に近付かない条件で、ですよ……!!」

「話ぐらい聞きなさい、エヴァンジェリン！ ———！」

「ヒィィィッ」

禁止用語、ね。校長先生は泣きそうな顔をしている。何を言ったらこんな恐怖に陥るのかしら……。

「……二人とも、落ち着いて。校長先生、アンブラの呪いが解けたんです」

「アンブラ……ああ、声を奪われる、呪いの」

「あの子の呪いが解けたら、魔法なんか使えないわ。魔石を探すから、呪い除けの呪いを……」

「それはできない相談です」

校長先生が、きっぱり言い切った。

「しかし、私の持っている魔石を差し上げましょう。以前エマさんがくれたヤツ……だから、本当は、あまりあげたくないけど……身の安全には代えられません……」

「あんた物持ちいいわね……」

エミィが呆れたような言い方をした。でも、顔は嬉しそうに綻んでる。

「……そうだ、あの件は、どう？」

「各方面に搜索を依頼しています」

「そう」

ああ、身内同士の会話ってやつだ。

「ココ・ブレナン。これをアンブラ・タッシナーリに身に着けるようにいってください」

校長先生から渡されたネックレスは、暗い色の中にキラキラと光が揺らいでいた。

これが……魔石……。きれい。

「……先生、ありがとうございます！」

「助かったわ」

「……ココ……、今、エマさんが言った『あの件』というものを、あなたにはお話ししましょう。私は……ドロテア・チェスティを探すために学校を創立しました。一部の信頼できる卒業生には……搜索を……頼んでいます」

「……はい」

学校で、手駒を育てる。でもそこまでして見つからないなんて。

「エマさんによると、お師匠サマは……とても珍しい魔石を探しているそうです」

「プレミアム・ジュエルっていうの」

「……私に、それを研究しろと？」

「……………。強制では、ありません」

「考えておきます」

校長先生とエミィがここまでして探しているひと。

自分の意思で隠れているなら、見つかりそうもない気がする。

そして……、先生の意志を聞いてしまった以上、もう戻れない気がする。私は、ドロテア搜索のための歯車として生活していくの？

「……行きましょう、ココ。アンブラに魔石をあげなきゃ」

「うん」

教室に戻る途中、エミィは小さな声で、「巻き込んでごめんなさい」と言った。

15話

6年生になっても、アンブラは声が出るようになっても文字を出している。6年もの習慣は、そう簡単に変えられるものじゃないらしい。それでも大きく変わったことが一つ。アンブラの事件がきっかけで、アンブラとチェルソが付き合い出したのだから驚きだ。

「このグループ内でカップルができるなんて」

「びっくりだねえ」

「……………」

ヴォルターと話していると、マーリーが顔を上げた。マーリーは、隣のスツールで本を読んでいた。私とヴォルターは、最近二人で背中合わせに座ることが多い。

「あんた達、本気で言ってる？」

「？」

「……」

「まあいいわ。ココ、何読んでるの？」

「『ノア夫人の宝石放浪記』っていう……エッセイよ」

「宝石がほしいのかい？」

「いいえ。魔石ってどんなものかなあと思って……調べているの」

魔石については、大体調べがついている。魔力のこもった石。大体が、微力ながら魔力を吸う(奪うわけじゃない)宝石だ。ただの石ころでも魔石の可能性はあるけれど、身に着けないと魔力を吸って魔力が溜まることはない。

ただ、プレミアム・ジュエルという魔石はただの魔石じゃない。常に世界に一つあって、願いを叶えると言われている。そしてもっと厄介なのが、願いを叶えると消えてしまって、新たに形を変えて現れること。

このノア夫人という人のエッセイは魔力もない夫人が宝石を集めるだけのものだけど、時折魔石っぽい記述がある。亡くなっているのが残念だが、まあ100年以上も前の人のだから、当たり前か。

ノア夫人の手記には何度ルカという人に呼び掛ける言葉がある。旦那さんの名前はリュシアンという名前で、彼をルカと呼んでいるのかもしれないけれど、なぜルカと宝石に執着しているのか……。そこがよくわからなかった。

「魔石ねえ……。アンブラを見ると、普通の人間でも魔石を持っていれば魔法が使えるってことよね？」

「あれは特別よ。校長先生の異常な魔力を吸い取った魔石だもの。他のとはわけが違うわ」

「そっか……」

プレミアム・ジュエルの発生条件って、どんな感じなのかしら。

考え込んでいると、ヴォルターの手が頭をぼんぼんと撫でた。そういえば、ヴォルターの好きな人……誰なのかしら。わかりやすいつて、エミィは言ってたわ。これも重要な課題だった。

校長先生のアドバイス通り、私は観察眼を養わないといけならしい。

「ココ、飲み物買ってくるけどレモンティーでいい？」

「え、ええ……」

「マーリー、飲み物いるか？」

「あら、助かる」

「ミルクティーでいいか？」

「うん」

ヴォルターが席を立て、マーリーと目が合った。

「ねえ、マーリー。ヴォルターの好きな人って、私の知ってる人？」

「はあ？」

「あれ？ 知らない人？」

「あんた、わかんないの？ エミィはわかってるみたいって……」

「わ、わかんないから……わかってる……フリ、した……」

「……オーマイゴッドネス……」

「本当にわからないの……。私は脈あるの？」

「……ヴォルターが誰を好きであっても、ココがヴォルターを好きなことには何の関係もないと思う。今の関係を壊したくないと思うか、ヴォルターと違う関係になりたいかはココ次第だけど……。ヴォルターの好きな相手がわからなくても告白するっていうのも、アリなんじゃないの？」

「……関係」

今の、ヴォルターとの関係。兄妹のようで、甘やかされていて。

「うー……。私、本当にヴォルターのこと好きなのかしら……」

「そこが揺らぐようなら……。私達がココを放っておきすぎたんだね」

「しばらく考えておくれ」

ヴォルターが飲み物を持ってきてくれて、私は気付けば同じ行を何度も読んでいた。内容が全然入ってこなかった。

寝る前にはいつも、今日あったことを整理する。

私、ヴォルターが好きなかわからなくなってしまった。けれど、前にホンファがヴォルターと腕を組んでいた時、確かに嫌だった。

「……………」

感情が、わからなくなっていった。

目を閉じてヴォルターのことを考えても、いつも何かしてもらってることしか思い浮かばない。

私はいつの間にか寝ていた。寝た気は全然、しなかった。

朝、食堂でヴォルターにおはようと言った時、彼は珍しく驚いた顔をした。

「どうしたんだい？ ひどい限だ」

ヴォルターが片手を頬に添えて、私の目の下を指の腹でなぞる。それはとてもぞくぞくする感覚だった。

あ、近い。人にはパーソナルスペースというものがあるという。今は退学してしまったセフェリノは、それがとても広くて。

ヴォルターとの距離は、30センチも離れてない。私は、とっても好きだからいいの。でもヴォルターは？ ヴォルターも、そうなの？

その考えに思い至った時、ざわざわと体中を電気が駆け巡ったみたいなきもちがした。耳元がくすぐったい。

「……あ……あの」

「あ、ごめん。馴れ馴れしいよな」

「……ヴォルター、私のこと、好き？」

「その聞き方はずるい」

「悪魔のようだよ」

「え……あう……。なんで？ それは悪いこと？」

自分で尋ねておきながら、しどろもどろになってしまう。

「全然悪くないよ」

ヴォルターはくすっと笑って、もう片方の手も私の頬を包んだ。そして、私を優しく引き寄せる。

あれ、顔、近い。あれ？

目をぎゅっとつぶると、やわらかいものが唇にふれた。これって、キス……。だよ。

「オレがどれくらい好きかわかった？」

食堂。食堂で。人がいっぱいいる食堂で。顔が熱くて、目が回るようだよ

顔をのぞきこむヴォルターにぶんぶん縦に首を振って見せると、やっと解放された。

もう、ふらふら……。

「やだ、ヴォルター。この子寝てないのよ！ 刺激が大きすぎるわ!!」

あ、もうダメ……！

しゅうっとボリュームを下げたみたいにみんなの声が遠くなっていった。

「また君か」

「はぁ……すみません」

話し声が聞こえて起きた。

保健室のようだ。

「……パパなの？」

「ココ！ 起きたかい。心配したよ」

「……寝てただけよ」

クライヴの隣にはヴォルターが立っていた。か、顔が、見れない。

「ココ、熱があるんじゃないか？」

「ち、違うの。パパ……あのね、私、ヴォルターとキスしたの」

「は？」

クライヴがヴォルターを見ると、ヴォルターは露骨に顔をそむけた。

「あ、あれ？ 言っちゃダメだった？」

「いや、いいよ。きちんと報告するなんて偉い子だ」

「えへへー」

「君はヴォルターが好きなのかい？」

「大好きよ！」

「……そう。じゃあ、付き合ってみたらいい」

「先生……いいんですか」

「それはココが決めることだ。……し、コソコソされるよりはよほどいい。僕はね。この子の本当の父親はどうか知らないけど」

「お父さんは私に興味ないもの」

これで、ヴォルターと付き合うことになった……ってことでいいのかしら。

あ、そういえば好きって言われたんだった。

「付き合うって、何するの？」

「君たちの間にあった友情は、恋っていう名前に変わる」

「私、ずっと恋をしてたわ」

「その恋が、お互いを想う気持ちだったとき、友達じゃなくて恋人になるんだ。だから、付き合うっていっても何も特別なことをするわけじゃないよ。なあ、ヴォルター？」

「……そっすね」

そうなのね。キスは、恋人同士がするものだと思っていたのだけれど。

「あ」

こういうこととか……キスのこととか、クライヴに……パパに言うべき事じゃないわ！

私ったら、浮かれすぎ……!!

「……パパ、もう帰って」

「うん。ほら、行くよ」

「あ、はい」

二人が出て行って、前のめりに倒れ込む。

浮かれすぎた……。恥ずかし……。

でも、ヴォルターと私……。私達、恋人同士なんだわ。デートの禁止は、まだ続いているのかしら。ぼーっと考えていると、うとうとしてきた。起きたのは、人の気配がしたからだ。

「あ、起こしちゃったかい？」

「ヴォルター……パパと帰ったんじゃない……」

「もう夕方だから、送ろうと思って」

「えっ、そうなの!？」

なんて早い。

「あ、あの……ごめんなさい。パパに……キスしたとか、言うべきことじゃないわよね」

「……ああ、それは……まあ、言えないようなことはしないから別にいいんじゃないか？」

ヴォルターは少し照れくさそうに笑った。

「さっきの話だけど、オレは恋人って、独占できる権利だと思うんだ」

「独占？」

「君、マティアスにもエミィにも抱きつくけど、これからは、恋人はオレなんだって引っぱがしていいかな」

「……私、何も考えてなくて……」

「ずっと、君を一人占めしたかったよ」

そういって、ヴォルターがぎゅっと私を抱きしめた。口元が思わず緩むのをこらえて、ぎゅうっとヴォルターを抱きしめ返す。なんて幸せなのかしら。

「……ちょっと……いちゃつかないでくれる？」

「!!」

びっくりして顔をあげると、マーリーとアンブラがニヤニヤしながら立っていた。

「二人とも……」

「帰るわよ」

「えっ、でも、オレが」

「大体、ココはマティアスには抱きつかないわよ」

「そういわれてみれば、そうね」

「ほら、ココ。帰るよー」

二人に手を引かれて、寮まで戻る。時折振り返ると、ヴォルターはにこにこしながらついてきた。大きな犬みたい……。

「今日はガールズトークしなきゃねー」

「そうよ。3年は見守ったんだから、根掘り葉掘り聞かせてもらわなきゃ」

「3年？ 私、ヴォルターが好きって思ったのは去年だけ」

「違う違う、あんたじゃなくてヴォルターよ……」

「えっ!? 全然わかんなかった！」

「鈍感にも程があるわよ！ 根掘り葉掘り……ヴォルターのアピールに対してどう思ってたか聞かせてもらおうわよ……」

「ちょっ、……やめて……それ、オレだけが恥ずかしいじゃないか」

ヴォルターは外を歩けないので職員室前でお別れして、真っ直ぐ私の部屋に戻った。すると、エミィがお菓子や飲み物をたくさん準備してくれていた。

「あら、おかえりなさい」

「た、ただいま！」

「ふふふ……ココをちゃんと捕まえてきました！」

「ご苦労」

みんなの笑顔が怖いわ。マーリーやアンブラに彼氏ができたときはこんなのなかったじゃない……！

「まずは、ヴォルターのどこが好きなの？」

「……こ、これ、答えなきゃいけないの？ ……えっと、頭撫でたりぎゅーってしてくれるとこ」

「うざいわ……思った以上にうざい……」

「聞いといてそんなこと言わないでよ。ねえ、マーリーが3年見守ったって言ってたじゃない？ 思い返してみても、そんな気配なかったと思うんだけど」

「まず、ヴォルターが言ってたどんくさい子って、ココのことだと思うわよ」

「……。どんくさくないと思うわ」

「ココが眠いときとか、機嫌悪いときとか、最初に気付くのはいつもヴォルターじゃない。ココのことばかり見てるってことよ」

「……そうなの……」

私、ずっとヴォルターの特別だったのね。

「えへへ……。アンブラ達はどうなの？」

『特に何も無いわよ』

食べながら会話できるの、いいな……。

『チエルソって意外と奥手なの。まだキスもしてないわ』

「あら」

「キス、したいの？」

「別に……そういうわけじゃないけど。ちょっと、あぁいうのも羨ましいかなって」

「あー！ 私も彼氏ほしいわ……」

マーリーの理想の彼氏は、とっても難しい。背が高くて、お金持ちで、かっこよくて……とか、いくつも条件がある。

私みたいに、いつの間にか好きになっていた、というのは嫌なのかな。

応援したいのだけど。

やっぱり、私には他人の気持ちがわからない。これはあまりいいことではないと私は思う。

16話

クライヴの言う通り、ヴォルターと恋人同士になっても特に変わりはない。

ふとした瞬間に、ヴォルターが頬や額にキスをしてくれることはあるけれど。私からは、したことない。したくないわけじゃなくて、どうしたらいいのかさっぱりわからない。

これは私にとって、重要な問題だった。

「私の好きは、ちゃんとヴォルターに伝わっているのかしら」

真面目な話をしているのに、ヴォルターはにへらーっと変な笑い方をした。

「もう、変な顔しないで。真面目な話をしてるのよ」

「可愛いよ、ココ」

「話が嘯みあってないわ……」

はぁ……っと溜め息をつくとき、エミィがくすくす笑った。

「お熱いわね」

「……ごめんなさい、うるさかったわね。……って、違うわ。私はエミィに話しかけたのよ、ヴォルター。なぜいるの？」

「ブレナン先生が呼んでたから、呼びに来たんだよ」

「あら、そうなの。ごめんなさい、エミィ。すぐ戻るわ」

「ええ。……そうねえ、30分あればレポートが終わりそうだから、30分待って戻ってこなかったら、部屋に戻ってる」

図書室を出ると、当たり前のようにヴォルターがついてきた。さっきにもましてニヤニヤしてる。

「オレのこと好きなんだ？」

「！」

ず、ずるい聞き方。確かにずるいわ。悪魔みたいだわ。しかもわかってて聞くんなんて。

「す、好き……よ」

「照れてる」

「照れてない！」

「可愛いなあ」

この、ストレートな愛情表現は、きっと日本人にはできないことだと思う。

私が真っ赤になって歩を早めると、ヴォルターもゆったりついてきた。というか、ヴォルターの方が足が長いから私の早歩きは彼の普通のスピードなのだ。いつも、歩くスピードを合わせてくれていることに気付いたのは本当に最近のこと。

「……ココ。卒業したら、オレもこっちに住むよ」

「本当？」

「本当さ。君が嫌というまで、一緒にいたい」

「嬉しいわ……。でも私、本当にあなたに釣り合うのか……」

自信がないの。

年齢は追いつくことはないし、精神年齢もかなり差があると思う。身長だって、まだまだ親子みたいだし。それに、ホンファみたいに美人じゃない。

「ココ、君はとっても素敵だから自信を持ってほしい」

「……そう……ね」

少なくとも私は、ヴォルターが選んでくれたんだもの。自信を持っていいのね。

釣り合うかどうかとは……別の問題だけど。

「パパは何の用なのかしら」

「さあ？ オレは呼んできてほしいと頼まれただけだから。オレも部屋に戻るよ」

クライヴの研究室につくと、彼は私にミルクティーを出した。

「君、卒業後はどうするつもりだい？」

「……え、っと。研究職で、学校に残るわ。校長先生とも話したんだけど……聞いてない？」

「君の意思を校長先生から聞くなんておかしいだろう？」

「そうね……。そうかも。私、研究職で学校に残る。……ドロテアを探すお手伝いをするの」

「……わかった。名前は、どうする？」

感情の意味の、名前。それが戻ってきたら……。ヴォルターやエミィのことを考える。今までの気持ちが全部嘘になっちゃうのかしら。感情がないなんて、今更無理なのよ。

「……いない。元の名前は、いないわ……」

「僕が死んだら……。一応僕も魔法使いだから、寿命は長い。けれど……」

寿命が尽きたら、呪いが解ける。

「でもそれは何十年後の話じゃないの……。そんな……パパが死んだあとのことなんて、考えたくない……。パパは何か考えがあるから呼んだんでしょ？」

「僕はヴォルターに呪いをかけなおしてもらうのが一番いいんじゃないかと思ってる。彼なら、僕よりも……君よりも、寿命は長いし、何より死なない。君達が一生愛し合う覚悟があるなら、いいんじゃないか」

「だめよ。そんな迷惑……かけられないわ。私が枷になってしまう。魔力だって奪うことになる。そんなの嫌なの……」

クライヴがテーブルをぐるっと回って私の隣にきた。

「僕が言うことじゃないとは思う。だけど、君はヴォルターに遠慮しすぎじゃないか？」

「……図々しいお願いをするのとは別の話だわ」

「このこと以外にも、だよ。伝えるのも拒否するのも、良くも悪くも遠慮してるように見える。辛くないかい？」

「……辛い、のかしら」

ヴォルターのことはとてもとても好きで、なのに、私ばかり甘えていて。

いつも申し訳ない気がしている。

「……ごめんなさい、クライヴ。考えておくわ」

「わかった。でもココ、これだけは覚えておいてほしい。僕はいつ死ぬかわからない」

なぜそんなことを言うの？ ……そんな疑問を無理矢理飲み込んで、図書室に戻る。……が、エミィは既になかった。30分、もう経ってたわ……。ああ、遠回りになっちゃった。

「……」

ふと、目の前の自習席に置いてある本が目についた。きっと、誰かがきちんと片付けなかったのね。

手に取ると、妙にずしりと重かった。表紙には重厚な文字で『呪い大全』と書いてある。

呪いには、憎しみによって悪影響を与えるのろいと厚意によるまじないの2種類があります……？

のろいとおまじない。おまじないって、自分にもするわ。ってことは、名前を奪う呪いを自分にかけることってできないかしら。

その場合、名前の記憶はどうなるのかしら。私は今本名を思い出せないけれど、術者であるクライヴは覚えているわ。……これは、本名をフルネームで言うと呪いが解けるため……。

「自分にはかけられそうにないわね……」

やっぱり、ヴォルターに頼むしかないのかしら。

……負担をかけるのは、嫌だなあ。

本を棚に片付けて部屋に戻る。エミィにクライヴとの話をすると、彼女は首を傾げた。

「魔法使いだって、そんなに簡単に死なないわ。……何かあるんじゃない？」

「何かって？」

「病気にかかったとか、何か命がけのことをしなきゃいけないとか」

「そうかも……。心配だわ……」

「だって、ココが卒業するまでの保護者はブレナン先生だもの。先生がその責任を放棄するとは思えないわ」

卒業してからの話なのだろうか。

頭の中が、ぐるぐるとまわる。

「ヴォルターに相談した方が、いいのかしら。彼、とっても優しいから二つ返事で引き受けてくれると思うの……」

「そうね。ヴォルターはココにベタ惚れだし……。あ、そうそう。ヴォルターにはココの気持ち、ちゃんと伝わってると思うわよ」

「そう？」

「あなた、自分では隠してるつもりなのかもしれないけど、隠せてないもの」

「恥ずかしい……」

「いいんじゃない？ 素直なのがココのいいところよ」

ふと、ヴォルターに相談する前に呪い学の先生に相談してみよう、と思った。

翌日の放課後に訪ねた呪い学の先生は、神経質そうに眼鏡を押し上げた。事情を話せば話すほど、この先生に相談してよかったのかなあと思ってしまう。先生は、まったく顔色も変えずに続きを話すように促してくる。

「……ブレナン先生の親バカっぷりは、正直引くほどです」

「……そうですか」

「ですから、あなたのルームメイトが言うように何か理由があるのでしょうか。わたくしにはわかりません。……それから、呪いを自分にかけることは理論上可能です。名前を奪う呪いは名前を忘れる力の方が強はたらくので、二度と解けないと思いますよ」

「……二度と解けなくて……いいんです。呪いのかけ方を……教えてください」

「いいでしょう。わたくしもそちらをおすすめします。あなたの名前には魔力がありますから、モノとして傍においておいた方が……どうしました？」

「あの、ちょっと、理解が、追いつかないのです……が……」

先生は、一つの指輪を取り出した。キラキラ光る石が一つついている。

「呪いで奪う場合、この指輪を奪われて、その代わりに魔力を与えます」

「はい……」

「しかしこれが魔石の指輪だとしたらどうですか？ 魔石には魔力がありますね。魔石の分の魔力があなたから減り、呪いによる代償としての魔力があなたに増えます」

「つまり……私の名前には魔力があるから、プラスマイナス、ゼロなんですね」

「そういうことです。本来自分に呪いをかけることは魔力が減ってしまい大変危険ですが、名前に魔力のあるあなたなら、問題はないでしょう」

そうなんだ……。魔力が多いのはクライヴの魔力が増えたからだと思ってたけど……。そうだと教えてくれたエミィは出会ったときには私の名前に魔力があるって知らなかったから、当たり前か……。クラス分けは、単純なミスだったってことかしら。

「……それでは、指導よろしくお願いします」

「いいですよ。また明日来てください。まずはブレナン先生に話をすべきです」

「はい」

呪い学の研究室を出てクライヴのところに真っ直ぐ向かう。ドアに手をかけたところで、中の話し声が聞こえてきた。

「いずれわかることとはいえ、ココちゃんには伝えておくべきなんじゃないの？」

「いや……ココに心配をかけるわけにはいかない。これは僕のわがままだ」

「……私だったら嫌だなあ」

思わず、ドアを開けていた。クライヴとロダン先生が何も無いような顔で私を迎えてくれた。

「やあ、ココ」

「今の話、何？ 私に内緒のことがあるの？」

「……魔法史跡の、旅に出ようと思ってるんだよ」

クライヴは肩を竦めてミルクティーを出してくれた。

「呪いのこと、どうするのか決めたのかい？」

「ええ……。自分で、自分に呪いをかけるわ」

「そんなことできるわけ……！」

「呪い学の先生に相談して、大丈夫って言われたわ」

「ボスホロヴァ先生が？」

……そんな名前だったかしら？

うーん……呪い学の先生、名乗ったことないから、わからないわ。

「名前がわからないならボスホロヴァ先生だと思うわ。彼女、名乗らないから」

「とにかく、呪い学の先生にあなたなら大丈夫って言われたの」

「そうか……。それなら、僕は心置きなく旅に出れるよ」

「……そう」

ロダン先生が言った、『私だったら嫌』って、何なんだろう。

ただの旅でそんな風に言う？

「……私がもし、呪いをかけていたとして……。命の保証がない危険な旅なら、呪いを解くわ。死んだってバレるもの」

「どうしてこう賢い子なんだろうなあ……」

「だから、呪いを解くのね？ ふざけないで。絶対嫌よ！」

「そういうと思ったよ、間藤心」

「！」

その名前を聞いた途端、息ができなくなった。ぎりぎりと締め付けられるように胸が痛い。これはきっと、心を引き裂かれる痛み。

名前が、戻ってくる。

「もう決めたんだよ」

「……それが事実なら仕方ないわね。気を付けてね。クライヴ」

「ありがとう、ココロ」

寮に帰る途中、ヴォルターに会った。

「ココロ」

呪われた名前。みんなの記憶を書き換える呪いの本質だわ。

「……ヴォルター、名前が戻ったの。意味、わかる？」

「名前が……？ あれ？ でも、君はずっと間藤心で……あれ？」

「今、私、あなたを好きだった事実しかないの」

想いは、ないの。

17話

ボスホロヴァ先生は、静かに眼鏡を押し上げた。

「……あなたのお祖父さまは嫌いだけれど、本当に面白い研究。名前で魔力を増加させるなんて言霊がある日本限定の呪いだわ。」

「コトダマ？」

「魔法が確立される以前の、魔法のようなものです。仙術や占術、妖術と呼ばれるものは各地にありますよ。日本特有の、言霊信仰と魔法を融合させたのでしょうね」

「そうですか」

魔法史は、クライヴの専門だ。聞けば教えてくれるだろうけれど、彼はもういない。

「しかしブレナン先生も出発を急いだものですね。呪いを習得するには時間がかかりますが……しばらくはそのままよろしいですか？ わたくしが名前を奪いましょうか？」

「いいえ、結構です」

そうして、私はボスホロヴァ先生に呪いを習うことになった。

へらへらしていれば、“ココ”のようにしていられる。まるで私が私とすり替わったようだ。面白いとは思わないけれど、特に罪悪感というものもない。

素直にヴォルターに心がないことを打ち明けた時、ヴォルターからあまり言わない方がいいとくぎを刺された。

「あなたの彼氏は、今のままでいいと？」

「……それは聞いていませんでした。……私達は恋人同士なのでしょうか。クライヴは昔、恋をしあっている者同士の関係のことだと言っていたわ。それなら、今は違う」

「さあ。気持ちが大事なものは間違いないけれど、言葉も大事です」

1時間きっかり呪いについて習って研究室を出ると、ヴォルターが廊下に立っていた。

「もうお目付け役もないし、デートに行こう」

「……？」

デート。恋人同士のお出掛け。つまり、まだ私達は恋人ってことでいいのかしら。

「そうね。名字まで戻ってるってことはもうクライヴの養子でもないみたいだし」

日没後に正門の前でヴォルターと待ち合わせるようになった。

何を考えているのか、心があっても理解するのは得意ではなかったけれど、今は本当にわからない。適当に雑誌の服を真似して正門へ出ると、ヴォルターは既に待っていた。

「行こうか」

「ええ」

「可愛いな」

「ありがとう」

「心がないって、どんな感じなの？」

「何もかもがただの事実よ。善悪の区別や感情の区別は、知識として仕入れておくの。人間関係にそんなに苦労しないわ」

「そうか……。オレがどんな気持ちかわかる？」

「わからないわ。無表情なもの」

「オレはいつも通りだよ。君はいつも、この無表情の喜怒哀楽をわかってくれてた」

「そうなの。それが恋の力なのかしらね」

ヴォルターは私の手を引いて、適当なカフェに入った。ギャラリーを兼ねているらしく、壁に絵が飾ってある。

「……オレは、君の呪いの完成を待っていていいのかな」

「いつになるかわからないわ。あなたは、私があなを好きじゃなくてもいいの？」

「オレは君にベタ惚れだから」

そういえば、呪いが解ける前にエミィもそんなことを言っていた。

ヴォルターが私の顔を両手で包む。

「キスしていい？」

「理由が……ないわ。いいよって理由も、断る理由も」

目を伏せたまま言うと、ヴォルターは私にキスをした。

「何も感じないわ。前は確か、ドキドキしたもの」

「恥じらうって大事だな……。先生はオレが呪いをかけるっていうのを提案したんだろ？」

「クライヴはね」

「オレがかけてたい」

「……でも、もう私も習ってるのよ」

「先に習得できた方がかけよう。早く君の笑顔がみたい」

にいと笑ってみせると、ヴォルターは口を尖らせた。不服な顔だ。

「作り笑いじゃない笑顔のことだよ」

「そう」

ヴォルターはいつものように私に腕を組んでほしいと言ったけれど、なんだか歩きにくくて仕方なかった。

非効率も是とする感情だったんだわ……。感情があれば感涙の涙が流れたに違いない。

「……ねえ、ヴォルター。私がこのまま心がなかったら、どうする？」

「今のしゃべるお人形を連れてるような状態は、終わりがあると思えるからこそ我慢できてるんだ。このまま心がないなんて、オレは泣いてしまう」

「ご、ごめんなさい。泣かないで。大丈夫よ。呪いの勉強はきちんとしているから」

「そういう時はね、ヴォルター愛してるよ、大丈夫よって言うんだよ」

「そうなの？ じゃあ、今まできつと間違えてたのね。愛してるわ。大丈夫よ」

ヴォルターは、私がい終る前にぎゅーっと抱き締めてくれた。私、これが好きだったはずなのに……。嬉しいという気持ちは、どんな感情だっただろうか。

エミィにも心がないことをひた隠しにしている今、感情のことを教えてくれるのはヴォルターしかいない。

むしろ、今まで間違ってたことも聞きやすい。……私のヴォルターに対する接し方は、けっこう間違っていたみたい。

ヴォルター……つまり、恋人が悲しい顔をしていたらキスをしてあげるとか、抱きしめるとか。そういうの、誰も教えてくれなかったわ。

「いよいよ……。実際に呪いをかけてみましょう」

ボスホロヴァ先生が言ったのは、呪いを習い始めて1ヶ月ほど経ったときだった。

「まずはココロさんから。失敗しても何も起こりません。深呼吸して……はい、どうぞ」

自分の名前を抜き取って、魔力を押し込むイメージ……。

パリッと、胸の奥が痛んだ。ぐいぐいと心臓や肺みたいな内臓を掴まれているような痛みのもとに、ぐーっと感情が流れ込む。

ぼたぼたと涙がこぼれた。

「ココ!？」

ああ、成功だ……。

「ヴォルター……愛して……って、あなた、嘘を教えたわね!?もう……！ 信じられない！」

「あ、ごめん。つい、面白くて」

感情がないって恐ろしいわ。

疑うこともしないし、周りに変な目で見られてたとしてもきっと気付かないもの。

「先生、ありがとうございます！」

「楽しかったですね」

ボスホロヴァ先生が初めて笑うのを見て、なんだかほっとしながら研究室を出た。

じわじわと達成感が広がっていく。

1ヶ月、打っても響かないような状態の……人形のような私を支えてくれたヴォルターには、感謝してもしきれない。

「ヴォルター、私、あなたのこと好きよ」

「……嬉しいよ」

ヴォルターが、私をぎゅうっと抱きしめた。ドキドキするし、嬉しい。好き。

ようやく、感情が戻った実感がわいた。とても嬉しい。嬉しいって感情がわかるのが、嬉しい。

「クライヴは元気かしら」

そういえばクライヴ、危険なところへ行ってるのよね。

あの人なら、何か知っているかしら。ロダン先生を訪ねると、彼はまず私の感情が戻ったことをとても喜んでくれた。

「ロダン先生、クライヴはどこに行ったんですか？」

「女神が降り立った地って言われてるところよ」

「……吸血鬼ばかりなんじゃ……」

「それどころか、悪魔もいるらしいわ」

「なんでそんなところに」

「さあ。もう彼は戻らないつもりでしょうね。ずっと探して、研究して……」

探す？

「クライヴも、ドロテアを？」

「そうね……。ドロテアと……女神かしら。魔法史学者のロマンだもの。それから、もうあなたは彼の養子じゃないんだから、クライヴなんて呼んじゃだめよ、間藤ココちゃん」

「あ……！ す、すみません……」

もう、クライヴはただのお父さんの友達……他人なんだ……。

「私……魔力を辿る方法の研究を……します」

「あら」

「……ブレナン先生は、間違いなく私のパパだったもの。もう私に彼の魔力は混ざってないし、魔力を感じることができるはず」

「応援するわ。彼、本当はあなたが入学する前に旅立つ予定だったの。この6年間、とっても楽しそうだったわ」

「はい。でもあんな別れ方、絶対に許せないわ」

「7年生はほとんど授業がないから、もう研究に着手してもいいかもね。だからこそクライヴも旅立ったんだろうし」

「はい」

私はもうすぐ、7年生になる。

「ココ、デートしましょ」

「あ……うん」

7年生は本当にほとんど授業がない。私はエミィに誘われて、本当に久しぶりに外に出た。

「卒業研究、進んでみたいね」

「ええ……」

1年じゃ到底無理だから、進んだところまででいいって言われてる。それでも、手を抜くわけにはいかないし、みんなと同じように図書室か寮で調べものをしていた。

「ヴォルターとはうまくやってる？」

「……彼も、卒業研究があるもの。……たまに、すっごく会いたって思う時があるんだけどね」

「ふふっ、それを素直に伝えた方がいいわ」

ヴォルターは、久しぶりに会う時いつもぎゅーっと充電するみたいに私を抱きしめた。何も言わないけれど、ヴォルターにもすっごく会いたって思う時があるのかな。

そうだったら嬉しいなあ。

「ココ、学校の外に家を借りるんでしょう？ そっちはどうなの？」

「そっちは……、うん。進んでるわ」

チェルソのお母様のついで、路地の奥の奥にある一軒家を借りることになった。地元の子達が魔女の家と恐れる家らしい。ただの立つつけの悪い空き家らしいので改装が大変そうだけど、名実ともに魔女の家となるのは少しわくわくする。

実際に見てみると、家はけっこうボロボロだった。

「うわー、こんなだったっけ」

「やりがいはあるわね」

壁紙の中身は鉄筋とコンクリートね。それから、床の木材は……。何かしら。まあ、適当に黄色がかった木材でいいわね。

「ココ、俺どうすればいいの？」

「鉄筋とコンクリートと、この床の木材を買いに行きましょう」

「荷物係か……昼間だし、確かにヴォルターには無理か」

お店の資材売り場で適当なものを購入しては運ぶのを繰り返した。どのくらい要るかわからなかったから、とっても大量になってしまった。

「これをどうするの？」

「ふふふ……見てて」

空中に大きなハートを描くと、買って来た資材がズズズ……っと家に飲み込まれていった。みるみるうちにボロボロの壁は綺麗になり、外からの見た目よりずっと広い部屋ができあがった。

「次元変異と物質変異を組み合わせたの。物質変異って、思ってるより楽よ。材料と魔力を放り込むだけなもの」

「……いやいや、分量を考えなきゃいけないじゃないか」

「そこで次元変異よ！ 次元を曲げることで、資材を全部使って外の幅は変えずに中を広く使えるの」

「わかるような、わからないような」

「チェルソ……卒業研究大丈夫？」

「大丈夫だよ。ココが言ってることはちょっと高度すぎてわからないけど。もうそろそろ日が暮れる。ヴォルターも来るんじゃない？」

「そうね」

新築のようになった部屋でチェルソと一服しながら日が暮れてヴォルターがやってくるのを待った。

「アンブラと……遠距離になりそうなんでしょ？」

「パリはちょっと遠いよねー。俺どうしようかな。ココだったらどうする？」

「さあ……。私達、離れるっていう選択肢がそもそもないわ」
「ヴォルター、ヒモになるんじゃないの？ ココ大丈夫？」
「……………爵位があるから働く必要ないって……。侯爵って、何をするのかしら」
「えっ、吸血鬼の貴族だとは聞いてたけど、侯爵!? けっこうすごいじゃん」
「すごいのか？ 貴族制度なんて全然わからなくて……」
「吸血鬼は、確か女神を大公として、始祖の末裔が公爵で、その分家が侯爵だよ。そうか……直系の分家だったんだな……」
「……マティアス……公爵って言ってたわ……。始祖の末裔ってこと!？」
「そ。今の吸血鬼の中じゃずば抜けて重要な人物だね。ココ、知らなかったんだね。……まあ、じゃなきゃ話しかけないか。けっこう失礼なことも平気で言うし、俺やマーリーは冷や冷やして見てたよ」
「言ってよ……」

爵位って、ややこしいのよね……。どれが一番偉いのかもわかってなかったわ。

それにしても、チェルソもけっこうしっかりしてるのよね。チェルソにはよく魔法使いや吸血鬼の政治経済を教えてもらってる気がするわ。

「まあ、ヴォルターは遊んでても十分やっていける金持ちってことだね」
「そんな認識でいいの？ ほら……爵位によって、領地があったり……っていうのは？」
「それは昔の話。吸血鬼は爵位が高ければ高いほど強い、いわば恐怖政治を敷いてる。下の者が黙って支えてるはずさ。そもそもその下の者も、食材はそこらへんを歩いてるんだから、食費なんか稼がなくていいからね」

そうか……。全然知らなかった。吸血鬼じゃなくてヴォルター個人が大事だと思ってたけど、吸血鬼のことも知っていかなくちゃいけないわね。

「二人とも、お疲れ様」
「ヴォルター！」
「差し入れを買ってきたよ」

ヴォルターがケーキの箱をちょっと持ち上げて見せる。

「ありがとう」

ケーキを食べながら、ヴォルターがのんびりと部屋を見渡す。

「ここがオフィスになるのかい？」
「そうよ。奥にソファーとテーブルを置いて、あとは……壁際に本棚を置いて……」

あとは、日光をシャットアウトしなくちゃね。
カーテンでいいかしら。窓をなくしてしまうのはちょっと辛いわ。
ヴォルターは生クリームを口の端に付けたまま顔をあげた。……まあいいか。ヒモ上等じゃない。

「……チェルソ、やっぱり、アンブラと一緒に行くべきだと思うわ」

離れるなんて、考えられないもの。

エピローグ～ココにあるもの～

卒業式は、入学式と同じようにホールに並んで行われた。危険な魔法の使用や魔力の低下で入学式の5分の4程度にまで人数は減ってしまったけれど。

「……みなさん。7年間、よく学び、よく成長しましたね」

姿の変わらない校長先生が、少しだけ口元を綻ばせて言う。

校長先生が一人一人の顔をじっと眺めながら滔々と話している。

ああ、確かに声が上ずってるなあ。だって校長先生は、ほとんど接触なんかなかったけれど、ずーっと私達を見守ってくれてたんだものね。

「魔法使いは毎年1000人ほど生まれますが、エヴァンジェリン魔法学校を卒業できるのは毎年40名にも満たない……。あなた達は、魔法使いの中の、魔法使いです。そうあってください」

校長先生が話し終わると、卒業式は簡単に終わった。

クライヴは、来なかった。日本から、お父さんが会いにきてくれた。

「ココ……、無事卒業したようだな」

「はい。お話しした通り、私こっちで……」

「ああ、伝えに来たのはそれじゃない。親父が死んだ。俺は間藤家を継ぐ気はない。今日からお前が当主だから、よろしくな」

「ちょっと、お父さん。待って……、わ、私、侯爵夫人に……っ」

「何を言ってる。あっちの親御さんとは話がついてるから、彼には婿養子になってもらう」

「か……、勝手すぎるわ！」

「……」

ぐしゃっと、初めて、お父さんから頭を撫でられた。

頭を撫でる。感情を手に入れて初めて知った、愛情表現の形。

「お前が怒っているのを見るのは、初めてだな……。親父のせいで……いや、親父を止めなかった俺のせいで、すまないことをした」

「……、でも」

「クライヴから連絡があった。まだ生きてるらしいから、早く捕まえてくれ」

「……はい」

間藤家の、当主か。

「日本に帰らなくてもいいの？」

「どっちでもいい」

「どっちでもいいって……」

「どこでもドアできるんだろ？ すぐに帰ってこれるなら、いいじゃないか」

「うっ……」

どこでもドアが通じるわ……！ 嬉しい……。

「どうした」

「いえ……、研究の先進地にはいたいから、こっちに住みますが……たまには、帰ります」

「そうしろ」

別れ際、お父さんはもう一度私の頭を撫でた。

「俺的にはクライヴもいい年だから、あいつにやっつつもりなんだが、まあ……なんだ。よかったな」

「娘をモノみたいに言わないでください」

煮ても焼いてもいいってほんとにそういう意味だったの？

我が父ながら、本当に理解できない。

娘を失うのが怖くない、か。まあ、じゃなきゃ吸血鬼と付き合うのなんて普通反対するわよね。

「……それじゃあな」

「お、お母さんは、元気ですか」

「ああ……。まあ、元気な方だ」

希。のぞみさん。絶望して絶望して、絶望する母。あの人を恐れないのは、確かに恐れが欠落した父だけなのだろう。普通だと思ってたけど、今は母が怖い。でも家族だから。

「……ココも元気ですって、伝えてください」

「わかった。じゃあな」

父が去ると、ヴォルターがやってきた。

「卒業おめでとう、ココ」

「あなたも」

「さっき親父から聞いたんだけど、オレ、婿養子だって？」

「……そうらしいわね」

「結婚することになって、いいのかい？」

「私は、侯爵夫人になるつもりだったけど……。どっちでも一緒よ。あなたがいればいいんだから」

「……人間社会に入るなら、働かなきゃなあ」

悩んでるわ。ボンボンだものね。

いざとなったら研究の助手として雇ってあげよう……。

マーリー、アンブラ、チェルソ、マティアスにそれぞれ挨拶して、最後にエミィを捕まえた。

「エミィ、卒業おめでとう！」

「ありがとう。ココもおめでとう」

「エミィも旅なのね……。いつでも寄ってね」

「ええ。そうするわ。ヴォルターと仲良くね」

ぎゅーっとエミィに抱きつくと、エミィもハグしてくれた。7年間、時々けんかもしたけど、いつもこうだった。私の初めての友達だ。

「……ドロテアが見つかったも、サクラティが見つかったも……。ずっと友達よ。約束よ」

「ええ。ありがとう」

感情を、手に入れた。魔法、友達、恋人。全部手に入れた気がする。

最高の学校生活だった。これは、まぎれもない事実なのだ。

ココにあるもの

<http://p.booklog.jp/book/78098>

著者：じゅしん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jushin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78098>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78098>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ